14.5-79
1200501213596

14.5
79

昭和二年三月

兵庫縣史蹟名勝天然紀念物調査報告

第四輯

兵庫縣

始

145-79

凡例

一　兵庫縣史蹟名勝天然紀念物調査報告第四輯成ル。收ムルトコロ總テ十九項、卽チ史蹟七項、名勝一項、天然紀念物十一項ナリ。コレ等ハ主トシテ大正十五年度ノ調査ニカヽルモノニシテ、混フルニ前年度ノ調査報告ニ登載スル能ハザリシモノヲ以ッテセリ。

大正十五年度ノ調査ニカヽルモノニシテ、已ニソノ稿ヲ脫セルモノ尠カラズ。卽チ神戸市眞光寺及ビ能福寺、津名郡鳥飼八幡、同郡妙勝寺、淡路國分寺趾、三原郡千手松、氷上郡宗蓮寺ノ大柯樹、同郡山口神社ノ大杉等ハソノ一部ナリトス。コレラハ紙數等ニ制限セラレテ本輯ニ收錄スルヲ得ザリシモノ、次輯ヲ俟ッテ報告センコトヲ期セリ。ナホ其ノ他、目下調査中ノモノニ川邊郡多田神社、多紀郡日置八幡、氷上郡石龜寺、丹波ノ一里塚、宍粟郡發見ノ銅鐸、三原郡大和大國魂神社、津名郡岩屋ノ砲壘等アリ。

一　次ニ本年度ニ於ケル調査ノ概要ヲ記サンニ、既記ノ委員八氏ヲ分ッテ數班トナシ、地ヲ更ヘテ實地ノ調査及ビ踏査ニ從ヒタリ。卽チ、史蹟ニ屬スル一班ハ大正十五年八月三原有馬川邊ノ三郡下ニ出張シ、ソノ地ノ主ナルモノニ就キテ實査スルトコロアリ、他ノ一班ハ同年八月淡路二郡ニ亘リテ概括的調査ヲ試ミタリ。而シテ天然紀念物ニ關

シテハ、山鳥・松本兩委員ハ協同シテ事ニ從ヒ、同年十一月播陽ノ一部ヨリ丹波二郡ニ及ンデ調査ノ歩ヲ進メ、別ニ西尾委員ハ數回ニ亘リテ神崎・朝來及ビ養父・永上等ノ諸郡ニ出張シ踏査スルトコロアリタリ。ソノ外、渡部委員ハ同年十月多紀・永上兩郡下ニ探査ヲ試ミタルヲハジメ、臨時ソノ必要ニ應ジテ調査スルトコロアリタリ。

一　本輯ニ收錄セルモノ、調査ニ當リテ、關係市町村學校長ソノ他地方特志家ヨリ、公私ソノ便益ヲ得タルトコロ尠カラズ。就中、淡路市村々長北内元三郎、同助役早瀬和一、同村吉田傳次郎及ビ不動安七、三條八幡神社々掌高島主一、武庫郡住吉村長前川萬吉、同村遊喜園長森川長左衛門、有馬町柴書記、湯泉神社々掌伊藤史生、加古郡八幡村長小田岩作、加古川史談會門野齊之助及ビ野間節二、揖保郡書記中原熊次、斑鳩寺住職山本惠眞、三原郡加茂村長武田恒一、千光寺住職和田性海、御神嶽神社安部萬次郎、姫路市視學土屋志摩稻、同市書記石田德次、加東郡瀧野町長神戸經治、同町書記森岡市司、同區長保勝會長長谷川潔、同町漁業組合阿江龍三郎及ビ阿江正二、同郡丸山伊八郎、氷上郡葛野村役場齋藤幸太郎、同郡神樂村足立作藏及ビ足立與四郎等ノ諸氏ヨリ諸種ノ便宜ヲ得タリ。又寫眞ニ就イテハ京都帝國大學文學部寫眞室主任鈴木增次郎氏ノ好意ニ負フトコロ尠カラズ。特ニ記シテ感謝ノ意ヲ表ス。

昭和二年三月

兵庫縣史蹟名勝天然紀念物調査報告　第四輯

調査報告目次

史蹟

第一　淡路ト西宮ニ於ケル人形操ノ調査……一頁
武庫郡
第二　菟原ノ處女塚……二〇
有馬郡
第三　湯泉神社並清涼院……四四
美囊郡
第四　弘計・億計二王隱棲傳說地(補遺)……五五
加古郡
第五　八幡村ノ調子塚古墳……五七

揖保郡
第六　鵤庄及斑鳩寺……六三
三原郡
第七　千光寺……七〇

名勝

加東郡
鬪龍灘……七九

天然紀念物

姫路市
第一　姫山公園ノ原始林……八五
印南郡
第二　菊ノ原種ノ野生北限地……八七

加東郡
第三　光明寺ノ三本杉……八九
養父郡
第四　樽見ノ仙櫻……九一
朝來郡
第五　玉林寺ノ垂櫻……九三
氷上郡
第六　柏原八幡ノ木ノ根橋……九四
第七　大名草ノ大公孫樹……九五
第八　高山寺ノ大公孫樹……九六
第九　高山寺ノ二本杉……九八
第一〇　高山寺ノ三本杉……九九
第一一　大歳神社ノ大杉……一〇〇

挿圖目次

第一　淡路市村附近地圖……一頁
第二　「御綸旨」……七
第三　淡路三條八幡攝社百太夫社……二
第四　百太夫圖……一四
第五　處女塚所在地附近地圖……三
第六　住吉村吳田ノ求女塚地籍圖……三
第七　有馬町附近地圖……三
第八　寶永六七年頃有馬温泉神社及ビ温泉場……四
第九　八幡村附近地圖……五
第一〇　斑鳩寺附近地圖……六
第一一　先山附近地圖……七
第一二　千光寺鐘樓……七
第一三　比叡山横川發掘如法經塔銅套……七
第一四　御神獄神社舊社地……七
第一五　淡路國文庫藏書……七

第一六　瀧野町附近地圖……七九
第一七　鬪龍灘附近見取圖……八〇
第一八　鬪龍灘ニ於ケル鮎漁獲ノ圖景……八一
第一九　姫山公園附近地圖……八五
第二〇　石ノ寶殿附近地圖……八七
第二一　樽見附近地圖……九一
第二二　興布土村附近地圖……九三
第二三　柏原町附近地圖……九四
第二四　大名草附近地圖……九五
第二五　高山寺附近地圖……九七

圖版目次

第一　(一)三原郡市村三條古墳
　　(二)人形操座演技ノ圖
第二　(一)角目頭ヲ用ヒタル立役ノ姿
　　(二)右ノ頭部
　　(三)娘頭
第三　(一)操人形ノ圖
　　(二)操人形(俗ニ山猫トイフ)ノ圖
第四　(一)人形遣ヒノ圖
　　(二)人形芝居樂屋ノ圖
第五　東明ノ處女塚
第六　(一)吳田ノ求女塚
　　(二)同上發見三角緣三神三獸鏡
　　(三)同上發見車輪石
第七　(上)味泥ノ大塚山
　　(下)脇濱ノ乙女塚

第八　如法經箱陰銘拓影
第九　(一)八幡村ノ調子塚古墳全景
　　(二)同上古墳發見埴輪樹物片
第一〇　(一)八幡村ノ調子塚古墳外形圖
　　(二)同上古墳發見埴輪圓筒實測圖
　　(三)神野村西條部落內地藏堂前ノ石棺蓋實測圖
　　(四)同村內縣道ヲキ地藏堂祠ノ石棺蓋實測圖
第一一　(一)調子塚古墳發見埴輪樹物片
　　(二)同上埴輪文樣拓影
第一二　(左)聖德太子講讃勝鬘經圖
　　(右)木造釋迦如來坐像
第一三　木造十二神將立像
第一四　木造日光及月光菩薩立像
第一五　千光寺本堂及ビ二重塔
第一六　(一)千光寺梵鐘刻銘拓影
　　(二)同上梵鐘追刻銘並ニ撞坐拓影
第一七　(一)千光寺鐵製如法經塔套

(二)同上刻銘拓影
第一八　(右)千光寺鰐口拓影
(左)千光寺庚申塚
第一九　闘龍灘　ソノ一
闘龍灘　ソノ二
第二〇　姫山公園ノ原始林　ソノ一
姫山公園ノ原始林　ソノ二
第二一　(上)姫山公園ノ原始林　ソノ三
(下)姫山公園ニアリシ葛ノ大木ノ横断面
第二二　石ノ寶殿ニ於ケル[のちぎく]ノ群落
第二三　(左)光明寺境内
(右)光明寺内大慈院ノ大杉
第二四　樽見ノ仙櫻
第二五　玉林寺ノ垂櫻
第二六　柏原八幡ノ木ノ根橋
第二七　(左)大名草ノ大公孫樹
(右)同上大公孫樹ノ乳瘤

第二八　高山寺ノ二本杉

史

蹟

史蹟調査委員　魚澄惣五郎
同　辰馬悦藏
同　中村直勝
同　吉井太郎
同　渡部多仲

第一　淡路ト西宮ニ於ケル人形操ノ調査

〔圖版第一―第四〕

一　淡路操ノ現狀

淡路國三原郡市村三條ニハ往時ヨリ人形操ヲ職業トスル者多ク現在ニ於テモ餘蘖ノ存スルアリ。就中、上村源之丞ハ今德島市新榮町ニ轉ジ同地ニ於テ稻荷座ヲ起シテ家業ヲ繼承セルモ淡路トハ當面ノ關係ヲ絕テリ。他ニ中村久太夫、市村六之丞福永幾太夫、吉田傳次郎ノ各座有名ナリシモ近年相繼テ廢業スルニ至リ僅カニ豐田氏ガ市村六之丞座ヲ繼承シ、錦玉吉川安五郎其他數家ノ存在ニヨリテ古昔ノ俤ヲ止ム。

第一圖　淡路市村附近地圖

右ノ如ク現在ニ於テ衰微ノ風調ヲ呈スルニ至レルハ此等多クノ座ガ聯立シテ一小地方ニ經濟的存在ノ使命ヲ全クスベク世ハ餘リニ物質文明ノ進歩發達ヲ來セルガ爲ニシテ、此ノ自然的趨勢ハ或ハ當然ノ傾向ナリヤ否ヤヲ知ラズト雖モ古來ノ傳統的鄕土藝術ノ漸次衰滅ニ向ハントス

ルハ哀惜ニ堪ヘザル所以ナリトス。然リト雖モ阿波地方ノ雰圍氣ハ聊カ是ガ鞠育ニ相應スル醗酵素ヲ生ゼシメツヽアルハ稍人意ヲ强クスルモノアリトイフベシ。本年八月本員ハ同地ニ出張シテ是等ヲ調査セシガ三條ノ操師ノ大部ハ阿波、讃岐、伊豫又ハ九州方面ニ巡業中ノ者多ク、近時廢業ノ吉田傳次郎家ニ付キ聊カ材料ヲ得タレバ左ニコレヲ叙述スベシ。

當時吉田氏ハ同村ノ操師不動安七ヲシテ殘存スル人形ヲ以テ實演セシメタリ。其操法ハ大阪文樂座等ニ於テ行フモノト全ク同一ナリ。

人形(木偶)ヲ大別スレバ頭胴手足ノ四大部ニ分ル。圖版第二ノ(一)ハ角目頭ヲ用ヰタル立役ノ姿ニシテ豪壯ナル男性ノ所作ニ使用ス。手ノ指ヲ活動セシムル機關アルニ注意スベシ。ソノ(二)ハ其頭部ノ廓大圖ナリ。下部ノ裝置ニヨリテ眉、眼球、口ヲ動カスコトヲ得。同圖版ノ(三)ハ娘頭ニシテ所謂女性ノ面ナリ。コレ等ニ相等ノ扮飾ヲ加ヘ衣裳ヲ着用セシメバ以テ完全ナル操人形トナル。圖版第一ノ(二)ハ卽チ舞臺ニ於テ實演セル光景ナリ。此ノ出シ物ハ『奥州秀衡有髮ノ花聟』ト云フ題目ニテ『秀衡館ノ段』ナリ。四個ノ人形ノ背ニハ夫々操師アリテ分擔シテ演技ニ任ズ。寫眞前面ノ下部ハ一般ノ觀衆ナリ。以テ實演ノ大概ヲ察スベキナリ。

二　操ノ沿革

以下進ミテ此地ニ於ケル操ノ沿革ニ付テ叙述スル所アラントス。三條ノ操ノ沿革ハ極メテ傳說ノ香氣高ク一種ノ藝術的感興ヲ覺ユレドモ隨ツテ事實ノ眞相ヲ把握スルコト難シ。劈頭先ヅ左ノ傳說ニ就テ記セザルベカラズ。淡路名所圖會(第三)ニ曰ク

道薫家傳曰蛭兒神滄溟に漂ふこと多年にして和田の崎にて光神となる。時に漁人ありて邑君と號し百太夫と稱す。姓は藤原、名は正清といふ。海上に兒童あり貌神の如し、託宣すらく我は蛭兒なり我宮殿なし汝海濱に假宮を立よと、卽ち西宮戎三郎殿これなり。こゝに道薫坊といふ者ありて神に給仕よく神意に合へり。道薫身沒て後は神を慰むる者なき故に風浪起りて海陸ともに大に困しめり。仍つて百太夫此事を朝廷に奏し、勅を奉けて道薫が形を造り舞せければ、神よろこび給ひて海陸ともに謐になれり。夫より百太夫は國々を巡りて、此術をもつて衆神を祭り神慮を慰むるを業とせり。後に百太夫淡路國に止り此三條村に住し其業を傳ゑ來るとなり。

或云攝州西の宮戎社の邊りに三條といへる地あり。此なんもしや百太夫の住せし舊地にやあらんか。其舊名をもつて此淡路に來りても三條と號るならんかとも云。傳ていふ上古此地に道薫坊といへる翁ありて、大神につかへ神慮を慰め奉るに、木偶を造りて是をつかひ舞せしとぞ。是世に傀儡師といへる者の濫觴也。俗に木偶をでくの坊といひ、木偶をつかふ者をでくづかひといふは此道君坊のよこ訛れるなりと云。

里老の傳說に往昔西宮に百太夫と言もの木偶を携へ淡路に來り此村の麻績堂に長く寄宿せり。時に此村の木偶師菊太夫なるもの、百太夫を伴ひ歸り留めける內菊太夫が娘に契りて懷胎す。然るに夫より幾程なくして百太夫は病歿す。其胤の男子は菊太夫が家を嗣で血脈および木偶師の業をも連續す。又百太夫が綸旨を珍藏せしが之も菊太夫が手に渡りしとか

や。後年に至り西の宮の傀儡と淡路の道薫坊と闘爭の事ありて京都の裁許に預りけるに命じて云、菊太夫は綸旨を傳持すれば彌淡路の道薫坊を以て本朝の最上と定められたりと云。斯ノ如キ說話ハ今モ同地操師ノ口述スル所ナリ。而シテ操ノ最盛期ハ享保元文ノ頃ニシテ當時座ハ四十餘株ヲ數ヘタリ。文政八年藤井彰著ハス所ノ「淡路草」ニヨレバ、「今十八組殘れり十八座本と稱す」ト記シタレバ、享保年間ヨリハ漸次減少セルコトヲ推セラル。十八座本ノ氏名並ニ現狀左ノ如シ。

氏名	現在ノ狀態（市村助役早瀨和一氏ノ調査報告ニヨル）
上村日向掾	引田源之丞ノコトニテ徳島市ニ現住ス
上村平太夫	五十餘歳ノ老婆一人現存スルモ座ナシ
喜右衛門	絶
金右衛門	絶（岡本澤二郎氏現存セルモ座ハナシ技藝ノ方ハ豐田直太郎氏コレヲ受ク）
市村六之丞	
吉川十太夫	菊太夫ノ別家　絶
久太夫	絶
吉川安五郎	錦玉氏此技ヲ傳フ　座絶
久保田勘右衛門	浪花伊右衛門氏アリ　座絶
戎屋　久右衛門	絶
小林六太夫	現存（但鮎原西村）
市村金四郎	絶
市村政之助	現存　近年廢業
吉田傳次郎	福永國平現存セルモ座ハ絶
髭福八太夫	絶
磅示川　彌二郎	絶
福永幾太夫	絶（因ニ菊太夫トイフ者ノ跡ハ吉美氏コレヲ繼ゲリ）
龍助	

次ニ史料通信叢誌第四編後冊ニヨレバ右ノ淡路草ヲ拔抄シテ左ノ記文アリ。

一書云京都に瀧野撿校淨瑠璃を作り、四條東洞院彫金工某淡路の傀儡を誘ふて木偶を廻し三絃に合せたり。後陽成帝禁廷に召れて叡覽あり、御感ありて木偶舞に受領を賜ひ、引田淡路掾に任せらる。

三條村戎屋某（名久右衛門）曰往古御綸旨燒失の時當村の老叟兩人上京し再賜の事を願ふ。官庫にも御控とも見へがたきにや大に月日を重ね漸く今の一軸を下されしと云。今是を見るに一書の斜迄は日本紀の文其儘也。渾て綸旨の式に違へり。奥書の坂上入道不審也。綸旨に入道せし人は書入べからず。間に合に百太夫傳得の後作り與へしなるべし。（文長きを以て略之）

右の眞書（○綸旨を指す）は村の寶庫に納置祭禮虫干の時ならでは是を出さず廿餘座の傀儡師各寫し

の書を持て他國に出る也。又同村大御堂（廟續堂とも云）の傍夷の社内に道薫坊及百太夫の像を安置す。毎年正月六日百太夫の祭ありて右の眞書を像前に備へ座本各通夜なし拜禮の式ありと云。近年浪華松好齋が著はせし樂屋圖會に載る所は全く右の書によれりと見ゆ。圖繪中に狂歌二首を載す。

傀儡師足も淡路を胞衣にしてうみにし國や筑後越前　鐵格子波丸

首かけの人形廻しのほつたんは西の宮から始り始り　天王寺蕪坊

一芝居舞臺に掛る相傳の額

傀儡師等受領のこと中頃より止められしに源之丞に限りて日向掾と稱しかゝるいかめしき額を掛國々往來して障る事なきはいかさま故ある家なるべし

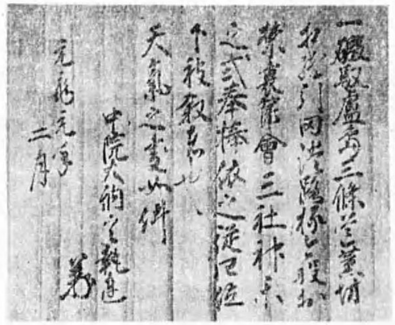
右ニ依ッテ略其傳說ニ彩ラレタル沿革ヲ知ルベキナリ。吉田傳次郎氏所藏ノ綸旨寫トイヘルハ檀紙ニ書シ禮紙ヲ附ス。

一碾取盧島三條道薫坊相繼引田淡路掾、今般於禁裏節會三社神樂之式奉捧、依之從四位下被叙者也、天氣之處如件

元龜元年二月

中院大納言執達（花押）

トアリ。此ガ原本トイフモノ今三條農業圖書館ニアリ。マタ吉田氏藏「道薫坊傳記」トイヘル一軸ニハ頗ル幽言ノ筆致ヲ以テ道薫坊ノ傳記ヲ記セリ。其内容ハ前記淡路名所圖會說ク所ト同巧異曲タリ。卷尾ニ寛永十五年文月十二日坂上入道トアリ。綸旨ノ年代ノ元龜ナルト此ノ由來書ノ寛永十五年ナルトハ操ノ起原沿革ヲ論ズルニ、主要ナル左券ナリト雖モ、史料討究ノ見地ヨリ見テ確實ナルモノニ非ザルハ明ナリトス。其起原ニ就イテ考察スルニ大凡慶長元和年間ニマデ溯原シ得ベキガ如シ。



第二圖「御綸旨」（吉田傳次郎氏所藏）

阿波ノ藩主蜂須賀氏ノ封ヲ德島ニ受ケシハ天正十三年ニシテ家政（蓬庵）ノ時世タリ。其子至鎭ノ時元和三年淡路ヲモ併セ領ス、其子忠英ニ亘ル三代ノ間人形操師ヲ保護シタル事實ハ今モ世ニ傳フル所ナリ。コレモ操ノ年代ヲ察スル一ツノ據ナルベシ。

猶淡路ニオケル百太夫ニ關スル傳說ニツイテハ、別ツテ二ツノ系統トナスベシ。卽チソヲ揭記シテ代表タラシムベシ。

音曲道智論ニ曰ク

傳に曰く攝州西宮惠比須大神宮の神主に森丹後といふものあり。同社家に森兼太夫といふ

もの兩家爭論の事ありしに公事の兼太夫負になりて男子一人同所へ養子に遣はし其身は同國尼崎稱念寺といふに便り後世の爲に工夫のうへ古き經箱をしつらひ少き人形を拵へ自作の文句に平家に似よりし節をつけ人形を舞しけり。町在ともに見物賞しけり。夫より京都に登り登世せしに大内炎上の節抵板築土のひまより此箱芝居を若宮樣御叡覽あり堂上堂下御見物なされいろ〳〵御ほふびをいたゞき其上日本諸藝操座宗匠諸能冠

勅　免　　上村兼太夫(山本とも)

淡路國三原郡三條村住人　當時元太夫とよぶ

後受領して上村日向少掾藤原百太夫淡州産所村に所縁あつて立越困窮の百姓へ人形を拵おしへ城主御免にて四十八座操取立これあり。國々へ銘々所持の口宣は右の寫しあり西光寺。といふに納あるゆへ右芝居にすむ太夫三紘西光寺へ納めしといふ。

今一說ハ淡路座秘書(南水漫遊拾遺所引)ニ曰ク

西宮に道薫といふ人御神の御心をなぐさめけると。是より海上波風靜かにして獵舟多くの魚を得る事久し。時に道薫しばらくいたみて身まかりければ、また風起り波高くして猶更獵もなかりしかば百太夫といふ人、人形を作りて神の御前なる箱のかたはらに身をひそめ人形を以て我は道薫なり尊の御機嫌を伺はん爲參りたりとて神心を慰さめける。是よりまた波風靜まりて獵もありけるとなり。其後時の帝此の事を聞し召され禁廷の政に出勤すべき由勅諚有けるゆへ、百太夫都に登りて此儀をつとむ。是によつて

大日本者神國故以慰神慮者爲諸伎藝首

かくの如き號を下され諸國諸社の神いさめの事勅免ありしより、胸に箱をかけ人形を以て神をいさめしなり。是傀儡師の始也。百太夫は諸國を巡りて淡州三原郡三條村といふ處にて身まかりけるに、何某の四人百太夫に傀儡師の業を習ひて此後傀儡のわざをなせり。是淡路座操の權與なり。右淡路座の操凡四十餘座あり。當時諸國へ聞えて名高きは上村日向掾を最上とす。往來帶刀御免にして芝居の表口に大日本諸藝首といふ額を懸る。

右二說ノ出所ヲ究メ其正否ヲ檢センコトハ今難事ニ屬ス。サレド何レモ其起原ノ西宮ヨリ發セルコトヲ說ク所ハ同一ナリトス。

三　史　料

市村役場所藏ノ『文化八年三原郡三條村棟付人數御改帳』ヲ檢スルニ左ノ記事アリ。

御藏道薫坊廻百姓

一壹家　日向　歳二十五

此者先祖源之丞義延寶元丑年棟付御帳左書ニ

棒　役　三本

御代々御赦免被爲成御書付御座候。右之内菊太夫佐太夫は源之丞役者に而御座候得ども、佐太夫菊太夫跡目慥成者無御座候に付、只今は源之丞座に居申役者之内に而引來申旨付上肩書無御座代々道薫坊廻仕居申、此度棟付御取調に付、右有姿申上候所、彼是御詮議の上

延寶度棟付御帳に、右の通相記有之儀に候得ば、右御引合を以此度の儀も夫役三人御引被下、且又肩書の儀は道薫坊廻百姓と附上候樣被仰付候

壹人　日向妻つち　同貳拾五

牛一疋

マタ

御藏道薫坊廻百姓

小家　日向伯父　吉之助　歳五拾八

此者前書日向祖父政七事源之丞惣領にて御座候處親跡の儀は勝手を以、弟清太郎事源之丞に相讓、寛政七卯年別家仕、道薫坊廻仕居申、此度棟付御取調に付、本家同斷道薫坊廻百姓と附上候樣被仰付候

壹人　吉之助妻きん　同五拾貳

壹人　同人養子清藏　同貳拾八

コレハ一節ニ過ギズト雖モ重要ナル史料ナリトス。人形操ヲ爲スコトヲ「道薫坊廻はし仕居申」トイヘルハ頗ル興味アリ。而シテ此ノ御改帳ヲ檢シテ文化八年ニ於テ本家タル上村日向(源之丞)ニ、拾七軒ノ分家(小家)アルヲ明カニスルヲ得タリ。以テ當時上村氏ガ如何ニ絶對ノ權力ト威勢トヲ支持シテ斯道ニ蒞臨セルカヲ察スルニ餘アルヘシ。猶此帳ヲ精細ニ檢索スレバ當年ニ於ケル從事者ノ總數其他幾多ノ事柄ヲモ窺知スルヲ得ベシ。

三條ノ氏神ハ八幡神社(大御堂又ハ麻績堂ト舊稱ス)ニシテ其境内神社ニ事代主神社アリ。御木像四基ヲ安置ス。卽チ鯛ヲ抱ヘタル戎神ノ外、羽織姿ノ道薫坊坐像及烏帽子狩衣ノ百太夫ト、其配偶ラシキ女體(又秋葉神トモイフ)ナリ。何レモ德川期ノモノナルヘシ。三田村鳶魚氏ノ記述ニヨレバ百太夫木像ノ臺坐ニハ

奉彩色四尊　再建寄附

當村中三ヶ村座本中

細工人　當村住大谷松次藤一將

維時文政二卯五月吉日

ト記サレタリトイフ。卽チ文政二年五月コレヲ修補セルコトアリシヲ知ル。三條ノ產土神ニ百太夫及道薫坊ノ合祀サレタルハ此技藝ノ祖神トシテ尊崇サレタルヲ徵スルニ足ル。又境内本殿ノ前ニ

第三圖　淡路三條八幡攝社百太夫社

蛭子大神宮

天明五乙巳十一月吉日　村中

願主　源之丞　同座中

ノ灯籠アリ。維新後モ明治五年引田日向掾座中献上ノ掛額、明治二十三年吉田傳次郎座中修繕奉納ノ鳥居、明治三十七年中村久太夫座中奉納ノ掛額、明治三十七年隠居上村源之丞座中奉納ノ額等アリ。以テ蛭子大神又ハ百太夫社等ニ致シタル操座中ノ赤誠報賽ノ情ヲ察スベキナリ。

津名郡中田村ニハ片山氏ヲ稱スル操師多ク住ス。三條ノ支流タルコトヲ肯定セリ。其起原ハ約二百年ノ昔、利平ナル者上村源之丞座ヨリ出デ上ト源ノ字ヲ襲ヒ上野源左衛門ト云フ操座ヲ組織シ、明治二十七八年ノ交コレヲ淡路源之丞ト改稱セリトイフ。人形ハ徳島ヨリ製スルモノヲ用ヰ各地ニ巡業ス。其方面ハ兵庫、和歌山、大阪、岡山、京都、香川、徳島、愛媛各府縣並ニ九州地方ナリ。(中田村役場回答)

津名郡鮎原村ニハ小林、若竹、桐竹、上村、濱田ノ諸氏等ノ傀儡師アリ。座名ハ小林六太夫トイフ。文政ノ十八座本ノ後ナルコトヲ想察スベシ。百太夫道薫坊ヲ祭祀シ正、五、九月ニ祭事ヲ行フ。コレモ各地ヲ巡行ス。其方面ハ紀伊、和泉、河内、伊勢、播磨、美作、但馬、四國、九州地方ナリトイフ。初メ源之丞ヨリ分レ日本第一諸藝諸能司小林六太夫藤原正清ノ稱呼ヲ許サレタリトイフ。(鮎原村役場回答)

四　西宮ノ百太夫及操

西宮ノ傀儡師及操ニ關シテモ其起原ハ詳カナラズト雖モ由來ハ中古ニ溯原スルヲ得ベシ。

西宮市西宮神社ノ末社ニ百太夫社アリ、祭神ハ道君(道薫坊又ハ百太夫トモ稱ス)ナリ。此社ハ元、本社境外北方ノ小林字産所ニアリシヲ天保年間今ノ位置卽チ境内本殿ノ西方ニ移シタルモノナリ。古ク記錄ニ見エタルハ一本伊呂波字類抄廣田社ノ條ニ

百太夫　文　珠

トアルヲ初見トス。降リテ傳説ノ典據トモナルヘキ記錄アリ、「名所西宮案内者」ニ(享保以前ノ著ナラン)

境内ヲ北ヘはなれて半町ばかりに祠あり。磐楠船の神代此浦にすめる翁道君と名づく。大神の三歳脚立給はぬと申すころにや人形雛形をつくり慰め育て奉りし翁とて今も生れ子の百日にあたれる日は皆此神前に連れ詣で名を定め壽をいのれる也。そなへものには五つ貫の團子也。是も神代より傳へ來れる習はしと見えたり。世の諺に西宮の人形廻し亦人形を道君坊と申すも此神のいはれにや。今は生れ子の壽をいのれるよりして百太夫の社と申す。

マタ「攝陽奇觀卷二」山上村ノ條ニ

西宮の北に山上村といふあり。此處に百太夫の末孫笠井氏なるもの家數六軒にして枝葉數家に分れ共、株は六軒の外に增ことなし。往古は西宮の民家の婦女此地へ來りて平産をなす所ゆへ産所と唱へしが、今は其事も絶て地名も山上と文字を改む。百太夫の宮へ産れ子を參詣させるも産所の忌明のならひ歟。平人、笠井氏を厭ひて緣組をなさずとぞ。

マタ「攝陽落穗集卷三」ニ

西の宮百太夫の事　西の宮惠比須の北に小宮あり。内に納る像は三歳計なる小兒の坐したる人形なり。是神にあらず。毎年正月白粉をもつて厚さ三四分ばかり顔にぬりおくなり。此邊に其年生れたる小兒宮參の時此人形の顔を撫でゝその白粉を小兒の顔にぬるなり。是

第四圖　百太夫圖

ほうそう惡病を除くといふ。又曰く是日本人形の初めなりとて、此人形あるを以て西宮に笠井氏といふ人形芝居の株あり。浪華人形芝居の株も此所より得たるか。淨瑠璃かたるもの皆百太夫と名を付るは此人形百太夫と稱する其由緣なるべし。

マタ喜多村信節ノ[讀證錄]ニ

百太夫はおのれ文化八年の春、津の國西宮にまうでしに御本社に向ひて左のかた半町餘り奥に小祠ありて扉開きたりその内にいと古き雛のやうなる人形あり。冠衣にて坐する形、面は新たに紅白粉をきたなげに塗たり。これ百太夫の神像なり。

以上ノ說話ヲ綜合敷衍スルニ、傀儡師ノ祖先ナル百太夫ト稱スル者、古ク此ノ浦ニ住ミテ人形ノ技藝ヲ開始シ蛭兒大神ニ因メル事ドモ又ハ種々ノ技藝ヲ演ジ、神前ニテモ俳優ヲ仕ヘ奉リ自ラ妙處ヲ得タレバ世間ニ賞讃セラレ、隨ヒテ此技ヲ學ブ人多クナリユキ、相傳ヘ相敎ヘテ後世ニモ其開祖ヲ慕フ者尠カラズ、遂ニ一祠ヲ建テヽ祀ルニ至レリトナスヘシ。現今ニテモ土人皆斯ク信ゼリ。

攝津名所圖會ニモ[傀儡師は末社百太夫を祖とす]トアル如ク人形遣ヒノ祖神ト崇メラルヽハ頗ル由緒アル事ニ屬ス、今神主家日記ニヨリテ其消長ヲ叙センカ。

元祿ノ頃ニハ產所村ハ戶數三四十アリテ皆コノ人形廻シヲ營ミ正德年間ニ笠井治兵衛アリ(落穗集ノ所謂笠井氏カ)、享保五年三月二十七日ニハ尼崎領主松平遠江守忠喬ノ姬君ノ操芝居見物アリ、享保八年十月十九日ニハ產所村ノ八郎兵衛トイフ傀儡師來リテ神主ニ對シ同村困窮ノ次第ヲ訴ヘ爾今境內ニテ人形あやつり興行ヲ許可セラレンコトヲ請ヒシ由見エタリ。尋デ享保九年四月二日ニハ再ビ尼崎領主姬君ノ芝居見物ヲ記シ、享保十二年ニハ同村ニ座本四郎三、同年寄八郎兵衛、上るり太夫茂太夫ナドアリテ廣田神社遷宮ニアタリ操人形ノ一段切追出シ興行ノ許可ヲ得ル爲、當時ノ神主吉井宮內ニ一札ヲ納レタリ。卽チ左ノ如シ。

一札之事

今度廣田御遷宮に付今月十七日ゟ來月朔日迄私共御受合少々人形を入、一段切追出し仕候に付、御役所ゟ被仰出候常々被仰付御法度之趣相守可申候、勿論見物人其外とも慮外成儀仕間敷候、尙又本人も大阪者二三人も相交り申に付、當社御法度の儀屹度相守候樣に可申渡旨奉畏候、万一不屆之儀仕候はゝ私共如何樣共可被仰付、右之趣從御役所被仰付候に付私共一札被仰付差上申候、爲後日仍如件

享保十二年未三月十六日

產所村座本　四　郎　三㊞
同　年寄　八　郎　兵　衛㊞

吉井宮内樣　上るり太夫　茂太夫㊞

然ルニ夫ヨリ十二三年ヲ經タル寛保元年十一月五日ノ條ニ「産所村之儀近年退轉同前に困窮云々」トアルモ猶同月十七日ノ神事ノ日ニ同村ノ者稽古淨瑠璃ヲナシ、コト見エタリ。此時代右部落ハ大體衰微ニ赴ケルモノト察スベク又殘留者ニアリテハ文化十三年三月廿五六日ニ産所村ノ吉次郎吉田小六ノ寄進ニ係ハル人形芝居催サレ上リ高ヲ百太夫社ニ納メシコト見ユ。

猶百太夫社殿ノ記事トシテハ天和四年二月調廣田西宮本社末社並境内間數付ノ中ニモ百太夫殿ト載セラレ、正德四年八月十六日夜修繕相濟ミ遷宮ヲ行ヒシ由見エ、文化八年十二月ニハ大阪ノ芝居人形屋じようるり語リナド百太夫社ノ講ヲ組ミ、加盟者ニハ豐竹卷太夫、竹本染太夫外七名、人形方頭取芳澤福右衛門、人形方吉田小六其他ノ名ヲ見ル。

是ヲ故老ノ言ニ徵スルニ嘉永ノ頃ニハ全ク廢絶シテ一戶ヲモ留メズナリ明治ニ入リテ後ハ町内今在家ニ操座タリシ小屋ヲ移シ(後ハ普通ノ劇場トナル)附近ニ役者ノ子孫ナドモ住シタリト云フ。産所村ハ所謂「サガリ」ニシテ良民ヨリ幾分賤視セラレタリト云フ、現今全ク跡方ヲ絶テリ。

溯ツテ元祿以前ニ於ケル西宮傀儡師ノ狀況ヲ記シタルモノヲ探ルニ、平時慶卿記慶長十九年九月廿一日ノ條ニ

雨天。院參、飯後、阿彌陀胸切ト云曲ヲ仕、夷舁ノ類ノ者推參トシテ於御庭假ノ幕等ヲ引廻シテ有曲、奇意ノコト也

トアリ。「夷舁ノ類」トハ卽チ西宮ノ産所ヨリ出テタル傀儡子ノ類ナリ。此文ニヨリテ當時人形操及淨瑠璃ガ盛ニ世ニ行ハレ遂ニ禁中ニマデモ出入シテ新上東門院(後陽成天皇御母)ノ叡覽ニ入リシナリ。是西宮傀儡師ノ爲天下ニ誇ルヘキモノナリトス。

雍州府志ニ

淨瑠璃太夫、自文祿年中及慶長、監物某並次郎兵衛某、招攝津西宮傀儡師相共經營之、監物並次郎兵衛談淨瑠璃、西宮人舞人形。

人倫訓蒙圖彙ニ

津の國西宮より出るゆへに夷舞しと號す。西宮のさしむかひ海をへだてゝ淡路島にも此流れ有り。昔はゑひすの鯛をつり給ひし所を仕形にして春の始に出けるとなり。今は能のまね踊のまね色々をつくす。浮沈あり、音聲一風ありてかくれなし。世に傀儡子といふはこれなり。

傀儡師ニ關スル文献コレヲ求ムレバ夥シキ證徵ヲ得ベキモ煩シケレバ凡テコレヲ省ク。

傀儡師操ル所ノ人形操ノ種類ハ島文治郎博士ノ說ニヨレバ左ノ四種ニ分ツヲ得ベシ。

1 木偶ノ内部ニ機關ヲ具ヘテ動作セシムルモノ

2 簡單ナル人形ヲ片手ニ携ヘテ二三ノ絲ヲ以テ手首ヲツリ、人形遣ヒハ人形ヲ持チシ手ト他ノ手トニテ之ヲ操リ之ニヨツテ所作ヲナサシムルモノ

3 右ノモノヨリ追々進歩シテ人形ノ首肩白手等ヲ動カシ又微細ナル表象ヲナサシムルモノ

4上方ヨリ細糸ヲ釣リテ手足ニカケ絲ヲ引キテ働カスモノ

ノ四アリトスベキカ。圖版第三ノ(一)ハ右2ニ當ルモノニシテ、淡路名所圖繪ニ載スル所ナリ。ソノ(二)ハ同ジク2ニ當ルモノニシテ人形ヲ廻ハシ、後山猫ヤウノモノヲ箱中ヨリ出シテ兒童ヲ喜バシムルモノ所謂「山猫まわし」ト稱セラル、攝津名所圖會ノ描ク所ナリトス。圖版第四ハ3ニ屬スル操ノ圖樣ニシテ普通ノ人形操芝居ナリ。何レモ舞臺内部ヨリ描出セシモノ、以テ其一般ヲ察スベシ。聲曲類纂ニ載スル所ナリ。圖版第一ノ(二)ト對照シテ發展ノ經路ヲ察スベキナリ。

操ノ伎ハ右ノ如ク已ニ早ク慶長ノ頃京ニ行ハレ、江戸ニ於テモ正保頃盛ニ上下ノ歡迎ヲ受ケタリ。黑川道祐ガ雍州府志ニ記スル所ハ四條河原ニ於ケル操座ノ記ナリ、林羅山ガ正保頃ノ實見ノ記ハ羅山文集卷七十ニコレヲ記セリ、以テ東西兩京ニ於ケル盛行ノ度ヲモ察スベク以テ此間西宮ノ傀儡師ガ活動ヲモ想像スルニ難カラズトナス。

五　結　語

以上述ブル所ヲ綜括スルニ、淡路操ノ一般鄕人ニ認メラルヽニ至リシ起原ハコレヲ天正以降慶長ノ間ニ求ムルヲ得ベキモノヽ如シ。爾後幾多ノ變遷ハ發展ヲ生ジ發展ハ更ニ進化ヲ生ムニ至リシハ論ヲ俟タズ。

西宮ニ住居セシ傀儡子ノ徒ガ木人ヲ舞ハシメシ過渡ノ時代ヨリ大江匡房說ク所ノ傀儡子記、遊女記ノ趣ヲ經テ此徒輩百太夫ヲ尊信スルコトヲ形容シテ「男の愛祈る百太夫」(梁塵秘抄)ト謠ハルルニ至ル時、操ノ技モ稍觀衆ノ興趣ヲソヽルニ至リシナルベク、更ニ慶長ニ及ンデ昨ノ鄙藝今ハ花ノ都ニ觀客ヲ集メ鄕土藝術ノ粹トシテ台覽ノ光榮ヲサヘ得ルニ至リシナルベシ。

此ノ順次的發達ノ跡ハ遂ニ西宮ノ技藝淡路ニ傳ハルト稱セラル。又當然ノ推定ナルベシ。然リト雖モ其相關々係ニ至リテハコレヲ明瞭ニ證スル文献今日ニ及ブモ世ニ出ヅルニ至ラズ。

西宮ニ於ケル操ノ技藝全ク跡ヲ絕テル今日、其殘蘖ノ淡路ニ存スルハ宜シク保存スベキモノナリト信ズ。(吉井委員)

武庫郡

第二　菟原ノ處女塚

［圖版第五及第六］

一　序說

菟原處女ノ傳說ハ古ク萬葉集ニ取入レラレテ、同集ニコレヲ歌ヘル和歌ハ長歌三首、ソレニ沿ヘル短歌五首、合セテ八首ノ多キニ達シ、カノ櫻兒ノ傳說、縵子ノ傳說サテハ又飾葛ノ眞間娘子ノソレ等ト共ニ同集中最モ著聞セル說話ノ一ニ屬セリ。ソノ後亦大和物語ニモ收載セラレタリ。大和物語ハ古來文學者ノ尊重スル所、顯昭ノ言ニモ、「歌合の歌には、物語の歌をば本歌にも出し證歌にも用ふまじと申しけれど、源氏·世繼·伊勢·大和とて歌よみの見るべき文と承る」（千五百番歌合ノ判）ト見エ、ワガ國文學ノ隆盛ニ赴クニツレテ、益々コレ等和歌書ノ流通ヲ見ルト共ニ、自然コノ處女ノ傳說モ一般ニ普及シ、遂ニハ謠曲「求塚」ノ如キ獨立セル一文篇ノ出現ヲサヘ見ルニ至レリ。カクテ、コノ菟原處女ノ傳說ハ當ニ國民的說話ノ一トシテ優ニソノ地步ヲワガ文界ニ占ムルモノト云フベシ。

サレド今飜ツテコノ說話ヲ檢スルニ、諸書ノ傳フル所ソノ內容ハ必ズシモ同一ナリト速斷スベカラズ。素ヨリソノ根幹ニ於イテハ卽チ同一ナリト雖モ、コレガ枝葉ノ部分ニ至ツテハ決シテ一樣ナラズ。然リ而シテ、コノ一樣ナラザル枝體ヲ取ツテコレヲ比較考量スルニ、正ニ樹幹トソノ重大サヲ爭フニ足ルモノサヘアルニ至ツテハ、單ニ枝葉ノ問題トシテコレヲ輕視スベキニアラザルナリ。實ニ此ノ點ヲ究明スル事ニヨリテ、コノ說話ノ發展ノ容姿ヲ窺ヒ得ルノミナラズ、延ヒテハ一般的ニ、傳說ナルモノヽ成立ヲ考フル上ニ一ノ參考ヲ得ベシ。仍ツテ今コノ菟原處女ノ傳說ヲ解剖シテ、時代的ナルコレガ變化ノ迹ヲ探求シ、併セテソノ遺跡ニ論及スル所アラムトス。

二　說話ノ發展

イ　萬葉集ニ現ハレタル菟原處女ノ傳說

菟原處女ノ傳說ノ、物ニ見エタル最初ノモノハ萬葉集ナリ。萬葉集ニ收メラレタル詠歌ニシテ此ノ傳說ニ關スルモノハ長短合セテ八首、イマ其ノ作者ト其ノ詠題トヲ示セバ左ノ如シ。

過葦屋處女墓時作歌一首並短歌　（長歌一首、短歌二首）　。卷第九、挽歌　田邊福麻呂

見菟原處女墓歌一首並短歌　（長歌一首、短歌二首）　。卷第九、挽歌　高橋連蟲麻呂

追和處女墓歌一首並短歌　（長歌一首、短歌一首）　。卷第十九　大伴宿禰家持

コレ等ハイヅレモ萬葉集中ノ名吟トシテ夙ニ人口ニ膾炙スル所ナリト雖モ、ソノ著聞スルノ故ヲ以ツテコレヲ割愛スルニ忍ビズ、且ツ又コレガ爾後ノ所說ノ出發點ナルガ故ニ、繁ヲ厭ハズ

左ニ錄セン。

過莘屋處女墓時作歌一首並短歌

古へのますらをとこの　あひ競ひ　つまどひしけむ　莘の屋の　菟名目處女の奥城を　わが立ち見れば　永き世の　語りにしつゝ　のち人の　偲びにせむと　王梓の　道邊近く　磐構へ　作れる冢を　天雲の　そぎへのかぎり　この道を　ゆく人毎に行きよりて　いたち嘆かひ　恋人は　ねにも哭きつつ　語りつぎしぬびつぎ來し　處女らが奥城ところ　吾さへに　見れば悲しも　古へ思へば

反　歌

いにしへの小竹田丁子のつまとひし菟會處女のおくつきぞこれ

語りつぐからにも幾許戀しきをたゝ目に見けむいにしへ丁子

右、田邊福麻呂之歌集出

○右ハ通讀ニ便センガタメニ今萬葉集略解ニヨリテ書下セリ以下倣之

見菟原處女墓歌一首並短歌

莘屋の菟名頁處女が　八年兒の片生の時ゆ　小放に　髮たぐまでに　並び居る　家にも見えず　うつゆふの　牢りてをれば　見てしがと　悒憤せむ時の　垣ほなす人の誂ふとき　智奴壯士宇奈比壯士の　ふせや燿き　すすし競ひて　あひよばひしける時に　燒太刀の　手預押しねり　しらま弓靫取負ひて　水に入り火にも入らむと　立向ひ競へる時に　吾妹子し　母に語らく　しづたまき　賤しきわが故　丈夫の　爭ふ見れば　生けりとも　合ふべくあれや　ししくしろ　黄泉にまたむと　こもりぬの下ばへおきて　うち嘆き　いもが去ぬれば　血沼壯子　その夜夢に見　取りつゞき　追ひゆきければ　おくれたる菟原壯士も　い仰ぎて　叫びおらびあしずりし　牙喫み　たけびて　もころをに　負けてはあらじと　かき佩きの　小劔取り佩き　ところづら　尋めゆきければ　親族ど

も　いより集ひて　永代に標にせむと　遐き代に語りつがむと　處女墓　中につくり置き　壯士墓　こなた彼方に造りおける　故縁聞きて　知られども　にひもの如も　ね泣きつるかも

反　歌

莘屋の宇奈比處女が奥槨を往來と見れば哭のみし泣かゆ

墓上の木枝靡けり聞くがごと陳努壯士にし依倍けらしも

右、高橋連蟲麻呂之歌集中出

追和處女墓歌一首並短歌

古へに有りけるわざの　くすはしき　ことと言ひ繼ぐ　知努乎登古　宇奈比壯子の　うつせみの　名をあらそふと　玉きはるいのちもすてゝ　爭ひに　蟐問しけるをとめ等が　聞けば戀しき　春花のにほえ盛えて　秋の葉のにほひに照れる　惜身の　壯をすらに　丈夫の語いとほしみ　父母に啓し別れて　家離り　海邊に出で立ち　朝よひに滿ち來る潮の　やへ涙に　靡く珠藻の節の間も　惜しき命を　露霜の　過ぎましにけれ　奥墓を　こゝと定めて　後の世の聞き繼ぐ人も　いや遠に　しぬびにせよと　黄楊小櫛　しかさしけらし　生ひて靡けり　おとめらが後のしるしとつげ小櫛生ひ更り生ひてなびきけらしも

右、五月六日依興大伴宿彌家持作之

イマコレ等ノ歌ニヨリテ、菟原處女ノ傳説ヲ要約スレバ、凡ソ次ノ如キモノトナルベシ。コレ卽チ此ノ説話ノ當初ニ近キ容姿トナス。

(一)説話ノ主人公ハ三人、卽チ女ヒトリ男二人

女ノ名ハ葦屋菟名日處女。男ノ名ハ一ハ菟原壯士或ヒハ小竹田丁子、一ハ知奴壯士トイフ

(二)男女ハ(少クトモ女ハ)海邊ニ近ク住メリト思ハル、コト

(三)說話ノ構成

イ、主題ハイハユル戀ノ三角關係ニシテ、屈强ノ男二人ヒトリノ女ヲ求メテ[水ニ入リ火ニモ入ラムトス、シ競ヘ]ルコト

ロ、女ハソノイヅレニモ靡キカネテ、ソゞロニ思ヒ佗ビタル末、[シヅタマキ賤シキワガ故丈夫ノ爭フ見レバ生ケリトモ合フベクアレヤ、シヽクシロ黃泉ニ待タム]トテ、終ニ入水シテ果テタルコト

ハ、知奴壯士ハソノ夜夢ニテ處女ノ果テタルヲ知リテ直チニソノ後ヲ追ヒ、菟原壯士ハ彼レニ先ンゼラレタルヲ痛憤シツヽ同ジクソノ後ヲ追ヒテ、共ニ相果テタルコト

ニ、親族相集ヒ、[處女墓]ヲ中ニ造リオキ、[壯士墓]ヲソノ左右ニ築キテ、懇ロニカレ等ノ後ヲ弔ヘルコト

(四)コノ說話ハ已ニ業ニ古キ世ノ事ニ屬シ、イマハソノ奥城ノミ存セリ。而シテ墳ハ往還ニ寄リテ[玉桙ノ道ノ邊近ク磐構ヘ作ラ]レ、ソノ塚上ニ今樹木アルコト

予ハ能フ限リ原意ニ忠實ナラムコトヲ期シツヽ、カクノ如クソノ要素ヲ抽出セリ。コヽニ尙一事ノ云フベキコトアリ。ソハ、コレ等ノ說話ノ主人公ハイヅレモ身分高キモノト推察スベカラザル點ナリトス。コノ事ハ詠歌ノ全面ニ流ルヽ色調ヨリ感知シ得ルノミナラズ、又カノ高橋蟲麻呂ノ歌ニ、[しづたまき賤しきわが故]トイヒ、[ふせや燎きすゝし競ひて]ト形容セル字句アルニ參考シテコレヲ知ルベシ。コノ事ハ後節ノ論議ニ關係スル所アルヲ以ッテ豫メ看者ノ注意ヲ請ハント欲ス。

ロ　大和物語ニ見エタル菟原處女ノ傳說

大和物語ハ云フマデモ無ク、延喜ノ頃ヨリ天曆前後ニ至ルマデノ男女ノ仲ラヒ、和歌ノ贈答ナドヲ主トセル一ノ歌物語ニシテ、ソノ作者ニツイテハ或ヒハ在原滋春ト云ヒ或ヒハ花山院ト傳フレドモ、素ヨリ何等ノ確證アルニアラズ。只コレガ著作年代ニ關シテハ、恐ラクハ天曆四年ヨリ同七年迄ノ間ニアルベシト云ヘル藤岡作太郎博士ノ說ニ從フベキナリ。

サテ本書ノ記載ニ就イテハ、今繁ヲ厭ヒテソノ全文ヲ揭ゲズ、單ニ萬葉集ノソレニ比較シテ相違セル點ノミヲ左ニ擧示スベシ。就中特ニ此レニ注意スベキハ新タニ附加セラレタル分子ノ頗ル多キ點ナリトナス。卽チ、

(一)處女トソノ親トノ問答ノコト。卽チ、彼ニアリテハ單ニ處女ガ思ヒ佗ビテコレヲ親ニ愁訴セル樣ニ作リナセルヲ、此ニアリテハ[おやありてかく見ぐるしく年月をへて人のなげきをいたづらにおもふもいとをし、一人々々にあひなば今一人がおもひは絕えなんといふに、女、こゝにもさ思ふに人の志の同じやうになんおもひわづらひぬる、さらばいかゞすべきといふに、云々トアリ。

(二)カクテソノ結果、カノ男二人ヲシテ射技ヲ競ハシメ、ソノ優劣ニヨリテ、イカニマレコノ

事ヲ定メントナセルコト。コノ一段ハ彼ニハ全然見エザル所ナリ。

(三)處女ガ入水スルニ當リテ、

住みわびぬわが身なげてん津の國のいくたの川は名のみなりけり

ト辭世ノ歌一首ヲ詠メルコト、コレモ彼ニハ無シ。

(四)後旅人、コノ處女塚ノホトリニ宿リテ、壯士ノ亡靈ニ遇ヒ不思議ヲ見ルコト。コノ一節ハ全ク新シキ構想ニ出デタリ。

コノ外、ナホ先キニハ抽象的ナリシモノ、今具體化セラレタル節モアリ。例ヘバ壯士二人ニ就イテコレヲ云ハバ、彼ニハ兩者ヲ比較セル殊更ノ辭句ナキニ、此ニハ「年齡容貌(さしあはひかたち)人のほどたゞおなじく」「心ざしのほども亦同じ」。カクテ、「暮るればもろともに來あひ、ものをこすればたゞ同じやうにをこす、いづれまされりといふべくもあらず」トアルガ如キハソノ一例トスベシ。又說話ノ變替セラレタル點モ尠カラズ。例ヘバ二人ノ壯士ノ墓ヲ築クニ當リテ、兩家ノ親達ノ間ニ紛爭アリシトナセル事ハ、此ノ墓ニ就イテ、「此男はくれ竹のよふかきをきりて、狩衣袴えぼしおびなどをいれて、弓やなぐひたちなどいれてぞうづみける、今ひとりはをろかなるおやにやありけん、さもせずぞ有ける」ト記サレタル點ト相俟ツテ、コノ說話ノ意趣ニモ響ク重大ナル變化ト云フベシ。思フニ萬葉集ニアリテハ二人ノ壯士ニ對シテハ偏頗ナキ愛情ヲ齊シクコレニ注ガントセルニ、大和物語ニアリテハ、コノ二人ノ壯士ニ就イテ殊更ニ差違ヲ立テ、相爭ハシメントス。カノ壯士ノヒトリノ亡靈ガ旅人ニ會ヒテ太刀ヲ借リ受ケ、年ゴロネタキモノヲウチ殺シテイミジウ悅ビタリトノ一節ハ、カクテ此ノ物語ノ作者ノ感興ニノボレルナリ。右ノ外尙、二人ノ壯士ノ居處ヲ記シテ、「一人はその國にすむ男、姓は菟原になん有ける、今一人は和泉國の人になん有ける、姓は血沼となんいひける」トアルガ如キモ、萬葉集ノソレニ比シテ一歩ヲ進メタルモノト評スルヲ得ン。

カクノ如ク、大和物語ニ見エタル菟原處女ノ傳說ハ萬葉集ノソレニ比較スレバ、諸方面ニ於イテ、コレガ發展ノ跡ヲ見ルベク、サキニ抽象的ナリシモノガ具體的トナリ、簡單ナリシモノガ複雜トナレリ。時代ノ推移モコノ間ニホノ見ユ。見ヨ、

女おもひわづらひて、(中略)つぶりとおちいりぬ、おやあはてさわぎのゝしるほどに、このよばふ男ふたりやがて同じ所に落ち入ぬ、一人はあしをとらへ今一人は手をとらへてしにけり、云々

ト云ヘル大和物語ノ一句ヲ、萬葉集ノ

吾妹子し、母に語らく(中略)と、こもりぬの下ばへおきて、うち嘆き、いもが去ぬれば、血沼壯士、その夜夢に見、取りつゞき、追ひゆきければ、云々

トノ一句ニ比較セヨ。理知的トナレル時代ノ歩ミヲ歷々感取スルヲ得ン。カノ壯士(トコ)ノ技ヲ試ミントシテ水鳥ヲ射シムルニ就イテモ、特ニ生田川ノ名ヲ擧ゲテソノ所ヲ明示シ、以ッテソノ漠然タルコトヲ避ケタルガ如キハ、事頊細ナルニ似タリト雖モ、由ッテ以ッテ時代ノ人ノ心理ヲ窺フベシ。因ミニ記ス、此ノ水鳥ノ一事ハ思フニ、萬葉集ニ處女ノ入水ノコトノ見ユルヨリコ

ノ水ノ縁ニヨリテ案出セラレタル作者ノ創意ナルベシ。

八　謡曲「求塚」

謡曲「求塚」ハソノ古名ヲ處女塚ト云ヒテ、觀阿彌ノ作トモ又世阿彌ノ作トモ傳フレド、何レモコレガ證跡ニ乏シ。タヾソノ作ノ室町時代ニ屬スルコトヲ知リナバ要ハ足ルベシ。

サテコノ「求塚」ノ構想ヲ云ハヾ、一人ノ旅僧西國ヲ發シテ都ニ上ラントスルノ途次、津ノ國生田ノ里ニテ求塚ヲ見、コヽニテ處女ノ亡靈ニ遇ヒ又カノ壯士等ノ地獄ニ苦患スルヲ見ルノ樣ニ作リナセリ。全篇ハ分チテ前後ノ二段トナスヲ得ベク、前段ニ於イテハ、カノ堀川百首ニ見ユル「旅人ノ道妨ゲニ摘ムモノハ生田ノ小野ノ若菜ナリケリ」ノ一首ニ由リテ若菜摘ノ興趣ヲ陳ベ、後段ニ於イテハ專ラ求塚ノユヘ由ヲ述ベ、終ニ二壯士ノ亡靈ヲ點出シ來ツテ、此ノ二人ノ怨恨凝ツテ地獄ニ墮落シ却火ニ燒カレテ苦患スル樣ヲ現ゼリ。前段ノ事ハ今姑ク措ク、コヽニハ專ラ後段ニ就イテ述ブルコトヽスベシ。

イマ此ノ一篇ニ現レタル所ヲ以ツテ萬葉集及ビ大和物語ノソレニ對比スルニ、ソノ大意ニ於イテハ素ヨリ相同ジト雖モ、尙彼此參差シテ變化潤色セラレタル所尠カラズ。イマ其ノ主ナルモノ二三ヲ擧クベシ。

(一)二人ノ壯士ハイヅレ優レリト云フベクモアラザル事ヲ云ハントシテ、コレニハ「同じ日の同じ時にわりなき思ひの玉章を贈る」トアリ。文飾ニ於イテ彼レニ優レルモノアルヲ覺ユ。

(二)二人ノ壯士生田川ノ水鳥ヲ射タルニ、「二人の矢先の諸共に一つの翅に中りし」ハ、カノ傳ニ於イテ、一ハ頭ニ適リ一ハ尾ニ適リシト云フニ異リ、技工上一段ノ轉化ヲ示セリ。

(三)サテコレヲ見テ、處女

「無漸やな、さしも契りは深みどり水鳥迄もわれ故に、さこそ命は鴛鴦の番ひ去りにしあはれさよ」ト思ヘルハ、ナンボウ情深キヨトメナラズヤ。此ノ嘆聲ハ彼ニハ無キ所ナリトス。

(四)又、二人ノ壯士ノ自害ニ就イテモ多少ノ相違ヲ認ムベシ。卽チコレニヨレバ、處女ガ生田ノ川ノ川浪ニワガ身ヲ投ゲテ沈ミシヲ、イマ取上ゲテ「此塚の土中に籠めをさめしに、二人のをとこはこの塚に求め來りつゝ、何時まで生田川ながるゝ水に夕汐の指ちがへて」空シク爲レリトナリ。コレ求塚ノ名ニ由リテ換骨脫體ヲ試ミタルモノカ。

凡ソ謡曲ニハ通ジテ一ノ類型ヲ認ムベク、コノ求塚ニ於イテモ、特ニ因果ノ佛說ヲ取入レテ修羅ノ狀況ヲ現出シ、又二人ノ壯士ノ死ニ對シテ「これさへわが科になる身を助け給へ」トノ處女ノ願望ヲ見ル等ノコトアリ。サレド今カクノ如キ謡曲ニ有リ勝ノ變化ヲ排除スルトモ、尙ホ且ツ前述ノ如キ二三ノ變化アルナリ。コレ等ノ相違ハ事極メテ瑣細ナルニ似タリト雖モ、カヽル瑣細ノ相違コソ軈テ說話ノ發展ヲ促ス重大ナル因子タルヲ思ヘバ斷ジテ輕視スルヲ許サヾルナリ。

× × ×

予ヤ葦屋ノ菟原處女ノ傳說ノタメニ尠カラザル紙數ヲ費シヌ。ソノ意圖スル所ハ卽チ、時代ト共ニ發展セル此ノ說話ノ跡ヲ辿ラムトスルニアリキ。タヾ予ガ管見ノ及ブトコロ極メテ狹小

ナルガタメニ充分ナル成果ヲ收メ得ザリシ事ハ予ノ最モ遺憾トスル所ナリト雖モ、シカモ僅カニ覓メ得タル前記ノ所述ニ就イテ見ルモ尙、此ノ傳說ノ時代ヲ逐フテ漸次理智的トナリ又具體的トナリ更ニ又修飾セラレテ、ヤウヤク雜多ノ分子ヲ混入シテ簡單ヨリ複雜ヘト推移セル說話ノ容姿ヲ看取シ得ベキナリ。

三　處女塚

現時處女塚ト傳稱スルモノ凡ソ四個ニシテ四ケ處ニ散在セリ。ソノ內三個ハイヅレモ武庫郡ノ管內ニ在リ。卽チ、ソノ一ハ御影町東明字四番地ニアリ、稱シテ處女塚トイフ。ソノ二ハ西郷町味泥ニアリ、里人ノ大塚山ト呼ベルモノ卽チ是ナリ。ソノ三ハ住吉村ノ內住吉町仲町吳田ニアリ、由ツテコレヲ吳田ノ求女塚又處女塚(一ニ東乙女塚)ト云ヘリ。最後ニ擧グベキハ神戶市內脇ノ濱三丁目ノ地先ニアルモノニシテ、里人傳ヘテ乙女塚ト云ヘリ。現ニソノ所傳ヲ有スルモノハ以上ノ四ケ所トナスベシ。今コレ等ノ各ニ就イテソノ現狀ヲ記シ併セテ該所ヨリ發見セラレタル遺物ニツイテ述ベントス。

イ　東明ノ處女塚

東明ノ處女塚ハ嚮ニ大正十一年ノ交、史蹟名勝天然紀念物保存法ノ適用ヲ受ケ、史蹟トシテ內務大臣ノ指定ヲ得タリ。而シテコレニ關スル調査ノ概要ハ載セテ本縣史蹟名勝天然紀念物調査報告書第一輯ニ在リト雖モ、試ミニコレヲ略言センカ。本墳ハソノ外形前方後圓ノ形式ニ屬シ、略南北ニ亘ル線ヲ以ツテ長軸トナシ其ノ全長凡ソ六〇メートル、南面セリ。後圓部ハソノ直徑凡ソ四〇メートル、高サ約五·四メートル。ソノ部ノ北緣ハ近時阪神電車路線ノ敷設ニ當リテ一部截斷セラレ、圓頂ハイマ削平セラレテコヽニ一基ノ石碑ヲ存セリ。碑ハ伊達千廣ノ選文ニ成リ弘化三年ノ建設ニカヽレリ。前方部亦損傷ヲ蒙レル所尠カラズ、剩ヘソノ一部ニアリテハ地ヲ夷シテ此處ニ稻荷祠ヲ設クル等ノ變替アリト雖モ、ナホ大體ヨリスレバ比較的ヨクソノ原形ヲ保持セルモノト云フベシ。但シ本墳ハ現時人家ニヨリテソノ四周ヲ脅迫セラレテ、基底部ニ於ケル原況ハ今明カナラズ。環湟ノ有無ノ如キ素ヨリコレヲ尋ヌベカラズ。葺石、埴輪圓筒ノ存在ナド亦コレヲ認メズ。松樹アリテ二三十株、ソノ塚上ニ樹

圖·地近附地在所塚·女處　圖五第

テリ。

凡ソ其ノ所ノ地勢タル、武庫ノ平野ニ位置シテ國道ニ接シ、前面ハ二三百メートルノ近キニ海ニ達スベク、後方ハ遠カラザルニ一帶ノ連亙ヲ望ミ、ソコニ六甲摩耶ノ諸峰ヲ點ズ。石屋川ハ近クニ流レ、住吉川モ程遠カラズ。概シテ平明ナル適地ト云フベシ。

本墳ニ就イテハ未ダ發掘セラレタルコト有ルヲ聞カズ、從ツテ其ノ遺物ト云フモノヲ見ズ。ナホ本墳ノ面積ハ現ニ二千餘平方メートルアリ。

ロ　味泥ノ大塚山

一ニ求塚（モトメヅカ）ト云フ。里人多クハ大塚山ト呼ベリ。大塚山モ亦國道ニ接シ、海ヲ去ルコト南方約二百メートル、岩屋大石ノ兩部落ノ略中間ニ位シ、東ノ方凡ソ二キロニシテ東明ノ處女塚ニ至ルベシ。大塚山ハソノ名ノ示スガ如ク隆然タル獨立丘ニシテ、欝蒼タル松樹コレヲ覆ヘリ。此ノ地モト村有ナリシガ故アリテ個人ノ手ニ歸シ、今ハソノ人ノ別莊ト化シテ高樓碧館ソノ上ニ建チ、墳壟ノ如キニ至ツテハ或ヒハ穿チテ深キ泉池ヲ設ケ或ヒハ截切シテコヽニ羨道ヲ開ク、ナド、頗ル破壞ヲ蒙レリ。更ニ異物ノ搬入裝置セラレタルモノニ至ツテハ枚舉ニ勝ヘズ。カクノ如クシテ、本墳ハ著シクソノ原形ヲ損セリト雖モ、尙ソノ輪廓ヲ窺ヒ得ベキハセメテモノ幸ナリトスベシ。卽チ、其ノ外形ハ比較的整美ナル前方後圓ノ型式ヲ存シ東面セリ。ソノ大サ、カノ東明ノ處女塚ト相若クベシ。

ハ　吳田ノ求女塚

一ニ吳田（ゴダン）ノ處女塚ト云ヒ又東乙女塚トモ稱ス。東乙女塚ト稱スルハ前記ノ味泥（ミドロ）ノソレト區別センガ爲メノ稱呼トス。本墳ハ住吉部落ノ南方、御影町ノ東方ニ位シ、西國街道ニ近接セリ。東明ノ處女塚ヲ東ニ去ルコト凡ソ一・六キロ許リ、住吉川ハソノ東ニ接シ、南スレバ凡ソ五百四五十メートルニシテ海ニ達スベシ。本墳ハイマ財團法人遊喜園ナル幼稚園ノ園庭ト化シテ頗ルソノ形態ヲ失セリ。尤モコレヨリ先明治三十七年ノ交、新タニ阪神電氣鐵道ノ開設セラルヽヤ本墳ノ封土ハソノ路線工事用ニ取去ラレ、其ノ時殆ンド壞滅ニ瀕セシヲ幸ヒ里人ノ盡力ニヨリテ漸クソノ一部ヲ留メ得タルナリト云フ。サレバコノ度ノ破壞ヲ見ル以前ニハ多少ノ損傷アリシトスルモ、尙比較的ヨク原狀ヲ髣髴シ居リシコトハソノ地ノ古老ノ證言スル所ニシテ、アル者ノ云、モトコレ隆然タル丘壟ニシテソノ圓頂ハ二個所ニ存シ、頂上ニハ樹木アル無ク、幼童ノ遊戲場ナリキト。コノ言信ズベキガ如ク、今住吉村役場ニ藏セル明治初年ノ地籍圖及ビ遊喜園備付ノ地籍圖ヲ檢スルニ、モト西面セル整美ナル前方後圓墳タルコト明瞭ニシテ、現ニ遺存セル封土ノ部分ハ略ソノ後圓部ノ中心ニ當レリ。更ニ此ノ地籍圖ニ參照シツヽ、該地附近ノ現狀ヲ視察スルニ、本墳ノ南ノ周緣ヲナセル曲線ニ沿セテ地ハ明白ニ一二尺低下シ、ソノ一部ニ溝渠ノ存スルヲ見ルハ、タト

第六圖　住吉村吳田ノ求女塚地籍圖

（遊喜園及住吉村役場所藏古地籍圖ニヨル）

ヒ後ノ修補ヲ認ムベシトナスモ、ナホ舊時ノ狀態ヲ髣髴スルヲ得ベシ。

明治ノ初年本墳ヨリ數多ノ遺物ヲ發見セリ。此レ等ノ遺物ニ關シテハ本縣史蹟名勝天然紀念物調査報告第二輯ニ梅原末治氏ノ筆ニ成レル詳細ナル調査報告アリ。ソレニ據レバ、發見ノ遺物ニハ鏡、太刀、車輪石、下顎骨等アリ、特ニ鏡ノ如キハ破片トモ合セテ六面ノ多キニ及ビ、就中優秀ナル漢鏡内行花紋鏡繪模樣神獸鏡等ヲ出シテ、頗ル本墳ノ考古學的價値ヲ高メタリ。氏ハソノ最後ニ記シテ曰ク、

要するに[この]求女塚は其の副葬品に支那六朝中期以前の鏡を多數に藏し、其の構造にありても、封土に比して内部の簡單なる類なりし事察せられて、畿内に於ける前方後圓墳の最盛期たる應神、仁德兩帝代よりも遡る時期に屬するを認め得。果して然らば、同じ制を有して竝び稱せらるゝ他の處女塚また年代想定の傍證を得可く、此の種の墳墓の相竝ぶ點に於いて當代の武庫郡の狀態自らまた想到せらるゝものあるを思ふ。云々

二　脇ノ濱ノ乙女塚

脇ノ濱ノ乙女塚ハ神戸市脇ノ濱三丁目二〇四一番地ノ地先ニアリ。街道ニ臨ミ近ク海ニ接ス。現今ノ生田川ハソノ西ヲ流レ相去ルコト八百メートル許ナリト雖モ、舊生田川ハソレヨリ更ニ七八百メートルノ西ニアリ。此ノ塚ヲ東スルコト約千三百メートルニシテ味泥ノ求女塚ニ達スベク、カノ東明ノ處女塚トハ相距ルコト大凡三千メートルナリ。コノ附近現時人家櫛比シ、剩サヘコレニ隣接シテ[ゴム]製造會社ヲハジメ其ノ外多クノ工場建チ並ベルガタメニ、本墳ハ頗ルソノ原狀ヲ損シ、今ニ於イテハコレガ當初ノ形ヲ究メ難シ。一見蕞爾タル圓墳ノ狀ヲ呈セリト雖モ、モト果シテ然リシヤ否ヤハ明カナラズ。ソノ南方ニ空地ヲ存シテ稍平地ヨリ高キモノアルヨリ見レバ、或ヒハモト前方後圓型墳ナリシヤモ知ルベカラズ。(ナホ古キ地籍圖ナドヲ得ナバ發明スル所アルベシト思ヘド未ダソノ機ヲ得ズ)。現在遺存セル封土ノ部分ハソノ周、歩シテ約八十三歩ヲ數フベク、高サ二メートル半許リ、上部ハ削除セラレテコヽニ老松一樹枯レナガラニ立テルモ痛マシ。ソノ古墳タルコトニ就イテハ葺石ト覺シキモノ、多少散在セルモノアルニテコレヲ知ルベシ。

本墳ハ里人呼ンデ乙女塚ト稱シ、專ラカノ菟原處女ノソレト唱ヘタリ。因ミニ云フ、本墳ノコトハ古キ地圖ニモ見ユル由記セルモノアリト雖モ　未ダ予ノ管見ニ入ルコト無キハ予ノ頗ル遺憾トスルトコロナリ。

四　處女塚ノ源流

予ハ現ニ處女塚ト稱スルモノヲ求メテ前記ノ四個ヲ得タリ。而シテ其ノ現狀ニ就イテモ亦記述スル所アリタリ。然レドモ、由來コノ處女塚ハ三基相倚リテコヽニ一篇ノ哀話ヲ構成スルモノニシテ、ソノ數ノ四個タルベキ理無シ。シカモ尙イヅレモ處女塚又ハ求女塚ト稱シテ萬葉集謂フ所ノ菟原處女ノ遺蹟ニ擬ス。惟シムベシ。予ハ今コレガ批判ニ入ルノ順序トシテ、コレ等ノ所謂處女塚ガ果シテ何時頃ヨリ其レト傳稱セラレタルカヲ先ヅ知ラント欲ス。

今コレヲ德川時代ノ地誌ニ參照シテ略ソレト確實ニ推定シ得ベキモノヲ左ニ擧グベシ。

難波丸綱目。本書ハ攝泉兩國ノ地誌ニシテ延享度ノ刊行ナルガ、其ノ第六卷ナル〔攝津名所〕ノ中ニ、求塚ヲ擧示シテ云、

求塚　三所ニあり。一ッは菟原住吉の南の海邊住吉濱村の東ニあるなり、一ッは德井村出在家と川原口との間海道より南の方にあり、一ッは森村と味泥村との間海邊より少南のかたにあり。三つともに求塚といふ。女ハ中の塚なりといひ傳ふ。云々

トアリ。ソノ指示スル所明白ニシテ、現今ノ東明奥田及ビ味泥ノ三處女塚ニ比定シ得ベシ。コレヲ〔攝津名所圖會〕卷七ノ記事、卽チ

處女塚　又求女塚とも書す。三箇所にあり、一は住吉川の西御田村の東田畔の中にあり、塚の巡百五十間許。一は東明村にあり、塚の巡百間許、塚上に松樹二十株あり。一は味泥村の濱手大石村の間にあり、塚の巡二百間許、これも塚上に松樹あり。東の塚を西面としこれを茅停男とす、土人鬼塚ともよぶ。西の塚を東面としこれを菟原男とす。中の塚を南面として求女塚と呼ぶ。相隔つ事各十五町許。云々

ニ參照スル時、彼此相俟ッテ益々ソノ比定ノ確實性ヲ增スベシ。攝津名所圖會ハ云フマデモ無ク、秋里離島ノ編述スル所ニシテ、寛政六甲寅年中山前大納言ノ序文ト共ニ同十戊午年ノ自跋アリ。コレニ稍少シク溯レル時代ノ地誌ヲ尋ヌルニ〔攝西兵庫名所記〕〔寶永七年、植田下省子編〕ニ、

一求女塚又處女塚ニ書乙女塚

おとめ塚ハ女のつか、うなひ女と云

もとめ塚ハ二人の男小竹田男千努男也

右塚三ッ有、一ッハ生田川東味泥村にあり

一ッハ遠明村に有、一ッハ住吉川西御田村有、各十丁斗をへたつ

トアルヲ見レバ、寶永ノ頃ニ於イテハ處女塚ニ就イテナホ、前述ノ如キ所傳ヲ有セシコトヲ知ルベシ。處女塚相互ノ距離各十町許ト見ユルハ瑣カ癖ヲ缺ケド無カルベシ。モ、カクノ如キハ深クモ追求スルノ要無カルベシ。又元祿十四年ノ刊行ニナレル〔攝陽群談〕卷九、塚之部謂フ所ノ處女塚ハ亦コレト相同ジト見テ可ナリ。試ミニコレヲ記ス。

處女塚　菟原郡味泥德井住吉ノ三箇村ニ涉テ三ノ塚アリ、一名求塚ト稱ス。茅屋村ニ續ケリ云々

× × ×

菟原處女ノ塚ヲ求メテ德川時代ノ初期ニ到レル予ノ筆ハ、コヽニ行キツマリノ悲運ニ會セリ。處女塚ニ關スル記事ハ素ヨリ此レ以前ニ屬スルモノ無キニアラズ。シカモ管見ニ入レル限リ、ソレ等ハイヅレモ此ノ塚ノ所在ヲ推測セシムルベキ明徵ヲ擧示セザルナリ。カノ謠曲〔求塚〕ノ如キモ、單ニソレガ生田ノ里ニ存スルコトヲ云ヘルノミニテ、生田ノ森生田ノ小野等ノ名ヲ擧ゲタリト雖モ、コレ等ノ地理的關係ニ至ッテハ全然寛ヒ知ルヲ許サズ。更ニ又、カノ太平記ニ就イテ云ハヾ、同書卷十六ニ湊河合戰ノ一條アリ。延元元年五月楠正成ノ討死ノ後ヲ享ケテ、新田義貞コノ附近ニ戰ヘルコトヲ記セル中ニ求塚ノコト見ユト雖モ、コレ又ソノ所在ニ就イテハ

頗ル明瞭ヲ缺ケリ。試ミニコヽニ參考トナルベキ點ヲ抽記センカ、義貞ハ湊川ヨリ懸レル足利尊氏等ノ大軍ト戟ヲ合センガタメニ、「西宮ヨリ取テカヘシ、生田森ヲ後ニ當テ」四萬餘騎ニテコレニ當リシガ衆寡敵セズ、終ニ殘兵纔カニ五千餘騎、「生田森ノ東ヨリ丹波路ヲ差テ」落行ク事トナレリ。此ノ時、

數萬ノ敵勝ニ乘テ　是ヲ追事甚急ナリ　サレトモ何モノ習ナレハ　義貞朝臣　御方ノ軍勢ヲ落延サセン爲ニ　後陣ニ引サカリテ　返合返合戦ハレケル程ニ　義貞ノ乘レタリケル馬ニ　矢七筋マテ立ル間　小膝ヲ折テ倒レケリ　義貞求塚ノ上ニ下立テ　乘替ノ馬ヲ峡給ヘトモ　敢テ御方是ヲ知サリケルニヤ　下テ乘センスル人無リケリ。（中略）小山田太郎高家　遙ノ山ノ上ヨリ是ヲ見テ　諸證ヲ合馳參　己カ馬ニ義貞ヲ乘奉リテ　我身ハ徒歩ニ成テ　追懸ル敵ヲ禦キケルカ　敵數多ニ取籠ラレテ　遂ニ討レニケリ　云々（『考太平記』ニヨル）

歸スルトコロ、求塚ハ生田ノ森ノ附近（恐ラクハ其ノ東又ハ南）ニアリシヲ漠然知リ得ルニ過ギズ。若シソレ源平盛衰記ニ至ツテハ更ニ空漠ナリ。强イテコレヲ求メナバ、布引ノ瀧ヲ去ルコト遠カラザル所ナラムカト云フベキノミ。序デナガラソノ文ヲ擧ゲム。

千代に替らぬ翠は雀の松原　みかげの松　雲井にさらす布引は　我朝第二の瀧とかや　業平中將の彼瀧に　星かゝ河邊の螢かと　浦路遙に詠めけむ　何所なるらむ覺束な　求塚と云へるは　戀故命を失ひし二人の夫の墓とかや云々（證要第十七　實定上裳の巻）

カクノ如クシテ、コレ等二三ノ書ヲ通ジテ予ノ知リ得タル所ハ卽チ、處女塚ノ所在ニアラズシテ、單ニソノ事ノ當時ナホコレガ所傳ヲ失ハズ、比較的廣ク世人ニ知ラレタルノ一事ナリトス。コハ素ヨリ予ガ探求セントスル所ノ主眼ニハアラザレドモ、亦必ズシモ無價値ナル收獲ナリトハ稱スベカラズ。

コレヲ要スルニ、現時處女塚ト傳稱スルトコロノモノニ就イテ、ソノ所傳ノ源流ヲ溯ル時、コレヲ確實ニ記錄ノ上ニ證シ得ルハ德川時代ノ初期マデニシテ、ソレ以前ニ關シテハ未ダコレヲ立證スベキ資料ヲ得ズ。サレバコレ等ノ遺蹟ガ果シテ萬葉集謂フ所ノ葦ノ屋ノ菟原處女ノソレニ比定シテ全然誤リ無キヤ否ヤハ記錄ノ上ヨリコレヲ立言スベカラズ。故ヲ以ツテ、コノ問題ヲ解明センガタメニハ、宜シク此ノ說話ノ當初ニ溯ツテ、其處ニ現ハレタル諸ノ要件ガ果シテコレ等ノ遺蹟ニ於イテ滿足セラルヽヤ否ヤノ點ヲ究明セザルベカラザルナリ。

五　說話ノ示ス要件ト處女塚

吉井良秀氏嘗テ此ノ處女塚ヲ論ズルニ當リテ、今川了俊ノ「道ゆきぶり」ニ、

御影の松原を過て云々。程なく生田川に着きぬ。此川に鳥射しますらをの塚とて道の邊近く村立たる松風遙に音信して聞過しかたかりき。

トアルヲ指摘シ、處女塚ハ宜シク生田川ノ邊リニコレヲ求メザルベカラザルコトヲ論ゼラレタリ。（考古學雜誌三ノ九、「攝津國武庫郡灘の處女塚考」氏ノ引用文ハ右ノ如シト雖モ、群書類從本ハコレトハ稍字句ノ相違アリ、卽チ下ノ如シ。（上略）ほどなくいくた川につきぬ。此川の鳥いしますらをのつかとて、道のべちかく村だちたる松風かすかにをとづれしも何となく聞き過ぐしかたかりき。云々）　コレ尤モノ道理アル說ニシテ、コレヲカノ大和物語ニ傳ヘラレタル說話ニ參考スル時、當ニ然ルベキヲ思ハズンバアラズ。サリナガラ、生田川ノ水鳥ノ一節ハ縛キニ指摘セルガ如ク、コハ全ク大和物語ニ於イテ初メテ見ル所ニシテ、萬葉集ニハ水

鳥ノ事ハ更ナリ、生田川ノ名サヘ見エズ。處女ノ壯士ニ靡キカネテ身ヲ沈メシハ入水ナリト認ムベシト雖モ、コレ將川ナリヤ海ナリヤハ究メ難ク、況ンヤ生田川ナリトハ云フベクモアラズ。又處女ノ居所ニ就イテハ只、ソノ名ニヨリテ又カノ壯士(ヲトコ)ノ一人ノ名ニヨリテ、凡ソ菟原蘆屋ノ附近ト認ムルヲ得ベキノミ。從ツテ其ノ奥城ノ所在ニ就イテモ頗ル漠然タルヲ免カレズ。ソノ地位形態等ニ就イテハサキニ注意ヲ促シ置キタレバ今ハ重ネテ云ハズ。

萬葉集ハソレ是ノ如ク空漠ナリ。去ツテ大和物語ヲ見ル。

大和物語ニ於イテハ、「女おもひわづらひて、つぶりと「生田川に」おちいりぬ」トアルヲウケテ、「そのかみおやいみじうさはぎて、とりあげてなきのゝしりてはふりす」トアリ。ソノ墓所ニ就イテハ何處トモ指示スル所ハ無ケレドモ、文勢ノ赴クトコロ其ノ附近ト見テ誤リナカルベキカ。壯士ノ墓ニ就イテハ「されば女のはかをば中にて左右になん男のつかどもいまはあなる」トアリ。果シテ然ラバコレ等ノ遺蹟ハ生田川ヲ中心トシテ、ソノ附近ニコレヲ求ムベキナリ。抑々現時ノ生田川ハ極メテ最近ノ開鑿ニカヽリ、ソノ以前ニアリテハ今ノ布引通加納町ノ町筋ヲ貫通セリ。往古ノ川筋ニ至ツテハ素ヨリ不明タルヲ免カレズト雖モ、コレヲ現場ニ就イテ考察スルニ舊生田川卽チ加納町ノ町筋ヲ以ツテ最モ自然ニ近キ川筋ナリトスベキガ如シ。今配置ノ上ヨリソノ樣態ニ適フモノヲ求メナバ、東明ノソレヲ中心トシテ呉田及ビ味泥ノ三個ヲ擧グベキカ。コレ等三個ノ墳ハ其ノ位置頗ルソレニ恰當シ、中央ナルハ南面シテ海ニ向ヒ、左右ノ二個ハ中央ノニ向フ。シカモ三者共ニ略同形同大ニシテ距離マタ相若クニ於イテハ、イヨ〳〵コヽニ特別ノ關係アルベキヲ推想シテ、軈テカノ處女ノ傳說ニ想到スルハ寔ニ理ノ當然ト云フベシ。當ニ然リ。然リト雖モ、カクテハ生田川ヲ主トシテ考フルトキ瑣カ距離ノ遠キニ失スルノ憾ミナキカ。他ニナホ此ノ川ニ近ク、コレニ該當スベキモノヲ求メ得ザルヤ如何。コレヲ德川時代ノ地誌ニ檢スルニ、已ニソノ所傳ヲ失フト雖モ幸ヒニ其ノ名ヲ野乘ニ留メタルモノ、脇濱村ニ天王塚和理塚畔塚アリ、熊内(クマウチ)村ニ旗塚福井塚等アリ。今ヤコレ等ハ多ク壞滅ニ歸シテ又尋ヌベキモノ無シ。先年、生田町二丁目井戸虎雄氏邸内ニ於イテ、嘗テ地面整理ノ際偶々古墳ノ發見セラレタルコトモアリ(イマ同家ニソノ遺品ノ一部ヲ藏セリ)。或ヒハカクノ如キ悲運ニ遭會セルモノヽ、中ニ、カヘツテソノ要件ニ適フベキモノヽ、無カリシヤ否ヤ。カク考フル時、現ニ乙女塚ノ名ヲ傳ヘテ生田川ニ比較的近ク遺存セルカノ脇濱ノソレノ如キハ、寧ロヨリ多ク注意セラルベキモノニハアラザルカ。素ヨリ歲次ヲ經ルコトノ久シキ、今日ニ及ンデコレヲ究明センコトハ全然不可能ノ事ニ屬スベシト雖モ、シカモナホ一個ノ傳說地トシテ相當ノ價値ヲ認ムベク、無下ニ放却スルヲ許サヾルベシ。

凡ソコノ問題ニ就イテ生田川ヲ云フハ、ソノ基點ヲ大和物語ニ置クモノニシテ、萬葉集ニ據ルモノニアラズト雖モ、今日此ノ菟原處女ノ傳說ヲ云フモノ、大和物語ニ依ルヲ通例トナシ、多ク萬葉集ヲ云ハズ。故ヲ以ツテ、ワガ立論モイマ此ノ通說ニ准ジテ以上ノ言ヲナセルナリ。

六　結語

處女塚ニ就イテ尠カラザル筆紙ヲ費セル予ハ殆ンドソノ言フベキヲ盡シテ今當ニソノ達スベ

キ歸結ニ達セントス。

菟原處女ノ傳說ノ萬葉集ニ取入レラレテヨリ已ニ千有餘年ノ久シキ歲月ヲ閱シ、ソノ間ニ說話ハ漸次多種ナル分子ヲ混入シテ、其ノ內容ハ漸ク複雜トナリ、其ノ形態ハ益々修飾セラレテ遂ニ今日見ルガ如キモノトナリタリ。而シテソノ影響スルトコロハ、或ヒハ歌人ノ風懷ニ入リ或ヒハ墨客ノ彩管ニ上リ、終ニハ藝能ノ士ノ演技ニサヘ上リテ、廣ク世人ノ興懷ヲ潤ホシ、長キ生命ヲ人ノ心胸ニ宿スニ至レリ。カクノ如キ說話ヲ有スルハヒトリ鄉土ノ誇タルノミナラズ又實ニ國民ノ重寶タリ。サレバ其ノ遺蹟ノ如キモ、コレガ所在ニ就イテタトヒ說ヲ二三ニスルモノアリトスルモ、宜シクコレヲ尊重シコレヲ愛護スベキナリ。

――遮莫、ギコチナキ論議ヲヤメヨ。ソハ、此ノ墳ノ主ニ對シテ餘リニフサハシカラジ。願ハクハ吾レニ容スニ寬宏ヲ以ツテセヨ。素ヨリ傳說ニ生レ傳說ニ育クマレテ成長セル哀話ノ主ナラズヤ。靜カニ思ヘ、此ノ墳ノ主ノ生涯ヲ。ソハ、戀故ニ身ヲ棄テシ處女ナリ。咲ク花ノ春ヲモ待タデ果敢ナク散リシ乙女ナリ。而シテ又、一切ヲ君ニ捧ゲテ淸ク逝キニシ二人ノ壯士ナリ。カクテ優ニヤサシキ物語ヲ後ニ遺シテ哀レニ去リシ三人ノ靈ハ、コヽニ眠リカシコニ憩ヘルナラン。請フ、涙ニ潤ホヘル眼ヲ彼處ニ注ゲ。其處ノ荒レタル草蔭ニ、彼レハ此ノ物語ニフサハシキ遺骸ヲ臥セテ、身ノ薄幸ヲ嘶テルヤモ知レザルナリ。若シソレ、コヽニ史家アリ、嚴正ナル彼レノ史眼ニ照シテ、カノ東明ノ墳ノ如キヲ批判シテ、カクノ如キハ賤ノ女ノ能ク爲シ得ルトコロニアラジ、必ズヤ高貴ナル仁ノ奧城ナラムト云ヒテ、ソノ不條理ヲ非議スルモノアラムカ、予ハ謹ンデ足下ノ冷靜ナル批判ニ聽カンノミ。（渡部委員）

有馬郡

第三　湯泉神社並清涼院

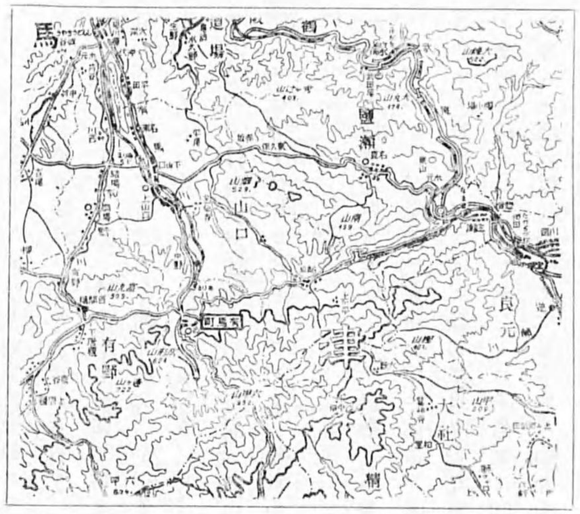
〔圖版第八〕

一

日本書紀卷廿三舒明天皇御宇三年秋九月十九日ノ條ニ「幸于攝津國有間温湯」トアリ、ツイデ十二月十三日「天皇至レ自ニ温湯」トアルヲ以テ、有馬温泉ノ史上ニ見ユル最初トシ、天皇ハ更ニ十年冬十月有馬ノ温湯宮ニ幸シ給ヒシマヽニテ新嘗サヘモ聞食サズ、越エテ翌年春正月八日ニ及ビテ還幸シ給ウ事アリ。更ニ孝德天皇亦大化三年冬十月十一日左右大臣群卿大夫等ヲ從ヘテ有間ノ温湯ニ幸シ給ヒ淹留七旬、十二月晦日ニ至リテ漸ク武庫行宮ニ還幸シ給ウ事ヲ記セリ。蓋シ我國上代ニ於テハ道後温泉ト相比ビテ最モ著名ナリシ温泉場ナリシナルベク、特ニ爾降帝都所在地ニ近カリシタメニ、上下ヲ通ジテ多クノ湯治客ヲ迎ヘ、我國湯治場トシテ代表的ノモノタリ。

二

記紀ヲ按ズルニ、天孫降臨ニ先チテ豐葦原瑞穗國ヲ經營セシ神ニ大國主命アリ、大穴牟遲葦原色許男神・八千矛神・宇都志國玉神・大物主神・大國魂神等ノ名ヲ有セラレシヲ以テ大名持命ト言ハレ、普通大己貴神ノ字ヲ以テ表ハサル。大己貴命ハ一日出雲御保岬ニテ神產巢日神ノ御子ナル少彦名神ト兄弟ノ約ヲ結ビ、倶ニ力ヲ合シテ國土經營ニ從ヒ、專ラ藥禁厭醫ノ法ヲ定メ給ウ。然ルニ其後間モナク、少彦名神ハ常世國ニ去リ給ヒシヲ以テ、大己貴神之ヲ惜ミ憂フル事限リナク、「我如何デカ獨力ヲ以テ此國ヲ經營シ得ベキ、孰レノ神トカ與ニ此國ヲ作ラン」ト慨嘆之ヲ久シクシ給ウ、時ニ海ノ彼方ヨリ光ヲ放チテ渡ル神アリテ曰ク、「我ヲ祭ラバ汝ト共ニ經營スベシ」ト。「御名ハ」ト大己貴命問ヘバ「吾ハ卽チ汝ノ幸魂奇魂ナリ、我ヲ大和ノ三室山ニ鎭メ祀リ給ヘ」ト。則チソノ言ニ從ウ、之ヲ今日ノ三輪明神ナリトス。



第七圖　有馬町附近地圖

三

繼體天皇ノ末年ヨリ安閑・宣化兩帝ヲ經テ、欽明天皇ノ初年マデノ頃ニ於テ、我國ニ佛教ハ傳來セシモ、ソノ深奥幽邃ナル教理ノ到底我國民ニ理解サルベクモナク、從ツテ佛者ノ努力ハ宗教的ナル衆生ノ濟度ニ向ケラレズシテ反ツテ現世的ナル救濟慈善ノ方面ニ致サレタリ。用明天皇ハ御親ラノ御惱平癒ヲ祈願センガタメニ聖德

皇太子ト共ニ誓願ヲ立テ、平癒ノ暁ニハ一寺院ヲ建立シテ藥師如來像ヲ安置セン事ヲ約シツヽ、翌年崩御シ給ヒシヲ以テ、推古天皇十五年ニ一寺ヲ興シ止利佛師ノ作リシ藥師三尊像ヲ安置シ給ヘリ、コレヲ法隆寺ノ權與ナリトス。マタ、天武天皇八年十一月皇后(卽チ後ノ持統天皇)御不豫ナリ、天皇卽チ丈六藥師像造立ノ誓願ヲ發シ、ソノ功德ニヨリテ皇后ノ平癒ヲ希ヒ給フ。皇后間モナク快癒シ給ウ。然ルニ惜シムベシ、勅願ノ靈像漸ク成ラントシ鋪金未ダ遂ゲラレザル時ニ、天皇忽チニ升遐シ給ウ、皇后卽チ位ヲ嗣ギ給ヒ直チニ前緒ヲ奉ジテ斯業ヲ成就シ、ソノ稱制二年正月八日無遮ノ大會ヲ設ケ、十一年七月公卿百寮ト共ニ藥師佛開眼ノ事ヲ行ヒ、文武天皇二年十月ニ至リテ伽藍全ク結構了レリ、コレヲ藥師寺ト名ヅク。

我國最古ノ佛寺タル法隆藥師兩寺成立ノ由來如此シ、以テ我國最初ノ佛敎ガ、衆生ノ頓生發菩提心ヲ專ラトセシモノニ非ズシテ、病氣平癒ノ功德ニ重キヲ置キシ事ヲ推知シ得ベシ。

四

既ニ遠ク印度並ビニ支那ニ於テ湯浴ノ風習ヲ得タル佛者ハ、之ヲ我國ニモ將來セシ事ハ疑フベクモ非ズシテ、我國民ガ熱湯中ニ沐浴スル慣習ハ寧ロ彼等ノ齎セシモノト言フベキナリ。

カクシテ我國ニ於テモ、最初溫泉ヲ發見セシハ恐ラク彼等浮屠ノ徒トスベク、溫泉ノ効驗ヲ以テ藥師菩提ノ功德ニ歸セントスル佛者ノ試ミ亦自然ト謂フベキナリ。茲ニ於テ凡ソ著名ナル溫泉場ニハ必ズ藥師如來ヲ本尊トスル藥師寺ハ創建セラルヽニ至レリ。サレバ有間溫泉ノ如キモ、ソノ然ラザルヲ證明スベキ史料ノ出現セザル限リ、佛敎徒ノ手ニヨリテ發見サレシモノト觀ルベキヲ至當トス。果シテ然ラバ、現存史料ニ舒明孝德ノ頃ニ始メテソノ名ヲ記載セラルヽニ至リシモ亦首尾符合スルモノトスベク、ソノ間何等ノ不合理アルナシ。

五

佛者ノ努力ハ終ニ固有ノ神ト接近シ、神佛習合說ヲ生ズルニ至レリ。茲ニ於テサキニ記セシ如ク、我八百萬神ノ中ニ於テ醫療ノ方面ヲ司リ給ウハ大己貴命及ビ少彥名神ナリシカバ、溫泉場ニハコレ等ノ諸神ヲ祭神トスル湯泉神社ノ出現トナリ、藥師如來ヲ本尊トスル藥師寺ト併立シ顯幽其名ハ異リト雖モ、國土安全息災延命ニ力ヲ致シ給フヲ通例トスルニ至レリ。今延喜式神名帳ヨリ湯泉神社ヲ摘記スレバ左ノ如シ。

延喜式神名帳

國	郡	神社名	現位置	祭神(依神祇志)
攝津	有馬	湯泉神社	攝津、有馬、有馬	三輪神
下野	那須	湯泉神社	下野、那須湯本、那須溫泉	大己貴命 少彥名命
陸奥	玉造	湯泉神社	陸前、玉造、湯本、鳴子湯	大己貴命
陸奥	玉造	湯泉神社	磐城、石城、湯本、佐波古湯	大己貴命 少彥名命
陸奥	玉造	湯泉石神社	陸前、玉造、川度	少彥名命
因幡	巨濃	御湯神社	(不明)	少彥名命
伊豫	溫泉	湯神社	伊豫、溫泉、道後	大己貴命 少彥名命
出雲	意宇	玉造神社	出雲、意宇、玉造	大己貴命

就中、有馬ノ湯泉神社ハ名神大ニシテ、月次・新嘗以下四度ノ官幣ニモ預リ、他ノ湯泉神社ト

比シテ格段ノ差アルモノナリ。惟ウニソノ地理的關係トソレニヨリテ誘出サレシ歴史的事情ニ基クモノナラン。

六

然ラバ有馬温泉神社ノ出現ハ何時ナリヤト云フニ、平安朝末期ト言ハル、伊呂波字類鈔ニ引ク所ニヨレバ、崇神天皇ノ七年既ニ本社ノタメニ神戸ヲ置カレシ事天慶八年ノ交替帳ニ見ユル由ナレドモ、崇神御宇ノ事ハ遽ニ信ジ難ク、奈良朝又ハ平安朝初期、佛者ノ手ニヨリテ勸請セラレシモノト見ルベキニ非ルカ、記シテ後考ヲ俟ツ。

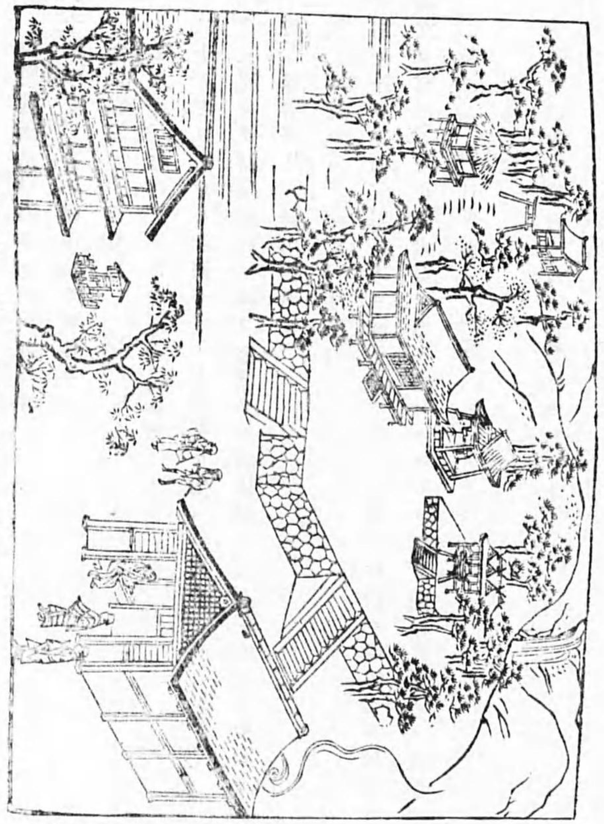
爾來、大治三年三四月ノ交白河法皇ノ御幸(中右記目錄安元二年三月九日後白河法皇建春門院ノ御幸(百練抄)以下皇親諸臣ノ入湯スルモノ極メテ多ク、一々之ヲ枚舉スルノ遑ナシ。

但シ千載集ニ云ヘル[有馬の湯にしぬひて御幸ありける御供に侍りけるに、湯明神をは三輪の明神とかむ申侍るときゝて、按察使資賢、めつらしく御幸を三輪のかみからはしるしありまの出湯かるらん]トアル歌詞ハ注目ニ値スベキモノニシテ、當社祭神ヲ三輪明神トスル說ノ、可ナリ古キヲ知リ得ベシ。

現在スル湯泉神社ニハ神社ノ由緒、陵夷、變遷ヲ見ルニ足ルベキ史料鮮ク、僅カ德川期ノモノ數點ヲ有スルノミ。

七

サキニ言及セシガ如ク、温泉ニハ藥師如來ヲ本尊トスル温泉寺ノアルヲ以テ通則トシ、有馬



第八圖　寶永六七年頃有馬湯泉神社及ビ温泉寺

マタ温泉寺アリタレドモ(寶永六年執筆貝原益軒著有馬湯山記)ニモ、温泉寺アリテ古キ寶物ヲ所藏スル由ノ記載アリ)現存湯泉神社入口ノ左手ニハモトソノ塔頭寺院タリシ清涼院ノ名ヲ存スル寺院アレドモ温泉寺ナシ。而シテ清涼院亦火災ニ遇ヒテ古記銘什器ノ大半ヲ失ヒ、今僅カニ數點紺紙金泥經ヲ有スレドモ、何レモ年紀ナキヲ以テ何時ノモノト斷定スル事能ハズ。ソノ中ニアリテ左記ノ如キ經篋一個ヲ秘藏スルハ、極メテ欣ブベキ事タリ。青銅製ニシテモト鍍金又ハ金箔ヲ置キタル痕ア

リ、表面ニ細キ毛彫アレドモ火中セシタメニ融滅シテ文様ヲ識別シ難キモ恐ラク蓮花唐草ナリシナルベク、長サ三〇センチ、幅一八センチ、深サ八センチノ長方形經篋ナリ。(圖版第八)而シテソノ蓋ノ表面ニハ

依閻魔法皇勸進奉納温山如法經

ノ十四字ヲ、身ノ横面(右左両側)ニハ

如法經箱　温泉山　(右)

文永八辛未年八月卅日勸進比丘俊尊

ノ二十三字ヲ何レモ陰刻セリ。古色最モ掬スベキナリ。

清涼院ヨリ湯泉神社ニ昇ラントスル石階段ノ耳石ニ左右ニ分レテ次ノ如キ陰刻アリ、

(右)　奉修石階　湯山住角屋

(左)　害寛永八辛未年二月十五日

又清涼院ヨリ禰宜屋ノ方ニ降リントスル石段ノ右側ニ自然石ニ刻メル二躰ノ佛像アリテ何レモ銘文ヲ有ス、コレ亦火事ノ難ニ遭ヒタリシヲ以テ破滅甚シク、文字判明シガタキ憾アリ、

「施主阿彌陀堂麟朝如堂

(佛　像)

天文口年口申卯月一日万部經結願日作之」

「施主爲善心禪門逆修也

(佛　像)

天文廿二年癸丑五月十五日」

前者ニ就テハ天文年間ニハ五年及十七年ノ二回申年アルヲ以テ何レトモ定ムル事能ハズ。

併セ記錄ス。

八

最後ノ項ニ於テ、一二ノ事項ヲ附記シテ以テ、本報告ヲ終ラントス。

一温泉ヲ中心トスル宿泊所ノ中、十二坊ト稱シテ古キ由緒ヲ有ストスルモノアリ。曰ク、中坊、池坊、花坊、御所坊、角坊、奥坊、下大坊、二階坊、北坊(兵衛)、尼崎坊、權現坊之ナリ、モト温泉寺衆徒十二坊ヲ置キシトスル縁起ノ名殘ヲ止メ、(ソノ數ハ暗合ナレバ、重キヲオクニ足ラズ)、寺院自ラ旅宿ノ宿泊所タリシ一例トシテ尊重スベキ事象ナリ。

二貝原益軒ガ寶永六年ニ執筆シ、同八年ニ出版セシ『有馬湯山記』中ニ頗ル參考トスベキ記事多ク、コヽニ記セシ十二坊ノ如キモ當時二十坊アリシ事ヲ知ル、少シク抄錄ヲ試ムレバ、

○此地温泉はたゞ一所あり、其間板をもつてへだてゝ二所とす、南を一の湯とし、北を二の湯とす。湯入の客の宿もる家二十坊あり、寺にハあらずといへども坊の名あり、其内一の湯に十坊、二の湯に十坊有、御所坊は秀吉公入湯し給ふときの御宿なるゆへ名付とかや、湯を守るものハ皆女なり、湯女と言、湯浴の人をよび、湯の出入をつゐさどる。一坊に老若二人

あり、廿坊に凡四十人あり。

○入湯の法　凡此湯に入に、彼地の法義あり、湯文といふ物にしるせり、湯に入にハ、食後よし、うゑて空腹に入事をいむ。一時にひさしく入をいむ、又しけく入事をいむ、つよき病人は一日一夜に三度、よわき病人は一二度をよしとす。三度は入べあらず。つよき人も湯の内にひさりて身をあたゝめ過すべあらぢ、はさにこしあけて先足をひさし、次にひしやくにて湯をくみて頭よりあさにかけてよし、湯の内に入ひさるべあらぢ。久しくゆをあぶれバ、身あたゝまりすぎ、表氣ひらけ汗いで、元氣もれて大にどくとなる。あろく入べし。汗出る事甚あしゝ。凡湯入の間、尤身をつゝしむべし、ゆあがりに風にあさるべあらぢ。入湯の間、上戸も酒多くのむべあらず、氣めぐり食もゝむとも大食すべあらぢ、酒にゑひて入べあらぢ、湯よりあがりて則酒をのむべあらず。味からきもの多く食ふべあらず。熱性のもの寒冷の物食ふべからず、性かろきうを鳥少づゝ食ふべし、色慾をおろす事はなはだいむ。湯よりあがりて後も、二七日いむべし。時々歩行して氣をめぐらし食伎消すべし。ひるねすべあらず、入湯の日數おはりても、風雨はげしくは歸るべあらぢ、天氣しづろにかりてかへるべし。湯治の内、灸伎いむ、あがりて後も數日の間灸すべらぢ。

三豐臣秀吉及ビ北政所ガ有馬ニ湯治セル事ハ有名ナル事ナレバ、説明スル要ナキモ、次ニ二通ノ消息――秀吉ヨリ北政所ニ宛テシ文祿元年初頭ト思ハル、モノヲ誦シテ以テ豐公ノ人格ヲ偲ブヨスガトスベシ、前ノ一通ハ秋元子爵家所藏ノモノ、後ノ一通ハ京都帝國大學文學部所藏ノモノナリ。

かへす〳〵、め(目)は大じの事で候間、其ためにゆ(湯)へいれ申、われ〳〵いり候はで一入いれ候事あ、はしめにて、いかほど〳〵いれれ事、めいわく(迷惑)にてれへとも、そもじ、しせん(自然)めわつら(煩)ひ候てはと存じれて、ゆ(湯)へ、めいわくおからいれ、やいと(灸)なとしてはよくれはんや、うちかた(打肩)よくれはんと存しれへとも、ゆへいりたきよし、そもし申まゝ、ゆへいれ申、ゆよりあかりれて、うちかた(打肩)のさに、やいと(灸)よくれべし、其きざみ(刻)、われ〳〵参れはすは、こうそす(孝蔵主)進上可申、其心へれへくれ、かしこ

一日は、御いとまこひ(暇乞)不申、御のこりおほく、おもひれへくれ、そもじの御めよくれや、ゆへいりてよくれはんよし、うけ給れ間、ゆの山のふしん(普請)申つけに、まいたもん(前田主水)とを、つかわ(遣)せれ間、廿七八日ころにわでき(出来)れはん間、其心へれていりれへくれ、すこしも〳〵、した〳〵まて、はし(端)たなる心もちれはんように、申つけれはん事、せんにてれ、おふくろ(お袋)をつれれて、いりれへく候、いらさるものは一人もむやうにてれ

廿二日

にしのまる五もしへ

大かう

かへす〳〵、ゆへそもし一人いれれハん事、めいわくにれつれとも、めは大じの事にてれ間、まつ〳〵ゆへいれれはんあと存候、やいとを、うちかた、又こし(腰)なとにつほ(壺)おろ

させ、きゝほどあそはしほへくほ、かならず、こゝもとふしん申つけ、一日ころにわ
いそき(急)参可申ほ、又大つのおち(乳)をよひよせほておきへくほ(可置)
かさねての文、ねんころにみ参らせほ、ゆへいりほはん事、まつ〳〵やいとあそはしほハん
よし、しかるへくほ、一日ころにこし可申候、くすし(醫師)〳〵よひ候て、つほおろさせ可申ほ間、
其心にてやいとまつ〳〵しまいらせほへくほ、又すそひ(裾)へほまゝ、ゆへいりほハゝ、よくほ
はんと存候、めわす(目)そひ(裾)えほに仍、上きほ(氣)上かと存候、まつ〳〵ゆのふしんやめさせ申、ゆ
へいりほてよくほはんと申ほハゝ、ふしんの事、十日はかりかゝり候はゝ、いてき可申ほ、
まつ〳〵やめ申候　かしく

廿四日　　大かう

にしのまる五もしへ　返事

（中村委員）

美囊郡

第四　弘計・億計二王隱棲傳說地（補遺）

本委員ハ本報告書第三輯ニ於テ頭書ノ史蹟ニ就テノ報告書ヲ掲ゲシガ、上古ニ於テ皇室ト特殊ノ關係アリシ土地ハ、マタ中世以後ニ至リテモ何等カノ形式ヲ以テ皇室ト關係ヲ有スル場合多シ。故ニ該報告ノ末端ニ於テ片影ヲ示セシガ如ク、志染庄マタ我國中世史上ニ於テ皇室領トシテ出現セシニ非ルカヲ思ヒ、私カニ文献ヲ渉漁シツヽ、空シク一年ヲ經過セリ。然ルニ頃日、他ノ目的ヲ以テ「後宇多院御領目錄」ヲ調査シツヽアリシ際、計ラズモ同御領目錄中ニ志深庄ノ名アルニ遇目シ、欣然措ク能ハザルモノアリシヲ以テ、今茲ニ補遺トシテ記錄シ置クベシ。

「後宇多院御領目錄」ト稱スルハ、後宇多上皇ノ御領地ヲ嘉元四年六月十二日昭慶門院喜子内親王ニ讓與シ給ヒシ際ノ御料地目錄ナリ。ソノ中ノ「非寺領庄々」トシテ抽出セル一項中ニ左ノ記載アリ

蓮花心院領也
播磨國志深庄　書提院宮

記事極メテ簡素ニシテ、ソノ眞意ヲ捉フル事甚ダ困難ナルモノアリ。而シテ同目錄ハ、更ニ該項ヨリモ以前ノ箇所ニ蓮花心院領ヲ列擧セル項目アレドモ、ソノ中ニハ志深庄ノ名ヲ逸ス、惟ウニ志染庄ハ蓮花心院領トシテ歷代皇室ニ傳領セラレシモノナリシガ、嘉元ノ頃ニハ何等カノ

理由ニヨリテ蓮花心院領ヨリ分割セラレテ菩提院宮ノ御手ニ傳ハリシモノ、如シ。菩提院宮トハ龜山法皇ノ皇子ニシテ梶井門跡トナリ天臺座主ニ二箇度マデモ坐リ給ヒシ覺雲法親王ノ御法號ナリ。

今茲ニ擧ゲシ「後宇多院御領目錄」中ニ含マル、御料ノ多クハ、史上有名ナル八條院領ト稱スルモノヲ含ムモノニシテ、鳥羽天皇ノ皇女八條女院暲子内親王ノ御遺領ヲ中核トスル皇室御料地ノ一部ナリトス。該八條院領ハ女院ノ御手ヨリ轉々シテ龜山法皇ノ御管領ニ歸シ、法皇ヨリ後宇多上皇及ヒ恒明親王ニ傳領セラレ、爾後多少ノ曲折ヲ經タレドモ大覺寺領ノ御手ヲ去ラズシテ後醍醐天皇ノ御手許ニ達セシモノ、後醍醐天皇討幕計畫ノ財源ニ非ルカト推セラル、モノナリ。サレバ上掲摘出ノ記載ヨリ察スレバ、覺雲法親王ハ龜山院ノ皇子ニ坐スヲ以テ、嘉元四年以前ニ龜山院ヨリ覺雲法親王ニ分讓セラレシモノト見ルベク、後宇多院ガ皇妹昭慶門院ニ傳ヘ給ヒシ際ハ、法親王御管領中ナリシガ如シ。而シテ法親王ハ元亨三年十月ヲ以テ薨ジ給ヒシカバ、ソノ御領等悉ク時ノ天皇後醍醐帝ニ歸シタルモノト解スベク、後醍醐天皇ト大覺寺トノ關係ハ、サキニ示セシガ如ク延文五年ニ大覺寺ガ志染庄ノ領家トシテ現ハル、ニ至ル緣由ヲ察知セシムルニ難カラズトス。

然ラバ志染庄ガ八條院領ノ一部ニ加ヘラレシ時期及經路如何ト云フ問題ハ當然提出サルベキナレドモ、今之ヲ解決スベキ史料ニ缺クヲ以テ、ナホ後日ノ探査研究ニ俟タザルベカラザルヲ遺憾トス。（中村委員）

加古郡

第五　八幡村ノ調子塚古墳

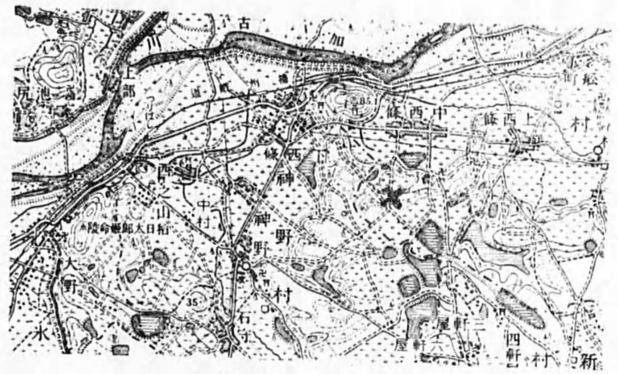
〔圖版第九—第一二〕

調子塚ハ加古郡八幡村中西條字調子塚ニアリ。

播丹線厄神驛ヲ去ルコト西南千二三百メートルニシテ中西條ニ達スベク、塚ハ該部落ノ南方約千百メートルノ地點ニ在リ。里俗稱シテ行者山ト呼ベルモノハ蓋シソノ狀、隆然タル丘陵ヲナセルガ上ニ、後年文化七年ノ交ニカ、大峰ノ行者ニヨリテ、此處ニ護摩壇ト共ニ一祠堂ノ建設セラレタルモノアルニ由ルナリ。コノ地モト、東播加古ノ平野ノ北邊ニ位シ、眺望必ズシモ濶大ナリトハ稱シ難シト雖モ、而モナホ地ハ緩丘ヲ擁シテ高爽、加古川ハ其ノ脚下ヲ貫流シ、日岡山ハ西ノ方二キロ有餘ノ近キニアリテ四時ソノ翠ヲ現ズ、林間遠ク一抹ノ碧キヲ呈セルモノハ播磨灘ナルベシ。

本古墳ハ高臺ノ上、田圃ノ間ニ存在セリ。整美ナル前方後圓ノ形式ヲ具ヘ、主軸ヲ東北ヨリ西南ニ置キ、略西南ニ面ス。後圓部ノ直徑大約六四メートル、前方部ノ幅凡ソ四七メートル、前面ノ周緣ヨリ「クビレ」部ニ至ル長サ約三四メートルヲ數フベク、巨然タル一大古墳タリ。ソノ高サ、前方部ニ於イテハ最高三・五メートルヲ出デザレドモ、後圓部ニアリテハ十二メートルニモ及ブベシ。尤モ後圓部ノ頂上ハイマ著シク削平セラレタルヲ以ッテ、コレヲ正確ニ測定シ難

第九圖　八幡村附近地圖



× 調子塚所在地

キ憾ミアリ。中央(クビレ)部ノ西面ニ多少ノ隆起セル部分アリテ、造出シノ面影ヲトゞメタリ。墳壟ノ裾ヲ包ミテ柴草アリ、松樹ハソノ全面ヲ覆ヘリ。本古墳ハ損傷ヲ蒙レル部分尠カラズ、特ニ其ノ後圓部ニ甚シキモノアリテコレガ築造ノ當初ニ於ケル狀態ハ、今推知シ難シト雖モ後圓部ノ諸在ニ河原石ノ散亂セルモノアルヲ以ッテ見レバ、モト葺石ノ設ケ有リシヲ知ルベク、特ニ前方部ニハ今尙多量ニ礫石ヲ遺存シテ、比較的能クソノ原狀ヲ髣髴セリ。封土ノ幾段ニ築カレシカハ明カナラズ、環湟ト覺シキモノハ僅カニ前方部ノ一部、卽チ其ノ西方ニコレヲ認メ得ベシ。

本古墳ニ於イテ特ニ注意スベキハ埴輪圓筒ト埴輪樹物トノ存在ナリトス。埴輪圓筒ニシテ今認メ得ベキモノハ後圓部ノ頂上ト前方部ノ一部トニ過ギザレドモ、思ウニカクノ如キ所以ノモノハ職トシテ本古墳ノ、久シク祠堂ノ境內ニ當テラレテ、地方人ノ蹂躪ニ委セラレタルニ由ルベシ。今、頂上ニ遺存スルモノ五個ヲ貫ヌルトキハ直徑凡ソ十メートルノ圓周ヲ得ベキト、前方部ニ現存スルモノ四個ガ皆ソノ部ノ前面ヲ爲セル周緣ニ近ク二メートルノ內方ニアリテ略コレニ平行セルトハ、共ニ本古墳ノ原形ヲ考フル上ニ參考トナルベシ。コレ等ノ埴輪圓筒ニ就キテハ、ソノ埋設ノ狀態ハ殆ンド通有ノ樣式ニ屬シテ特記スベキモノ無シト雖モ、只ソノ形狀ニ於イテハ稍留意スベキモノアリ。

本古墳發見ノ埴輪圓筒ハイマ中西條山本菊治氏及ビ加古川史談會ニコレヲ藏セリ。兩者何レモ其ノ最上部ヲ缺ケドモ、ナホ比較的完形ニ近キモノトシテ尊重スベシ。ソノ形狀ハ、大體ハ通常ノモノニ似テ、現存部ノ全長四八.五センチ、下端ノ口徑二二.七センチ、上部ノ直徑二七.二センチアリ。圓筒ハ外側ノ上下ニ三條ノ突帶ヲ繞ラシ、ソノ間二個宛二段ニ直徑五センチ許リナル圓形ノ小孔ヲ穿テリ。ソノ製作ハ薄手(厚サ一.五センチ許リ)ノ精巧ナル部ニ屬ス。特ニ注目セラルベキハ、此ノ孔ヲ結ベル軸線ト直角ヲナシテ二枚ノ鰭狀ノモノノ、左右相對シテ圓筒ノ外側ソノ上半部ニ縱ニ附加セラレタル點ニシテ、其ノ幅何レモ五センチ許リ、長サ現ニ二四.五センチアリ。(但シ、ソノ上部ハ今、圓筒ト共ニ缺損セルヲ以ッテ、其ノ全長ヲ究ムルコトヲ得ズ)。ソノ形狀希異ニシテ類例稀ナリ。珍トスベシ。而シテ加古川史談會員門野齊之助氏ノ告グル所ニ據レバ、コレ等圓筒ハ鰭ト鰭ト相接スベク密ニ並列セラレタリト云フ。果シテ然ラバ埴輪圓筒ノ性質ヲ考究スル上ニ於イテモ注意スベキ點ナリト云フベシ。

次ニ埴輪樹物ハ後圓部(特ニ頂上ノ近ク)ニ於イテコレヲ得ト雖モ、何レモ皆異形ニ屬シ、且ツ小破片ニ過ギザルガ爲メニソノ原形ヲ尋ネ難キヲ遺憾トス。但シ中ニ直線ト弧線トヲ用ヒテ、

巧ミニ幾何學的文樣ヲ刻セルモノアリテ人ノ注意ヲ惹ク。コレト土質文樣等ノ類似セルモノニハ山城國金村牛頭山古墳發見ノ埴輪片アリ、又河内國古市ノ譽田及ビ二子塚ノソレノ中ニモ亦共通ノ點無シトセザルコトハ圖版ニ就イテコレヲ知ルベシ。

本古墳ハ外ニ何等ノ出土品無ク、ソノ内部構造ニ就イテモ亦全然知ルベキモノナシ。サレバコレガ築造年代ニ關シテハコレヲ徵スベキ資料ニ乏シク、結局古墳ノ外部的構造ヨリスル判斷ニ據ルノ外無キモ、學界ノ現狀ヨリ以ッテハ、如是ノ判定ハサシ控ユルヲ妥當トスベシ。只ソノ形狀ノ、明カニ前方後圓ノ樣式ヲ具ヘタルト、且ッ規模ノ宏大ナルト、及ビ異形ノ埴輪樹物及ビ埴輪圓筒ヲ伴ヘルコト等ヨリ見テ、コレガ古式ニ屬スルコトヲ知ルベキノミ。或ヒハ此ノ式ノ最盛時期ト見ルベキ應神・仁德兩帝陵ノ築造セラレタル年代ノ頃ノモノト爲スモノアラン。タヾ前方後圓墳ニ於イテ、畿内ニアリテハ、右ノ兩帝陵ヲハジメソノ陵墓ノ多クハ前方部ノ幅若シクハソノ長サガ、後圓部ノ直徑ニ比シテ長大ナルヲ通例トナストノ說ノ果シテ據ルベクンバ〔梅原氏「山城國久世郡久津川古墳の研究」參照〕本古墳ニ於イテ、後圓部ノ直徑ガカノ幅員ニ越エタルハ注意スベキ點ナリトスベキモ、コレ將幾外諸國ニ於イテ屢々見ル所ノ地方色ニ過ギザルベキカ。

若シソレ、本古墳ノ被葬者ノ何人ナルカニ至ッテハ、地方人ノ最モ知ラント欲スル所ナルベケンモ、全然不明ト云フノ外無キナリ。人或ヒハカノ日岡山ナル日岡陵(景行天皇ノ皇后稻日太郎姫命ノ御陵ト治定セラレタルモノ)トノ關係ヲ云爲セントスルモノ有ランモ、コレ謂ハレ無キ言說ナリ。

然リト雖モ、本古墳ノ壯大ニシテ且ッ形態ノ整美ナル點ヨリ見レバ、ソノ被葬者ノ、當時社會的有力者タリシコトハ疑フベクモアラズ。此ノ點ヨリシテコノ奥城ハ宜シクコレヲ尊重セザルベカラズ。本古墳ハ現ニ損傷セラレタル個所モ尠カラザレバ、今ニ於イテ適當ナル保存ノ途ヲ講ゼザランカ、將來益々破壞セラルヽ懼アリ。宜シク冢上ニ存在セルカノ行者堂ノ如キハ、他ニ適當ナル地ヲ撰定シテ其處ニ移轉スベク、コレ本古墳ヲ保全スルノ第一策ナルベシ。

因ミニ記ス。今西條村ノ地ヲ踏査スルニ、石棺ノ蓋石ノ搬出セラレテ、現ニ他ニ利用セラルヽモノ一二ニ止マラズ。試ミニソノ一例ヲ擧ゲンカ、下西條ノ地内ニ一ノ地藏堂アリテ、ソノ堂前ニ石棺蓋一個ヲ存セリ。緻質ノ凝灰岩ニシテ、長サ一メートル六六、幅八八センチ、所謂屋根形ヲナシ、内面ニ幅五四五センチ、深サ約九センチノ刳拔キアリ、謂フ所ノ被セ蓋キ蓋ノ式ニ屬シ、繩掛ケ突起無シ。里人ニ就イテ聞クニ、彼等ハコノ刳拔キアルヲ利用シテ、往時ヨリコレヲ灌漑用水樋ニ使用シタルヲ、後故アリテ此處ニ移轉セルナリト云フ。コノ外ニナホ同形式ノ石棺蓋アリテ、現ニ橋梁ニ應用セラレテ里道ニ架セラルヽ由ヲモ告ゲタリ。コレ等ノ搬出利用セラレタル年代ニ就イテハ、ソノ土ノ古老モ尙且ッコレヲ知ラズト云フ。又同部落内、三木町方面ニ至ル縣道ニ接シテ一小祠アリテ、内ニ一個ノ地藏尊ヲ奉安セリ。就イテ見ルニ、コレ亦石棺蓋ヲ利用シテソノ内面刳拔キノ部分ニ地藏尊像ヲ更ニ陽刻セルモノニシテ、棺蓋ノ形式及ビ大サ等ハ略々地藏堂前ノソレニ等シ。思フニ、此ノ地方モト古墳尠カラザリシモノト

云フベク、今ヤ僅カニ石棺蓋ニソノ名殘ヲ止ムルノミナルハ惜ミテモ餘リアリ。特ニコレ等ニ關連シテ遺物ノ發見セラルヽモノ無キハ最モ遺憾トスベキ點ナリトス。（渡部委員）

揖保郡

第六　鵤庄及斑鳩寺

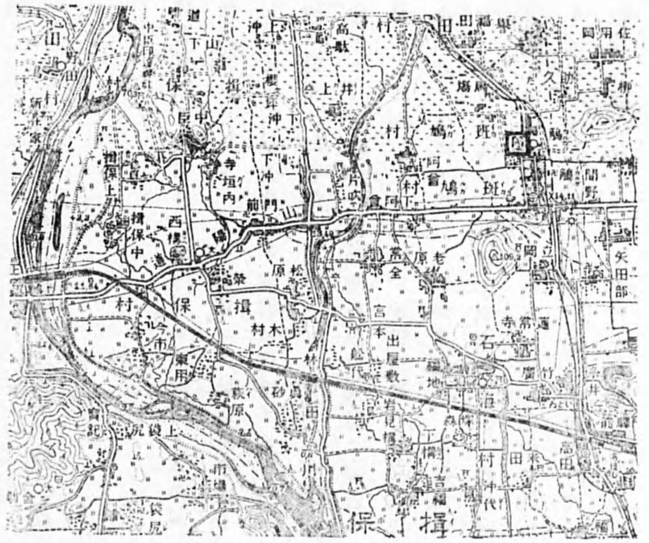
〔圖版第一二―第一四〕

一

播磨有數ノ大河タル揖保川ト林田川トノ合スルトコロ一帶ノ流域ハ地味豐沃ニシテ、ワガ古代住民ガ早クヨリコヽニ蝟集シテ聚落ヲ形成シ、ソノ文化マタ比較的ニ發達シタルトコロナルベシ。元正天皇靈龜元年以前ノ選述ト見ルベキ播磨風土記ニハ揖保郡ノ條既ニ村里驛家山川ノ名稱ニ就イテ稍詳細ニ記ストコロアリ。揖保川口ヨリ海岸ニ沿フテ西スルコト約八キロニシテ室津アリ、王朝時代以降瀨戸内海交通ノ要衝タリシコト既ニ本報告書第三輯ニ說述セルトコロニシテ、播磨平野ノ豐富ナル穀產物ハコノ海津ヲ通ジテ集散セラレタルナルベシ。本委員ハ昨夏此地方ノ史蹟ヲ踏査シ地勢ヲ案ジ、氣候風土ノ佳良ナルヲ思ヒ、カノ聖武天皇天平十九年二月十一日ニ作成セラレタル「法隆寺伽藍緣起幷流起資財帳」ノ記述ヲ思出シ、此地方ガ古ク推古天皇ノ御代ニ法隆寺ニ施入セラレタル事由ヲ理解スルコトヲ得タルナリ。

今緣起幷流記資財帳ニヨルニ、推古天皇戊午年（六年）四月十五日天皇ハ聖德太子ガ岡本宮ニテ法華勝鬘經ヲ講ゼラレシヲイタク喜バセラレ、法資トシテ大和法隆寺ニ多クノ水田ヲ附セラレ、播磨國ニテハ

第一〇圖　斑鳩寺附近地圖



在地ヨリ出デシコトコ、ニ説明ヲ要セザルベシ。而シテ斑鳩村ノ中央、山陽街道ニ沿フテ北側

揖保郡貳佰壹拾玖町壹段捌拾貳歩

ヲ賜リキ。次イデ聖武天皇十年ニハ更ラニ

揖保郡壹拾貳町貳段

ノ畑地ト

揖保郡五地（於布調岳、佐伯岳、小立岳、鴛西伎乃岳、佐乎加岳、）

ノ山林地ト並ニ池塘トシテ

揖保郡佐々山池塘

及ビ米穀ヲ貯藏スベキ庄倉トシテ揖保郡ニ

一處ヲ、並ニ食封貳百戸ノ内

揖保郡林田郷五十戸

ヲ寄進セラレタリ」。以上ハ凡テ法隆寺資財帳ヨリ摘錄セルモノニテ、奈良朝ニ於ケル揖保郡ノ地方ガ產米ノ饒多ナリシコト此等ニヨリテ明瞭ニセラルベシ。

今揖保郡ニ斑鳩（イカルガ）村アリ、ソノ地名ノ由來スルトコロハ、大和斑鳩ノ地卽チ法隆寺所

林田川ノ西ニ斑鳩寺ノ古刹アリ。本寺ノ創建ニ就イテハ史料古文書ノ湮滅セルヲ以テ今コレヲ詳カニスルコト能ハザルハ遺憾ナルモ、ソノ所在地ノ關係既ニ上述ノ如クナルヲ以テ早ク王朝時代ニ堂塔伽藍ノ盛時アリシコトヲ想察セラレ、ソレガ大和法隆寺ト深キ關係ヲ有スルモノトシテ朝廷ノ厚キ尊崇ヲ得シコト言フヲ俟タザルナリ。而モ今本寺ニ安置セラルヽ木造藥師如來座像、如意輪觀音座像以下ノ諸尊ハマタ本寺ノ沿革ノ古キヲ偲バシムルモノナリ。本寺安置ノ諸尊像ノ内、木造釋迦如來坐像、木造如意輪觀音坐像、木造日光月光菩薩立像並ビニ木造十二神將立像八軀ハ各國寶ニ指定セラレタルモノニシテ、平安朝又ハ鎌倉時代ノ製作ニ係ル優秀ナル佛像ナリ。就中十二神將ハ鎌倉時代ノ寫實的特徵ヲヨク表現シ、其刀法ハ稍活動性ニ乏シキモ、尊容等ヨク均衡ノ美ヲ保テルガ如ク、日光月光兩菩薩像マタ此時代ノ代表的手法ヲ示セルモノナルベシ。

サキニ引證セル法隆寺伽藍緣起幷流記資財帳ニアル佐々山池ハ今本寺ノ北近クニ笹山ノ地アリ、コレヲ指セルモノナルベク、風土記ニハ佐々村トアリテ、ソノ名稱ノ緣由ヲ品太天皇應神天皇巡行之時猟（サル）嚙竹葉（ササ）而過之、故曰佐々村ト説明セルモ同地點ナルベク、今斑鳩村ノ北隣ヲ譽田（コンダ）村ト稱スルハ「品太」ヨリ來リシコト説明ヲ要セズ。又資財帳ニ林田郷五十戸トアルハ、今林田川ニ沿ヒ斑鳩村ノ北八キロ餘ノ林田村ナルベク、何レニシテモ此等ノ地方ガ斑鳩寺ノ所管ニ屬シ、大和法隆寺ノ別寺トシテ寺產豐カニ且ツ地方民信仰ノ中心トシテ隆昌ヲ極メシモノナルベク、マタワガ王朝時代ノ此等地方ノ住民ハ

此寺ヲ中心トシテ文化生活ヲ營ミシモノナルベシ。

二

既ニ述ベシ如ク本寺ノ沿革ハ微スベキノ乏シキヲ以テ、コレヲ詳細ニスルコトヲ得ザルモ、武家時代ニ於イテハ、鎌倉時代幕府ノ日錄タル吾妻鏡ニ左ノ記載アルヲ見ル。卽チ、

文治三年三月十九日辛酉、依レ被レ重二上宮太子聖跡一、法隆寺領地頭金子十郎妨事、可レ停二止之一趣、去年下知給之處、猶不二靜謐一之由、寺家帶二院宣一就訴申、遣二雜色里久一、可レ止二鵤庄押領一之由及二沙汰一、件庄事、太子殊依二執思食一、有レ被レ載レ趣、二品專所二聞食驚一也、

下　播磨國鵤庄住人

可レ令レ停二止金子十郎妨一一向從二領家所勘一事

右件庄可レ停二止金子十郎妨一之由、去年依二院宣一下知畢、而金子十郎入二置代官一、令レ押二領庄一之由、重所レ被レ仰也、甚以不當之所行也、自今以後、早可レ令レ停二止其妨一、若於二不用一者、爲レ召二誡其沙汰人一、所レ下二遣使者里久一也、早可レ令レ廢二停彼妨一之狀如レ件、

文治三年三月十五日

トアリ。源頼朝ハ覇府ヲ鎌倉ニ開キ、天下ヲ統御スルヤ、常ニ神社寺院ノ保護ト復興トニ心ヲ竭シ、ソノ復古的政策ノ實現ヲ期シ、此文治三年ニハ奈良東大寺ノ再建サヘ思立テルニテ、今本寺領ガ地頭金子某ニヨリテ押領セラルヽヲ訴ヘタルヲ知リテ、直ニ後白河院ノ院宣ニ從ヒ、ソノ押領ノ禁止ヲ令セルモノナリ。頼朝ハ本寺領ガ聖德太子ノ聖跡タルヲ追懷シ特ニ厚キ保護ヲ加ヘントセシコトヲ知ルベク、此時代ニアツテモ依然此地方ガ大和法隆寺ノ寺領トシテ替ルコトナカリシナルベク、斑鳩寺ハ法隆寺ニ屬シテ寺運ヲ維持シタルナルベシ。

越エテ南北朝時代ニアリテハ建武以來播磨ハ南朝ノ主將新田氏ノ管スルトコロニシテ、南朝ニテモ此地方ヲ重大視セシコトヲ想像セラル。而シテ足利尊氏叛逆後ニ於イテハ斑鳩ノ地ハ、播磨ニ於ケル新田、赤松ノ二勢力ノ衝突地トシテ有名ナル斑鳩ノ平原戰ヲ惹起セリ。卽チ太平記(卷第十六)ニ據レバ新田義貞ノ先鋒ハ延元元年三月飾磨郡書寫山坂本ニ着シ、斑鳩村ノ東南朝日山ニ赤松氏ノ軍ヲ擊破シ、次イデ義貞親ラ軍ヲ督シテ斑鳩宿ニ進擊セリ。足利方ニ屬セル海老名尊楠丸代間三郎泰知ノ申狀中ニ

今年延元元年三月十六日鵤樂(イカルガ)々山合戰之時、於二樂々山北峰一、抽二軍忠一之次第、云々(海老名文書)

トアリテ太平記ノ記事ト合ヘリ。而モ法隆寺文書ニ

法隆寺雜掌申、播磨國鵤莊堺事、申狀進覽、子細見レ于レ狀候歟、當莊數日間取レ陣候之間、爲二官軍一令二損亡一候了、訴訟事、任二道理一可レ有レ申二御沙汰一候哉、恐々謹言

五月八日　　左中將花押(義貞)

進上四條中納言殿(隆資)

トアリテ、新田義貞ガ此時ノ激戰ニ際シ法隆寺領ニシテ斑鳩寺ノ所在地タル鵤(イカルガ)村附近ガ、損害ヲ受ケシコトヲ承認シ、四條隆資ニ其由ヲ報ジタルナリ。斑鳩寺ノ名見エザルモ、損害ヲ訴ヘタル法隆寺雜掌トハ卽チ今ノ斑鳩寺ニ在職セシモノナルコトヲ知ルベシ。此時ノ戰況等ニ就イ

テハ稿ヲ更メテ報告スルコトヽセン。

今本寺ニ唯一ノ記錄〔應永記錄〕ト題スルモノ一冊所藏シ、ソノ載錄事項ニ本委員ノ注意ヲ喚起シタルモノ尠カラザリシモ、今ソノ一端ヲ記シ本寺ノ沿革ヲ知ル便宜トスベシ。卽チ應永二十五年頃ニハ寺領トシテ二百五十石ヲ有セシ如ク、足利義敎ノ永享五年ニハ兵庫港修築事業ノ行ハルヽコトアリテ鵤庄内ニテ人夫三百六十人餘ヲ徵收セラレシコトナド見ユ。又此頃此地方ニテハ博奕ノ流行愈々盛ンニテ屢々寺内ヨリコレガ禁止セシコトナドアリテ當時ノ地方傾向ノ一端ヲ窺知セシメ、足利時代ニハ本寺ニハ所謂寺兵士ナルモノ存シ、寺ニ宿直勤仕セシモノヽ如シ。（文安元年ノ條ニヨル）

後足利義稙ノ永正十三年六月ニハ本寺ノ修築ヲ行ヒ、大和法隆寺ヨリモ人々ヲ派遣セシコト見ユルモ天文十年四月ニ至リテ堂宇悉ク烏有ニ歸セシ如シ。天正年間豐臣秀吉ガ中國ノ毛利氏ヲ伐タンタメ西下セシトキ、秀吉ハ先ヅ播磨三木城ニ別所氏ト戰ヒシガ其軍士ノ本寺ニ陣スルニ當リテ勝軍會ヲ執行シテ祈禱ヲ行ハシメ、天正八年三月ニハ三百石ヲ寺領ト定メ、更ラニ翌天正九年三月ニハ寺領ヲ減ジテ揖東郡寺内村ニテ百五十石ヲ寄進シ、文祿ノ檢地ニ當リテモサシタル異變ナカリキ。此頃大和法隆寺ハ稍衰運ニ傾キシカト思ハレ且ツ播磨鵤庄ノ運上ナキコト鵤庄ニ催促セリ。德川時代ニ入リ慶長十八年十二月ニハ姫路藩主池田照政ヨリ寺領トシテ百五十石ヲ寄セソノ後著シキ變遷ヲ見ズシテ明治ニ至レリ。

寺傳ニヨレバ往時山内三十六ノ塔頭子院アリシ如キモ、今ハ纔カニ寶勝、佛餉、雙樹ノ三院ヲ存スルノミト、今ヤ聖德皇太子殿ノ新タニ創建セラル、アリテ將ニ寺運ノ昌隆ヲ見ントスルハ喜ブベシ。本委員ハ飛鳥奈良朝以來沿革由緒ノ深キ本寺並ニ此地方ガ幾多ノ貴重ナル史蹟ニ富ムベキヲ思ヒ更ラニ詳細ナル調査ヲ行フベキヲ期スルモノナリ。（魚澄委員）

三原郡

第七千光寺

〔圖版第一五—第一八〕

一

三原郡加茂村先山ノ頂上ニアル眞言宗高野山派ノ末寺ニシテ中本寺格タリ。淡路西國三十三所靈場ノ第一番トシテ、白衣ノ賽者常ニ寺境ニ絶エザル所、淡路鐵道〔先山〕驛ヨリ山路二キロ有餘ニシテ達スベシ。

第一一圖　先山附近地圖

天地混渾トシテ未ダ開ケザル時、諸冊二尊天浮橋ニ立チ給ヒ天ノ瓊矛ヲ以テ青海原ヲ探リ、其鉾先ヨリ落チシ一滴先ヅ凝リ固リテ山トナリシヲ以テ先山ト號クトハ本寺緣起ノ說ク所ナレドモ、悠久幾萬年ノ神代ノ事、モトヨリ識ルベカラズ、辯ズベカラズ。

播磨國上野ノ人、俗姓忠太ナル獵師ソノ射タル猪ハ先山ニ出現シ給ヒシ千手觀音ノ化身ナル事ヲ知リテ菩提道ニ歸シ寂忍ト號シ、延喜年間醍醐天皇ノ勅許ヲ經テ伽藍ヲ造ルトスル本山開基ニ關スル奇瑞談ニ就テハ既ニ明治二十年三月卅一日ニ出版セル仲野安雄氏ノ〔重修淡路常磐草〕下卷ノ末尾ニモ論ゼル所ナレドモ、コレ亦强チニ理論的ニ考究スルノ必要ヲ認メズ、故ニ本委員ハ今回踏査セル所ニ基キ、ソノ現況ヲ記述シテ滿足セントスルモノナリ。

二

當山ハ中世ニ於テ頗ル頽破シタルモノ、如ク、海拔五百メートルノ絶巔ニ嚴然トシテ建立セラレタル現在ノ本堂護摩堂三重塔鐘樓仁王門以下多ク近世ノ建立ナリ。寺家ノ記錄ニヨレバ本堂ハ元和八年十月蜂須賀蓬菴公ノ改築スル所、三重塔ハ第二十八代法印證覺上人寛政六年發願二十一年ヲ經テ文化十年ニ到テ漸ク竣工セリト云フ、事實ナルガ如ク、ソノ後義性性海ノ前現兩山主ノ熱誠人ヲ動カス勸募ニヨリテ淡路一國中稀ニ見ル七堂完備シ、全ク輪奐ヲ極ム。

三

從テ文書記錄棟札等ノ寺誌ヲ傳フルニ足ルベキモノナク、僅カニ四點ノ金石文ニヨリテ中世期ニ於ケル當山ノ盛大ヲ推知シ得ルニ過ギザルハ、本委員ノ最モ遺憾トスル所ナルヲ告白ス。

一　梵鐘　高約一・五〇メートル　口徑約〇・七六メートル　口邊厚サ七・五センチ　陰刻銘　三區十四行百二十八字　內一區四行四十字追刻　〔圖版第一六〕

〔淡路國
日本寂初　先山鐘也
願以此功德　平等施一切

第一二圖　千光寺鐘樓

現世無比樂　後生生極樂
弘安六年歲次癸未二月十八日奉鑄之」。以上一區
「大工平貞弘
本願主佛子忍阿彌陀佛
助成沙彌妙德
當願主別當忍聖
比丘尼西阿彌陀佛」。以上一區

（以下追刻）
「當國一亂時此鐘既可下賣定畢
爰安宅秀興成本願買留奉寄進
所也
永正十六年己卯六月十五日」。以上一區

二　鐵製如法經塔套　高約〇・七六メートル　徑約〇・六〇メートル
陽刻銘　十二行六十四字
敬白　淡路國千光寺
爲奉納如法經寶
爲且那繁昌法界同
利益故勸進如右
文保二年戊午二月　日
大工　平弘氏
藤原弘貞
勸進金剛佛子
圓如上座
敬白

〔圖版第一七〕

三　鰐口　徑約〇・三九メートル
陰刻銘　外區及第二區四行六十一字
（外區右）
「大日本國最初淡劦先山千光寺鰐口」「天文十五年丙午六月晦日」
（外區左）
「住持權大僧都隆旭本願淡劦住快順大工炬口鑄師藤原吉家並源三郎」

〔圖版第一八〕

（第二區上部）
「十方檀那」

（第二區下部）
「市（？）福」

四　庚申塚

花崗岩

陰刻銘　三區五行二十九字

一石ヲ上下ノ二部分ニ分ケテ加工シソノ上部ハ六角ニシテ各面ニ庚申像（？）ト思ハルヽモノヲ刻シ、下部ハ四角ニシテソノ三面ニ陰刻アリ、更ニ四角形蓮瓣ノ飾リアル臺石ニ載ス。

（第一面）
「奉供養庚申」

（第二面）
「鮎原堂下村
藤原□之
□期市大夫」

（第四面）
「寛永十三年九月十九日」

〔圖版第一八〕

第一ノ梵鐘ガ既ニ一山ノ荒廢ニ際會シテ買却サレントセシ時ニ安宅秀興ノ助勢ニヨリテ永ク本山ニ止リシハ眞ニ欣ブベキ事ナラズヤ。第二ノ如法經塔ハ、本堂右傍ノ小高キ石垣ノ上ニアリテ既ニ早ク淡路名所圖繪ニモ說明セル如ク、現今モ「地獄釜」ト俗稱スルモノナリ。然レドモ、ソノ性質ノ本來如何ナルモノナルヤニ就テハ未ダ定說ヲキカズ、木崎好尙氏ノ大日本金石史ニハ之ヲ納經ノ用ニ供セシモノト言ヒ「經塚鐵筒」ト命名シアレドモ、恐ラク非ナルベシ。何トナレハ既ニソノ銘文ニモ「奉納如法經寶篋塔一基」トアルニヨリテ明カナルガ如ク、如法經ヲ納メシ寶篋院塔ヲ外部ヨリ更ニ被ヒシ鐵套ナルベシ。參考ノタメニ挿入セシハ大正十二年十月比叡山横川ニテ發掘セラレシ平安朝末期ノ如法經塔銅套ナリ。併セ見ルベシ。次ニ第三ノ鰐口ハ本堂前ニ釣懸リヲルモノニシテ外區左右ニ分レタル二行ハ縱書ニ第二區上下ノ二行ハ横書ニ陰刻サル。最後ノ第四庚申塚ハ俗ニ六地藏ト呼バレ、里人ハソノ家族知友ノ死ニ會スルヤ、ソノ死後五七日ニ至リテ、コレヲ本尊トシテ影向スルモ

第一三圖　比叡山横川發掘如法經塔銅套

ノナリト言フ、コレマタ鐵鉢ト同ジク本堂右傍ノ小高キ石垣ノ中ニ挿マレツヽアリ。

四

本山頂ヲ以テ諸冊二尊最初影向ノ地トセシハ既ニ弘安在銘ノ梵鐘ニモ見ユル思想ニシテ、本堂左側ノ地域(挿入ノ第一四圖ニ於テ、人物ノ立テル地點)ニモト二尊ヲ奉祀セシ神社存セシモ維新廢佛毀釋ニ際シテ住職某ハソノ木像ヲ洲本町縣社八幡神社ノ一隅ニ移棄シタリ、然ルニ近時懇信者等相肖リテ八幡神社祠官ヨリ尊像ヲ得テ、先山中腹ニ小祠ヲ營ミテ奉齋シツヽアリ、御神嶽神社ト云フ。

第一四圖　御神嶽神社舊社地

第一五圖　淡路國文庫藏書

(千光寺所藏)

五

先山千光寺ニ就テナホ記スベキ事多キガ、就中、本寺近時ノ建立ニカヽル文庫ニハ淡路國文庫ナル藏書印ヲ押捺セル舊洲本藩侯舊藏本ト思ハルヽ寫本大日本史以下多數ノ和漢書ヲ保管シツヽアル事ハ、特記ニ價スベシ。本委員ハ不日該文庫ノ調査ノタメニ出向スル機アルベキヲ信ズルモノナレバ、精査ヲ遂ゲシ上ニテ報告スル所アルベシ。(中村委員)

名

勝

調査委員　松本從之

加東郡

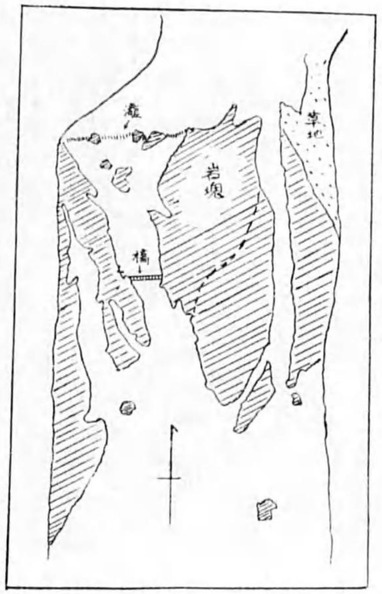
鬪龍瀧

〔圖版第一九〕

位置　鬪龍灘ハ加東郡瀧野町上瀧野ノ東部ヲ流ル、加古川中ニアル名勝地區ニシテ、山陽線加古川驛ニテ播丹鐵道ニ乘リ換ヘ、加古川ノ河條ニ沿ヒテ北行スルコト二十七キロメートル餘、約一時間十分餘ニシテ、播鐵瀧野驛ニ着スベシ。同驛ヨリ更ニ東北行約一キロニシテ同所ニ達シ得ベシ。

第一六圖　瀧野町附近地圖

現狀　鬪龍灘ハ加古川ノ中流ニ當リ、該川ハ此地附近ニ至リテ其河幅約百三十餘メートルニ及ベリ。鬪龍灘ハ實ニ此河中ニ硬キ石英粗面岩ノ大岩塊ガ南北約百メートルニ亘リテ河岸並ニ河中ニ露出シ、河水面上約三メートル乃至五・五メートルノ高サヲ有セリ。岩塊上ハ概ネ殆ボ同一ノ高度ヲナシテ一廣面ヲナシ、此等ノ岩面ニハ水蝕ニ依



第一七圖　鬪龍灘附近見取圖

ル幾多ノ裂罅ト小甌穴ヲ存セリ。該岩塊ノ北端ト西河岸トノ間ニハ高サ一メートル餘、幅四十メートル餘ノ急湍ヲ懸ケ、此急湍ニハ「檜下シ」「蹴鞠」等ノ名稱ヲ附セリ、湍下附近ノ最深所ニテ六・一〇メートルノ水深ヲ有ス。

成因　加古川ノ上流並ニ下流ニハ此ノ如キ大岩塊ノ河中ニ露出セル處ヲ見ズ。然ルニ鬪龍灘附近ニ於テ此ノ如キ大岩塊ノ殘存露出セルハ、元來、加古川流域一帶ニハ石英粗面岩ノ地帶多キモ、就レモ該川ノ爲ニ侵蝕セラレ終リテ、此ノ如キ大岩塊ヲ存セザルモ此地域ノ石英粗面岩ハ硬度特ニ大ニシテ、ヨク水蝕ニ抵抗シ以テ今日ニ殘留セルモノヽ如シ。

思フニ該岩塊ハ一ノ奇勝タルト共ニ香魚ノ產地トシテ永ク名勝地區トシテ保存ノ要アリト信ズ。

備考

鬪龍灘ノ名稱ハ梁川星巖ノ詩ニヨリテ普ク其名ヲ知ラレ文人墨客ノ來遊セルモノ少カラズ。

河中ノ孤岩・深淵等ニハ地人疊岩・三ッ岩・地藏岩・不動岩・屏風岩・待岩・クラカケ岩・ヲク釜・大メウカ淵・高田淵・イザリ松等ノ名ヲ附セリ。又口碑ニヨレバ往昔鬪龍灘岩上ハ一面ノ芝生ニシテ所々ニ巖頭ヲ現スノミナリシト、河條モ亦町ノ西部ヲ流レタリト傳フ。

梁川星巖

一道飛瀧劈地開　怒聲豪勢鬪風雷　秋入千巖霜葉麗　玉龍躍出錦雲堆

岡田半江

雨餘新漲勢洪々　塘沒巖消萬象空　河神恐落丹青手　深匿全形奔雪中

瀧野偶作

不是回風生紫瀾　巨巖激水水成灘　浪花翻起雪三尺　也作香魚飛躍看

瀧灘　次夫子瑤韻

藤澤南岳

宿雨無端翻雪瀾　梯橋斜處是危灘　香魚不飛亦堪賞　新樹怪岩憑欄看

陪遊夫子于瀧灘乃步瑤韻賦呈

平野松雨

誰將斯道救狂瀾　人海風饕險似灘　驚浪來探堪洗耳　師門乃作大平看

瀧　主水

瀧浪のみなきる時はさもなくてしつかなる日そ面しろき哉

當所ハ又鮎ノ名產地トシテ夙ニ其名著ル。毎年三月廿三日頃「小屋入リ」ト稱シ、河岸ニ小屋ヲ建テ、漁獲ノ準備ヲナス。カクテ漁獲ハ四月一日ニ始リ五六月ノ候ヲ最盛期トス。而シテ漁獲

ハ鮎ノ外、蟹・蝦等ノ産モアリ。蟹ハ終年漁獲アリテ殊ニ冬季ノモノハ最美味ナリト稱セラル。

該河ノ灘ハ昔時阿江與助ナル人之ヲ改修シ、其効ニヨリテ船座税ナルモノヲ通行ノ船舶ニ課スルヲ許サレタリキト傳フ。

第一八圖　闘龍灘ニ於ケル鮎漁獲ノ圖景

鮎人工孵化ノ方法及成績

上瀧野漁業組合專用漁場ハ兵庫縣加東郡瀧野町ニ屬スル加古川ノ流域南北水流千八百間ニシテ其中、定置漁場タル上瀧野闘龍灘ハ往昔文祿年間阿江與助源正友ガ巖石ヲ開鑿シタル

目下、灘下ニ於テ長良川ヨリ鮎卵ヲ取リ寄セ人工孵化ヲナシツヽアリ。其結果、在來該河ノ鮎ノ最大ナルモノハ百八十グラム内外ニ過ギザリシガ、近時二百四十乃至二百六十グラムノ大鮎ヲ産スルニ至リシトイフ。

人工孵化ハ十月中旬ノ氣候ニアリテハ十日乃至十四日、十月下旬ノ氣候ニアリテハ十四日乃至二十日ノ日數ヲ要ストイフ。

今左ニ上瀧野漁業組合ガ大正十五年四月姫路ニテ開催セラレシ全國産業博覽會ニ提出セシ成績報告書ヲ載セテ參考ニ資セントス。

ニ始マリ、次テ元和年間ヨリ汲鮎漁場トシテ納税、無年季拜借シ來リタル由緒アルモノニシテ明治三十六年五月兵庫縣ヨリ鮎筌ノ定置漁業ヲ免許セラレ明治四十二年三月當漁業組合設立後之ガ漁業權ヲ繼承シ次テ明治四十二年十一月古來ノ慣行ニ依リ農商務大臣ヨリ專用漁業ノ免許ヲ受ケ爾來筌ヲ以テ鮎ヲ捕獲シ、闘龍灘ノ奇勝ト相待テ其名聲著シク播州鐵道開通以來歳ト共ニ遊覽客ノ増加ヲ來タセリ。

而シテ當組合ハ加古川流域ニ於ケル鮎ノ増殖ヲ圖ラムガ爲、大正五年以降、岐阜縣長良川ニ於テ種鮎ヲ捕獲シ其鮎卵ヲ購入、闘龍灘ニ於テ人工ヲ以テ孵化セシメ之ヲ當加古川流域ニ放流シタル結果、累年形狀ノ大ナル良種ヲ漁獲スルニ至リ成績佳良ナルヲ以テ尚引續キ此ノ事業ヲ行ヒ初期ノ目的ヲ達成セントス。

大正五年以降鮎人工孵化事業ノ方法及其成績左ノ如シ。

一、鮎人工孵化ノ方法

毎年十月中下旬ニ於テ投網又ハ卷網ニテ捕獲セル種鮎ヨリ卵ヲ採集シ孵化枠ニ附着セシメ夫レヲ孵化槽ニ入レ流水ニ浸スコト二週間乃至三週日ニシテ全ク孵化ヲ了ス。

二、成績

年次	孵化放流尾數
大正五年	一五〇萬尾
六年	二五〇

天然紀念物

名	勝
七年	三五〇
八年	四〇〇
九年	五〇〇
十年	六〇〇
十一年	七〇〇
十二年	八〇〇
十三年	七〇〇
十四年	七〇九
十五年	九六三

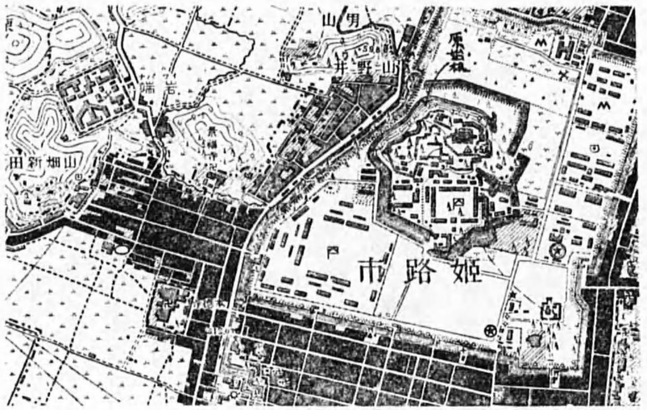
（松本委員）

天然紀念物調査委員　西尾貞治
同　松本從之
同　山鳥吉五郎

姫路市

第一　姫山公園ノ原始林

〔圖版第二〇及第二一〕



第一九圖　姫山公園附近地圖

第一　姫山公園ノ原始林

所在　姫路市姫山公園内

姫山公園内白鷺城ノ北方ニ當リ堀ニ沿ヒテ鬱蒼タル森林アリ。古來未ダ斧鉞ノ加ハラザル原始林ニシテ大都市ノ中央ニ於テカヽル原始林ノ存スルコトハ蓋シ珍ラシキ事ナルベシ。林中ニ生ズル木本ハ約數十種ヲ數フベシ、就中最モ目立ツモノハ「あらがし」(樫)、及ビ「たらゐふ」ニシテ其古木多シ。堀ニ面シテ二本ノ「たらゐふ」ノ大木アリ、其一ハ莖ノ周圍一・八五メートル、高カラズシテ枝ヲ廣ク張レリ、他ノ一ハ莖ノ根本ノ周圍二・六メートルニシテ忽チ目通ノ周圍一・三メートルノ二大幹ニ分カレ樹勢頗ル宜シク眞直ニ伸ビテ碧空ニ摩スルノ狀實ニ壯觀ヲ極ム。林中ニ入リテ見レバ目通一・四メートル内外ノモノ少カラズ。「あらがし」ニハ目通一・五メート

ル、「くろがねもち」ニハ一・五六メートル、「ねのき」ニハ一・四メートル内外ノモノアリ。林中ニ生ズルモノハ我國中南部以南ノモノ多ク、其暖地性ノ主タルモノニハ、

かくれみの、　もくこく(厚皮香)、　たらねふ、　なゝめのき、
くろがねもち、　はせのき(櫨)、　せんだん(楝)、　びは(枇杷)、
かめもち、　どべら(海桐花)、　かごのき(六駁)、　やぶにつけい、
やまかうばし(山胡椒)、　なんてん(南天竹)、　いぬびは(仙天果)、　いたびかづら、
あらがし(樫)、　あべまき、　むくのき(樸樹)

等アリ。ソノ他「けやき(欅)」「ねのき」(朴樹)、「やまがき」ノ大木ナド加ハリテ密林ヲ形成シ、「ていかかづら」(絡石)、「ふゆづた」(常春藤)、「あけび」(通草)、「いたびかづら」ノ繁茂ノ著シキモノアリ、最珍ラシキモノハ葛ノ大木アリシコトナリ。

其周圍三五センチニ達シ未ダ嘗テ文献ニ見ザルモノニシテ其横斷面ヲ見ルニ木質部ト靱皮部トノ互層ヲナシテ異常發育ノ例トシテモ價値アルモノナリ(圖版第二一參照)。此大木ハ姫路師團長ノ官舍内ニ移植シテ枯死セシコトハ實ニ惜ミテモ餘アリトイフベシ。陰樹ニハ「あをき」(桃葉珊瑚)最モ多ク「まんりやう」(硃砂根)ノ如キ暖地性ノ小灌木ヲモ交フ、下草ニハ「やぶらん」(麥門冬)、「じやのひげ」(沿階草)、「やぶめうが」(杜若)、「べにしだ」、「やぶそてつ」、「おにやぶそてつ」、「ねのもとさう」(井口邊草)ナドノ羊齒植物多シ。(山鳥委員)

印南郡

第二　菊ノ原種ノ野生北限地

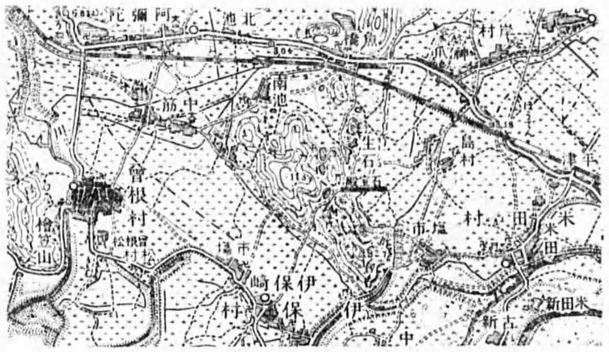
〔圖版第二二〕

所在　印南郡阿彌陀村

山陽線寶殿驛ヨリ約一キロメートルニシテ播磨名所トシテ有名ナル石ノ寶殿アリ、其山麓ニ菊ノ原種タル「のぢぎく」ノ群落アリ。「のぢぎく」ハ支那朝鮮ヨリ我國ハ本土ノ南部四國九州琉球地方ニ分布セリ。而シテ兵庫縣ハ恐ラク我國ニ於ケル「のぢぎく」ノ最東北端ナルベク明石郡内ニモ散在シ六甲山麓ニモ野生シ六甲山麓ガ最北限タルベシト雖モ縣下ニ於テ石寶殿ノ如ク多數ヲ産スル處ヲ見ズ。

石寶殿ニ至ル山徑ヲ登ルマデニ小溝ヲ渡リ直ニ左シテ石切場ニ至ル小徑ヲ辿レバ徑ノ右側ナル丘ノ麓ヨリ右側ノ溝ノ堤ニ多數ヲ生ジ南方ノ山麓ニ更ニ多クヲ生ズ、生石神社ノ石垣ノ麓マデモ分布スレドモ山麓向陽ノ地ニ最モ多シ。

支那ニ於テハ早ク此種ヲ淘汰シテ菊ヲ作リシガ我國ニ



第二〇圖　石ノ寶殿附近地圖

ハ仁德帝ノ頃百濟ヨリ之ヲ傳ヘタリト云フ。我國ニ入リテ更ニ著シク人爲淘汰ヲ加ヘテ今日ノ如ク多クノ品種ヲ生ゼリ。其原種ニハ二種アリ、小菊ノ一部ハ「しまかんぎく」ヨリ來レルモノナレドモ小菊ノ大部分中菊及大菊ノ殆ンド全部ハ「のぢぎく」ヨリ降レリ。我國ニ於テ「のぢぎく」ノ野生ヲ初メテ發見セシハ去明治二十年十一月ニシテ植物學者牧野富太郎氏ガ其鄉里ナル高知縣吾川郡川口村ノ仁淀川岸ニ於テ初メテ採集シ「のぢぎく」ト命名シ同二十四年五月同氏著日本植物志圖篇第一卷第九集ニテ公ニセラル。「のぢぎく」ハ野路菊ノ意ニシテ學名ヲ Chrysanthemum morifolium Ram. var. genuinum Hemsl. f. Japonense Makino. ト稱ス。

莖ノ高サ一・二メートルニ達シ葉ハ卵形心脚ニシテ缺刻及粗キ鋸齒ヲ有スルコト菊ト同ジク裏面ニ白毛ヲ密布ス。頭狀花ハ直徑二・〇—三・八センチニシテ中心ノ筒狀花ハ黃色、周圍ノ舌狀花ハ白色ニシテ十六乃至二十三個ヲ有ス。總苞ハ長楕圓形ニシテ圓頭、緣邊ハ乾皮質ナリ。

石寶殿ハ凝灰質石英粗面岩タル龍山石ノ產地ニシテ「のぢぎく」ノ群落地方ハ漸次採掘セラルヽ傾アリ、溝邊ノ如キモ石ヲ運ブ「レール」ヲ設ケラレ爲メニ其繁殖ヲ害セラレツヽアリ、今ニシテ保護ヲ加ヘズンバ近キ將來ニハ石材採掘ノ爲メニ湮滅セラルヽノ患アリ。（山鳥委員）

加東郡

第三　光明寺ノ三本杉

〔圖版第二三・挿圖第一六〕

所在　加東郡瀧野町光明寺境內

播丹線瀧野驛ノ西北ニ當リ五峰山アリ、山頂マデ阪路約二キロメートルト稱ス。頂上ニ多聞院大慈院・遍照院・龍藏院ノ四ケ寺アリ、灌佛會ニハ參拜者山道ヲ塡メテ歩ム可ラズト云フ。大慈院・遍照院・龍藏院ニ各一本ヅヽノ略同大ノ大杉アリ、里人之ヲ三本杉トイフ。

一、大慈院ノ大杉

大慈院ノ本堂ノ北ニ位置シ樹勢頗ル宜シ。

高サ	三一・三メートル
一ノ枝マデノ高サ	七・五メートル
根本周圍	六・九メートル
目通周圍	四・五メートル

二、遍照院ノ大杉

遍照院ノ淡竹ノ籔內ニアリ、眞直ニ伸ビテ樹勢頗ル宜シ、蓋シ籔內ニアリテ地味豐饒ノ爲メナラン。

高サ　二七・〇メートル
一ノ枝マデノ高サ　九・〇メートル
根本周圍　五・五メートル
目通周圍　四・四五メートル

三、龍藏院ノ大杉

龍藏院ノ淡竹ノ籔内ニ塀ノ際ニアリ、故ニ塀ノ側ハ土ニ埋レテ根本ノ周圍ヲ測ル可ラズ、此レモ樹勢甚宜シ。

高サ　三一・五メートル
一ノ枝マデノ高サ　一二・〇メートル
目通周圍　四・九メートル

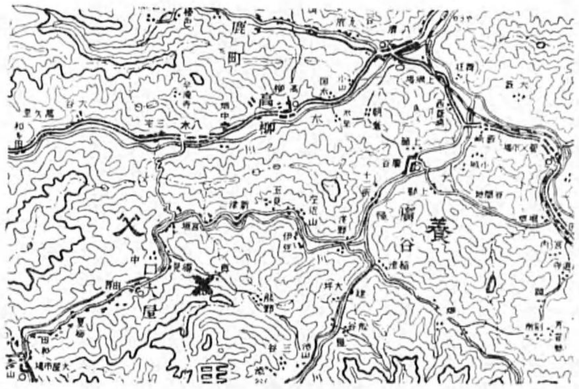
傳說　光明寺ノ三本杉トテ地方ニ於テ人口ニ膾炙スト雖モ傳說詳ナラズ。（山鳥委員）

養父郡

第四　樽見ノ仙櫻

〔圖版第二四〕

第二一圖　樽見附近地圖



× 仙櫻所在地

所在　養父郡口大屋村樽見字ケシメ八五番

山陰線養父驛ニ下車シ縣道八鹿若櫻線ヲ行クコト約二十キロニシテ養父郡口大屋村役場ニ達ス。其ノ間自動車ノ便アリ、約一時間ニシテ達スルコトヲ得ベシ。仙櫻ハ同地道路元標ヨリ東南約一キロ山腹桑園中ニ聳立ス。樹種ハ白彼岸ニ屬シ、縣下最大ノ櫻樹タリ。地上約二メートルニシテ數幹ニ分レ、樹冠ノ擴リ三・八〔アール〕ニ達ス、枝ニ枯死セル部分多ク樹勢稍衰フ。

地上一・五メートルノ幹圍　五・一五メートル
樹高　二〇・〇メートル

來歷

櫻井勉著校補但馬考ニ曰ク、

樽見仙櫻ハ樽見村蹴占山ニアリ。土人云フ、此樹

第四　樽見ノ仙櫻

ノ最モ盛ナリシハ元祿前後ニシテ、當時ハ高サ五丈ニ過ギ、枝柯東西南北二十間ニ亘リ、花時ニ至ルゴトニ皎々トシテ白雪ノ如クナリシカバ、出石城主小出英安公特ニ來テ之ヲ觀給ヒシコトアリト。余ガ先人モ文政六年三月ヲ以テ之ヲ賞シ、呼デ仙櫻トナシ、爲メニ古風ノ詩ヲ賦ス。詩中ニ

星霜不知數　名樹國無兩　周匝過三圍　蟠蜿殆十丈
花若鮮妍兮積雪　枝若天矯兮修蟒　東風吹起雪翻空　白日失火忽曈曚

ノ句アリ。文政六年ハ今茲大正七年ヲ距ルコト殆ド百年ナリ。恨クハ土人利ヲ重ンジテ名樹ヲ輕ンジ、四面ニ植ルニ杉檜ヲ以テス。然レドモ、余ガ明治三年ニ出石藩知事仙石政固君ニ從ヒ其ノ麓ヲ通過セシトキハ、其ノ幹亭々トシテ猶杉檜ノ上ニ挺立セシガ、爾來又殆ド五十年其ノ周圍二丈餘ト其ノ高サ五丈餘ト依然往年ニ異ナラズトイヘドモ、枝柯ニ至リテハ漸次杉檜ノ爲ニ逼迫セラレ、今ヤ東西十間南北十二間ニ過ギズ、人ヲシテ長大息ニ堪ヘザラシム。因ニ錄ス、東京市淀橋々畔ニ淺田澱橋ナル人アリ、日本朝鮮ノ老大櫻樹一百本ヲ撰ビ、現存大樹作樂名鑑ナルモノヲ撰ス。其ノ第十九ニ、福島縣ノ大鹿櫻ナルモノヲノセ、幹圍二丈餘ト云ヒ、其ノ第二十ニ滋賀縣地藏ケ平大櫻ナルモノヲノセ、幹圍二丈ト云フ。此仙櫻ハ蓋右二櫻ト兎牛ヲ爭ヒ、日本朝鮮名櫻樹中ニ於テ第十九位若クハ廿位ヲ占ムベキ資格ヲ有スルモノナリ。記シテ土人ノ反省ヲ望ム。云々（西尾委員）

朝來郡

第五　玉林寺ノ垂櫻

〔圖版第二五〕

所在　朝來郡與布土村與布土字大谷玉林寺境內

第二二圖　與布土村附近地圖

×玉林寺ノ垂櫻所在地

山陰線梁瀨驛ヨリ約四キロニシテ與布土村役場ノ所在地タル與布土部落ニ達ス。玉林寺ハ同部落ノ東南山麓ニアリ。境內東北隅ニ當リ一大垂櫻アリ、繞ラスニ木柵ヲ以テス。垂櫻トシテ縣下屈指ノモノナリ。樹頭其ノ他枝柯ニ枯死セル部分アリテ樹勢稍々衰フ。大正九年以來保存會ヲ設ケ保護ニ勉メツヽアルモ、大正十三年ニ於ケル大旱魃以來樹勢頓ニ衰ヘタリト云フ。

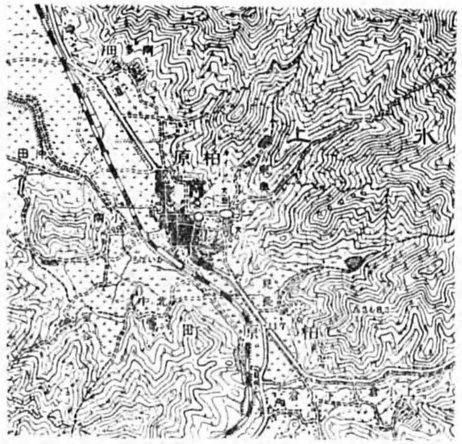
地上一・五メートルノ幹圍　三・五四メートル
樹高　一〇・五メートル
枝下　三・三メートル

（西尾委員）

氷上郡

第六　柏原八幡ノ木ノ根橋

〔圖版第二六〕



第二三圖　柏原町附近地圖

丙　柏原八幡

所在　氷上郡柏原町八幡神社境内

本樹ハ山陰線柏原驛ノ所在地タル柏原町縣社八幡神社鳥居前柏原川河畔ニアリ。一大樹根延ビテ川ニ架シ恰モ橋梁ノ如シ。思フニ傍ニ在ル木橋ハ元土橋タリシ當時根部次第ニ進出シ、遂ニ彼岸ニ達シ現今ノ狀態ヲ呈スルニ至リシモノナラン。樹種ハ櫟ニ屬ス。根部ニ徑二十センチノ空口ヲ存スルモ腐朽部廣カラズ樹勢旺盛ナリ。

地上一・五メートルノ幹圍　七・〇メートル
樹高　約一五・〇メートル
根橋ノ長サ　六・〇メートル
根中央部ノ圍リ　二・七メートル

（西尾委員）

第七　大名草ノ大公孫樹

〔圖版第二七〕

所在　氷上郡神樂村大名草

公孫樹ハ支那ノ原産ニシテ古來我國社寺城内等ニ植栽セルモノナレバ大木ノ存スルモノハ支那ト日本トノミ。公孫樹科ニ屬ス。モト松柏科ニ屬セシガ去明治二十八年故平瀨作五郎先生ハ東京小石川植物園内ノ公孫樹ニ於テ精虫ヲ發見シテ以來松柏科ト分離シテ公孫樹科ヲ獨立セシメ〔いてふ〕ノ只一種ヲ有スルノミ。學名ヲ Ginkgo biloba L. ト云フ。

第二四圖　大名草附近地圖

× 大公孫樹所在地

福知山線石生驛ニ汽車ヲ捨テ乘合自動車ニテ佐治ニ下リ之ヨリ約四キロノ間ヲ俥ヲ雇フカ又ハ自動車ヲ買ヒ切リテ神樂村字大名草ニ至ル。愛宕山ノ中腹ニ當リ公孫樹ノ大木アリ。山ヲ登ルコト約二百メートルニシテ常瀧寺アリ、寺ノ庭ヲ通リ更ニ登ルコト約六百メートルニシテ此レニ達ス。樹ハ甚ダ高カラズト雖モ太クシテ且枝ヲ廣ク繁茂セリ。

其高カラザルハ十年程前一樵夫此樹ノ下ヲ通リシニ黄鼬其洞窟ニ入レリ、依テ之ヲ燻ブサントト欲シ杉葉ヲ入レテ火ヲ點ゼシニ洞内乾燥セシヲ以テ忽チ燃エ上リテ火事トナリ村民大擧シテ

之ヲ消シ止ム、其後樹幹折レタルガ爲メナリ。

目通周圍　一〇メートル
高サ　一八メートル

枝ノ最高キ處二七メートルニシテ此枝ハ東ニ向ッテ一八メートル伸ブ。

乳ト稱スル瘤狀突起ノ下垂スルモノ頗ル多ク、大ナルモノハ一九メートルニ達ス。又乳ノ地ニ達シテ地中ニ入ルコト恰モ氣根ノ支柱根ノ如キ觀ヲ呈スルモノアルハ一奇觀タリ。

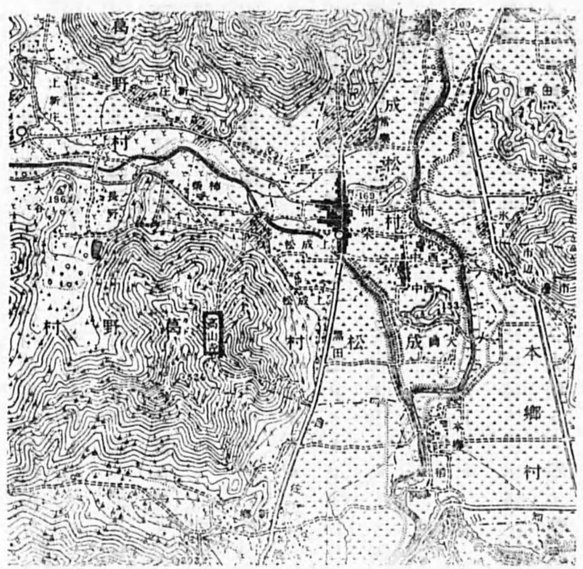
傳說　此地ハ嘗テ足利氏時代赤松圓心ノ祈願所タリシ常瀧寺ノアリシ處ニシテ公孫樹ハ其境內ニアリシモノナリ、而シテ當時ハ此木ノ附近ノ山ニ三十有院坊アリシト云フ外傳說ノ殘レルモノナシト雖モ其太サヨリ察スルニ餘程樹齡ヲ經タルモノナリ。火災ノ爲メ其上部ノ折レシハ甚ダ惜ムベシ。乳狀瘤多キ爲メ乳汁ノ出ヌ婦人ノ祈願ノ爲メ參拜スルモノ頗ル多シ。此木ノ基ニ大師像ヲ祭レリ、大正九年村ヨリ勸進セシモノナリ。(山鳥委員)

第八　高山寺ノ大公孫樹

所在　氷上郡葛野村弘浪山頂高山寺境內

成松町ヨリ約一キロ、葛野村入口ニ當リ弘浪山アリ、海拔約五百メートル、其頂上ニ高山寺ト云フ小寺アリ。寺ノ西方觀音堂ノ西北ニ當リ一大公孫樹アリ。主幹ハ三百年前傳ヘ曰フ(雷火ノ爲メ燒ケテ下部ヲ存スルノミニテ今猶燒ケタル炭痕ヲ存ス。此主幹ヨリ六本ノ分蘖枝主幹ニ

第二五圖　高山寺附近地圖



接シテ成長シ是等ヲ合シテ周圍ハ九五メートルアリト雖モ主幹ノ太サハ目通五八メートルナリ、最高ノ莖ハ二七五メートルニ達ス、枝ノ伸ブル範圍ハ幅約二十メートルニ達シ東方ニ最ヨク伸長繁茂セリ。

莖ニハ「をしやぐじでんだ」、「ひめのきしのぶ」等ノ小羊齒ヲ生ジ乳狀ノ瘤亦多シ、其長キモノハ一七メートルニ達ス。乳ヲ乞フ婦女ノ參拜スルモノ多ク祈願ノ豆袋ヲ多數之ニ吊セリ。

傳說　天平寶字五年兵火ニカヽリ寺ハ燒ケタリ、寺ノ開祖法道仙人曰ク、此處ニ觀音ヲ祭ル間ハ此公孫樹ヲ可嚀ニ育テヨ、其盛衰ハ寺ノ消長ニ關スト。一名之ヲ十一面觀世音回向銀杏樹ト稱ス、思フニ天平寶字五年ハ今ヨリ約一千百六十年前ナリ、此時既ニ此公孫樹ハ相當ノ大サニ達セシナルベシ。(山鳥委員)

第九　高山寺ノ二本杉

〔圖版第二八〕

所在　氷上郡葛野村弘浪山頂高山寺境内

寺ノ東北ニ當リ里人ノ呼ンデ二本杉ト稱スルモノアリ。二本ノ杉略同大ノ發育ヲトゲ根本ニ於テ接合セリ、幹ノ下部二本合シテ周圍一〇・八メートル、二本共南方ニ傾斜シ同方向ニ枝葉榮エ下方ニハ枯枝多シ。二本ハ東西ノ位置ニアリ、故ニ此處ニ東幹西幹ト名ヅケ其實測セルモノヲ記スベシ。

東幹	目通周圍	六・五メートル
	高サ	二七・〇メートル
	一ノ枝マデノ高サ	六・二メートル
西幹	目通周圍	五・六メートル
	高サ	二三・〇メートル
	一ノ枝マデノ高サ	五・〇メートル

傳說　高山寺ハ眞言宗ニシテ攝津ノ中山寺ト同ジ建方ナリ。今ヲ去ル三百年前此二本杉ト同山ノ三本杉(次ニ記ス)ト中山寺ノ大杉トノ梢ニ龍燈ガ輝ケリ、故ニ三本杉ト共ニ龍燈杉ト稱シ或ハ「天狗ノ宿リ木」トモ云フ。之ヨリ參詣人多ク爲メニ寺ハ大ニ繁昌セリトイフ。樹齡一千年以上ト稱セリ。(山鳥委員)

第一〇　高山寺ノ三本杉

所在　氷上郡葛野村弘浪山

弘浪山ハ山麓ヨリ頂上高山寺マデ山道十八丁ト稱ス。其十五丁目ノ處ニ道ノ左側ニ三本杉ト稱スル大杉アリ。栂ト杉トノ混淆林ニシテ扁柏(ヒノキ)樅(モミ)之ニ交リ「あをき」、「うらしろがし」、「かなめもち」、「やぶつばき」、「さかき」、「こんてりき」、「たかのつめ」、「はないかだ」等ノ小木本アリ。

三本杉ハ一本ノモノ二・四メートルノ處ヨリ三主幹ニ分岐シ略同大ノ發育ヲトゲル樣奇觀ヲ呈シ樹勢極メテ良ク石斛之ニ着生ス、其位置ニヨリ東幹西幹及北幹ト名ヅケ其實測セルモノヲ記スベシ。但シ各幹共周圍ハ三叉セル處ニ於テ之ヲ測リ一ノ枝マデノ高サハ地上ヨリ測レリ、道ニアラザル側ハ道ヨリモ二メートル位下方ヨリ生ゼリ。

東幹	周圍	三・五メートル
	一ノ枝マデノ高サ	一九・〇メートル
西幹	周圍	三・八メートル
	一ノ枝マデノ高サ	二一・〇メートル
北幹	周圍	三・一メートル

一ノ枝マデノ高サ　一八・五メートル

樹高ハ四十メートル以上モアルベシト雖モ林中ニアリテ測ルヲ得ズ。（山鳥委員）

第一一　大歳神社ノ巨杉

所在　氷上郡葛野村三方大歳神社境内

大歳神社ハ成松町ヨリ約六キロニアリ。神社ノ本殿ノ正裏ニ杉ト扁柏トノ混淆林アリ、其縁ニ本殿ニ接シテ生ズ、樹幹眞直ニシテ枝ハ皆細ク且短カシ。

根本周圍　八・八メートル

目通周圍　六・〇メートル

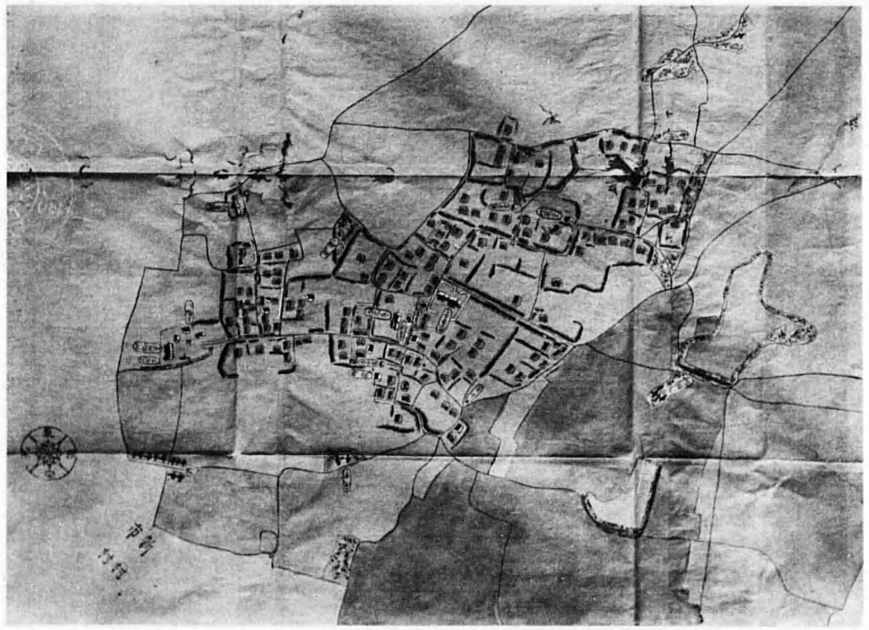
高サ　四六・〇メートル

一ノ枝マデノ高サ（正南ニ出ル小枝）　八・〇メートル

傳說　傳說ノ傳ハルモノナシト雖モ古來御神木ト稱シ樹齡約七百年ト稱セリ。（山鳥委員）

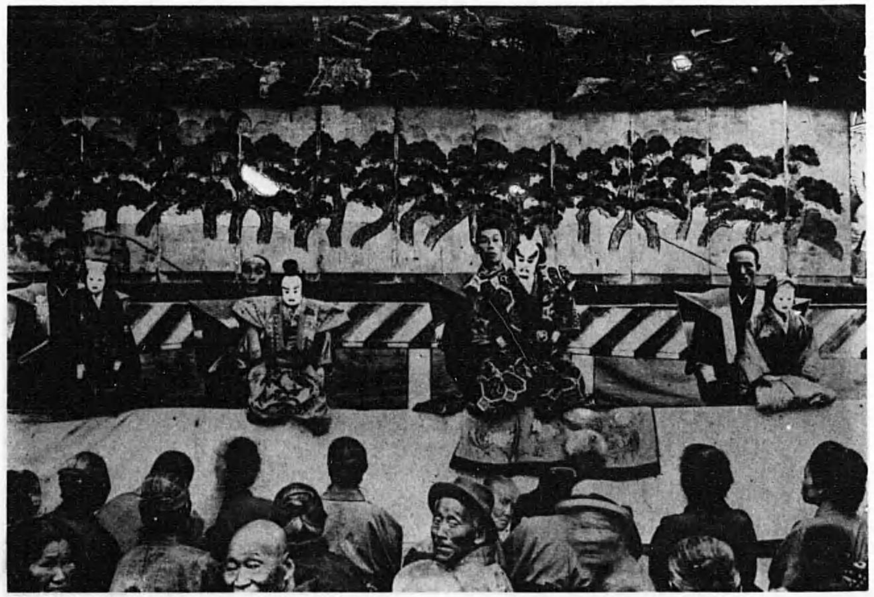
圖版

圖版第一

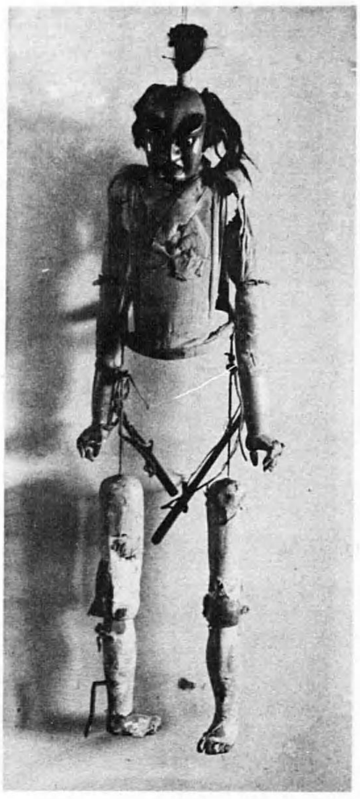


（市村役場所藏）

（一）三原郡市村三條古圖

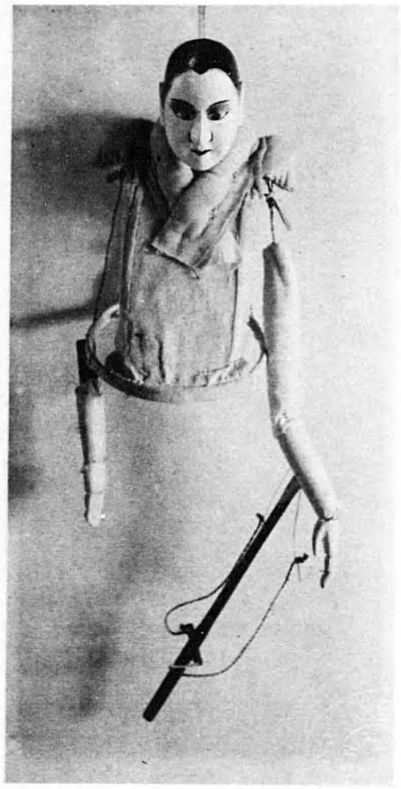


（二）人形操座演技ノ圖



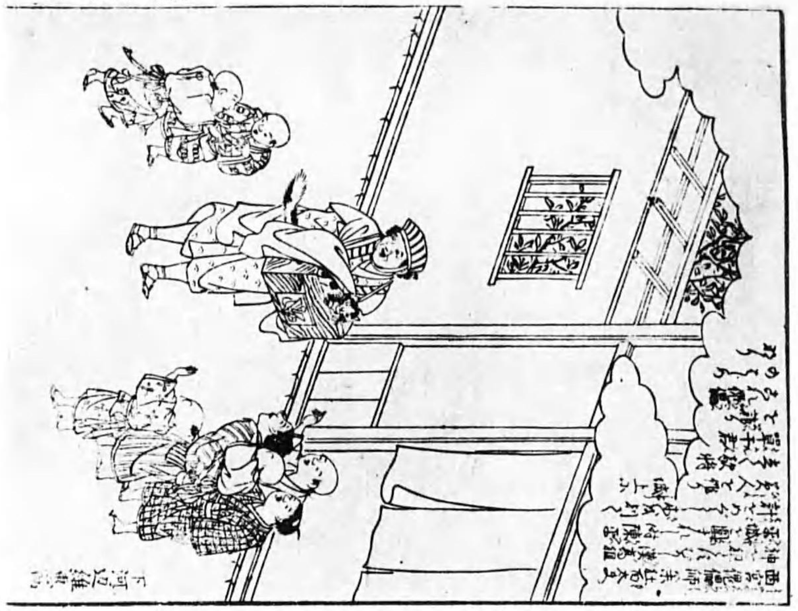
（一）角目頭ヲ用ヒタル立役ノ姿

（二）右ノ頭部



（三）娘頭

（三條吉田傳治郎氏所藏）

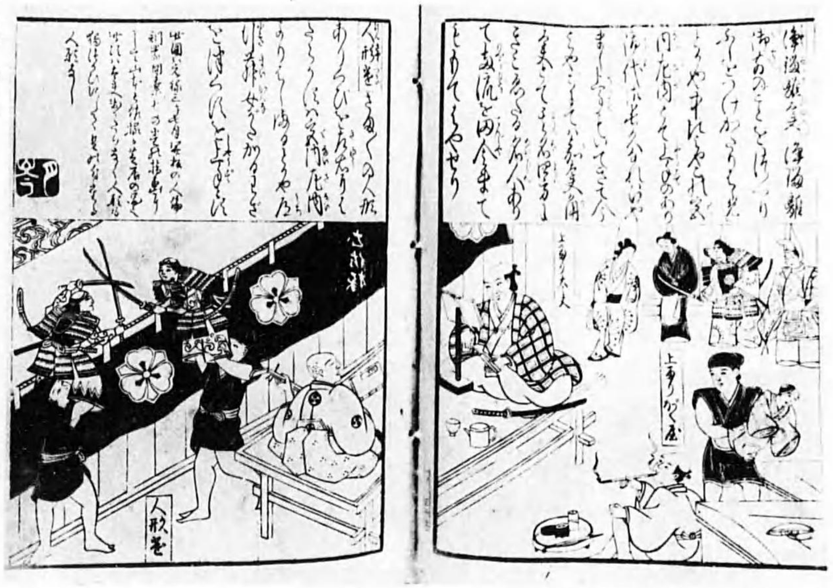


（二）操人形（後ニ山鉾トイフ）ノ圖

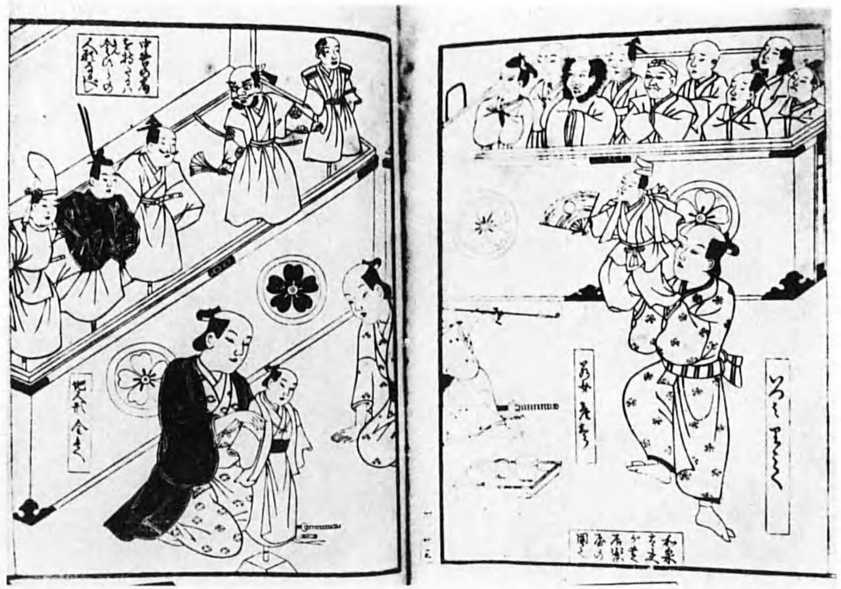
（淡路名所圖會所載）

（一）操人形ノ圖

（淡路名所圖會所載）



(一) 人形遣ヒノ圖



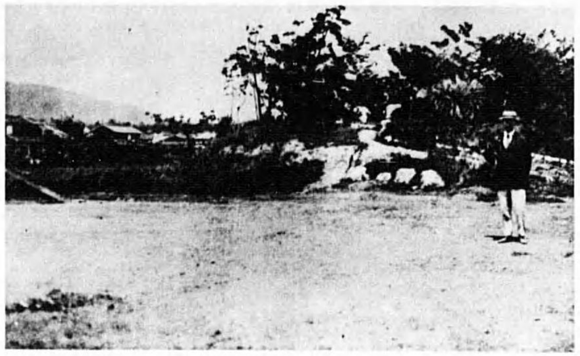
(二) 人形芝居樂屋ノ圖

(聲曲類纂所載)

圖版第五

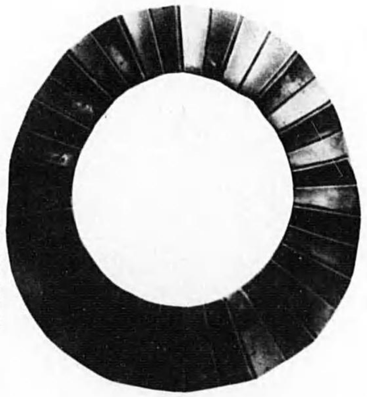
玉明ノ處女塚
（前方部一四二メートル後円部ヲ望ム）

圖版第六



(一) 吳田ノ求女塚

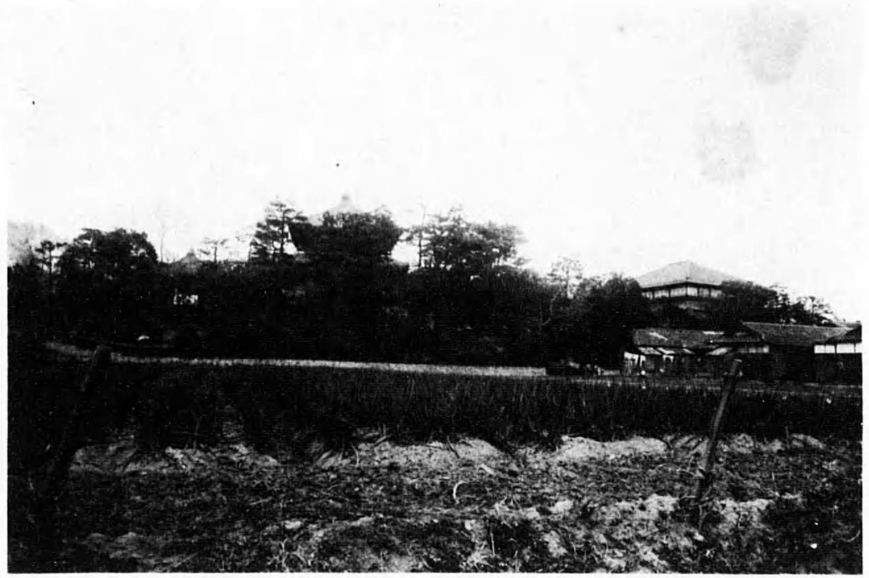
(二) 同上發見三角緣三神三獸鏡 (徑二一・七センチ)

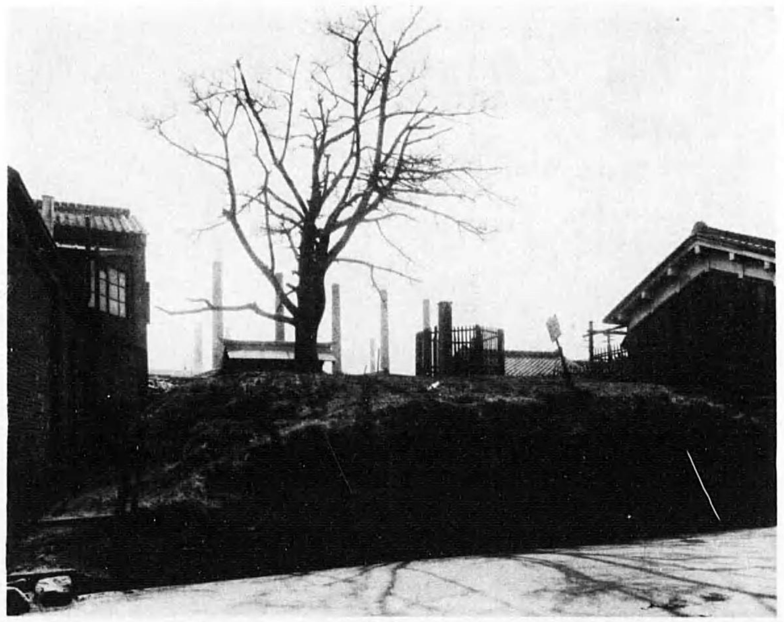


(三) 同上發見車輪石 (徑約九センチ)

東京帝室博物館藏

圖版第七





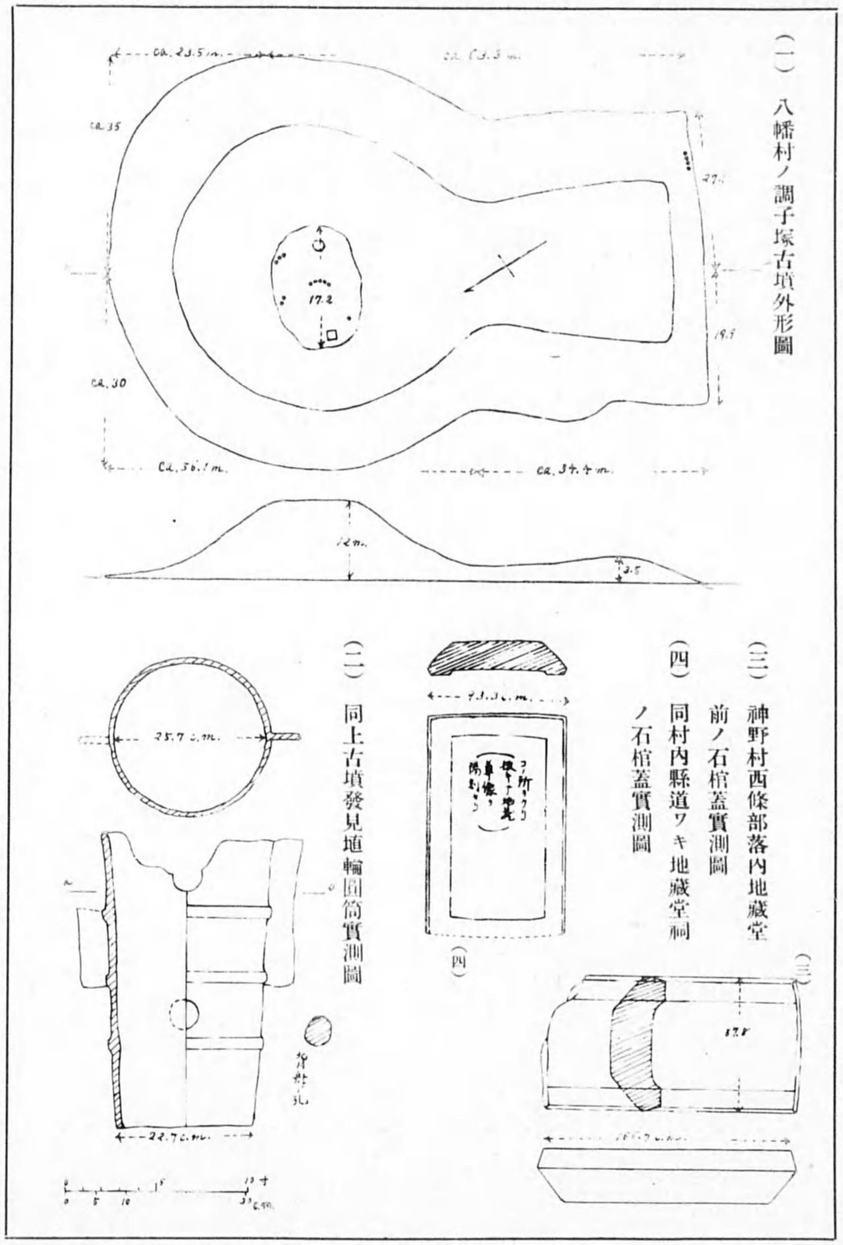
（上）味泥ノ大塚山
（下）脇ノ濱ノ乙女塚

如法經箱陰銘拓影

圖版第九

(一) 八幡村ノ調子塚古墳全景

(二) 同上古墳發見埴輪樹物片 (約五分ノ三大)



(一) 八幡村ノ調子塚古墳外形圖

(二) 同上古墳發見埴輪圓筒實測圖

(三) 神野村西條部落內地藏堂前ノ石棺蓋實測圖

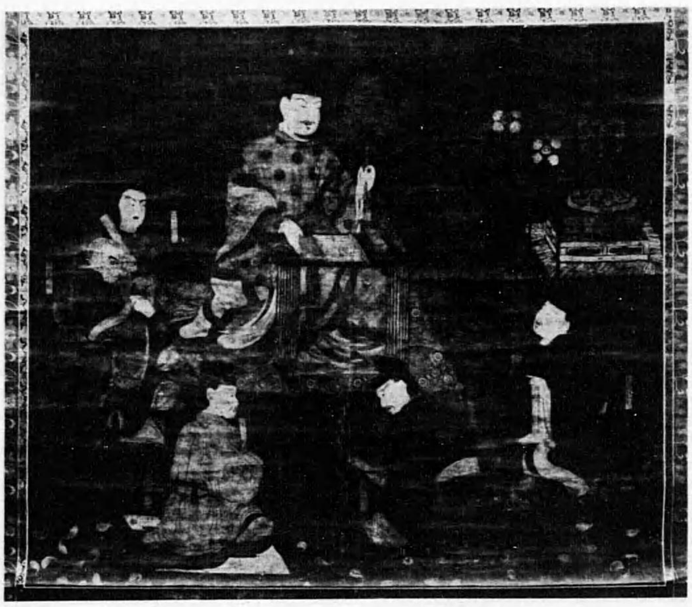
(四) 同村內縣道ワキ地藏堂祠ノ石棺蓋實測圖

圖版第一一

（一）調子塚古墳發見埴輪樹物片（約五分ノ四大）

（二）同上埴輪文樣拓影（五分ノ三大）

（加古川史談會所藏）



圖經鬘勝讃講子太德聖（左）

斑鳩寺所藏

像坐來如迦釋造木（右）

圖版第一三

木造十二神將立像

斑鳩寺所藏

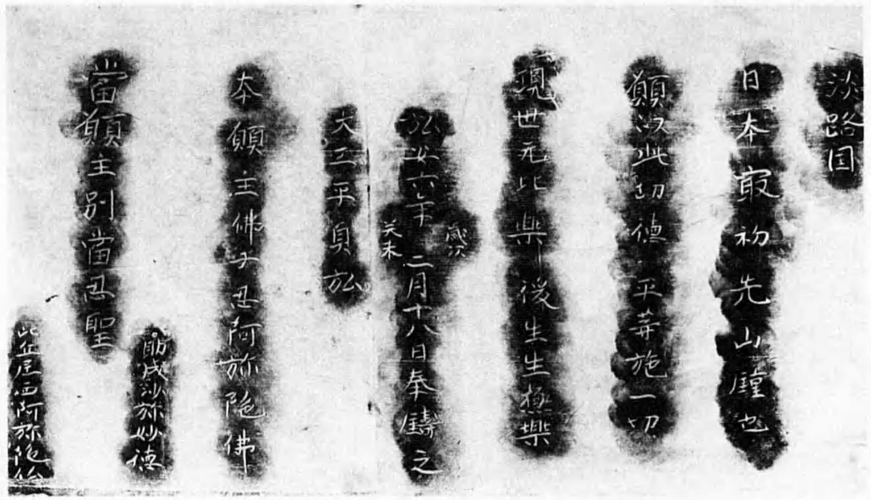
圖版第一四

木造日光及月光菩薩立像

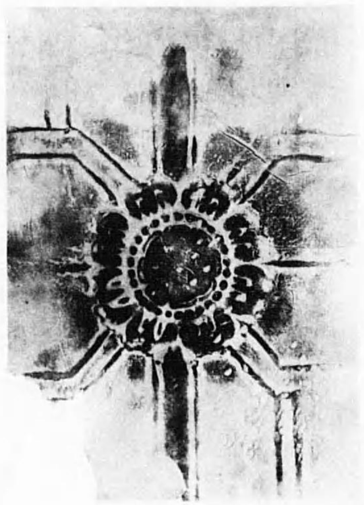
斑鳩寺所藏

圖版第一五

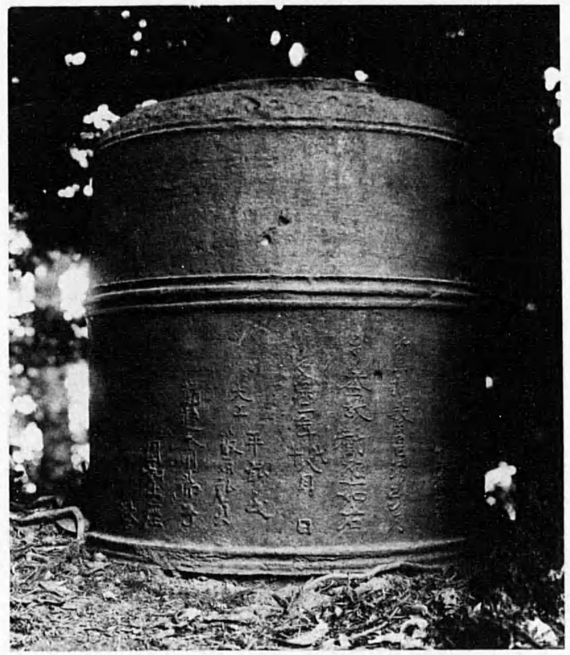
千光寺本堂及び二重塔



(一) 千光寺梵鐘刻銘拓影

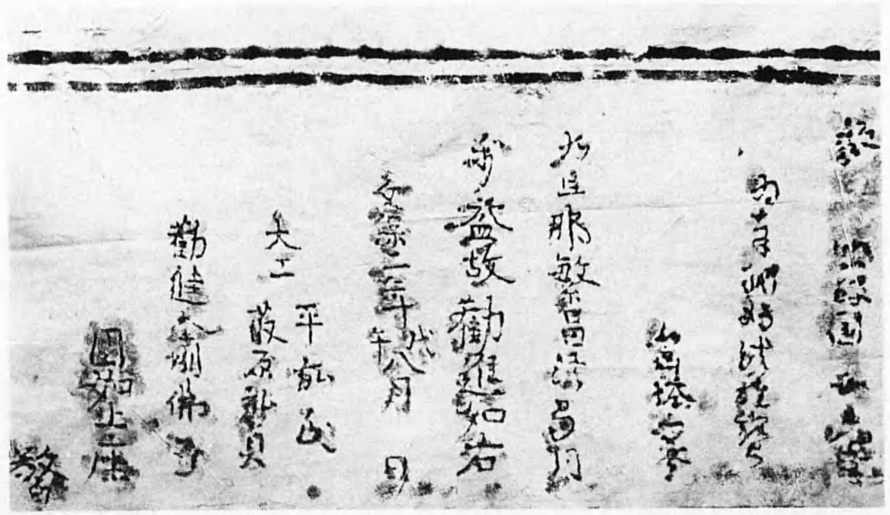


(二) 同上梵鐘追刻銘並ニ撞坐拓影

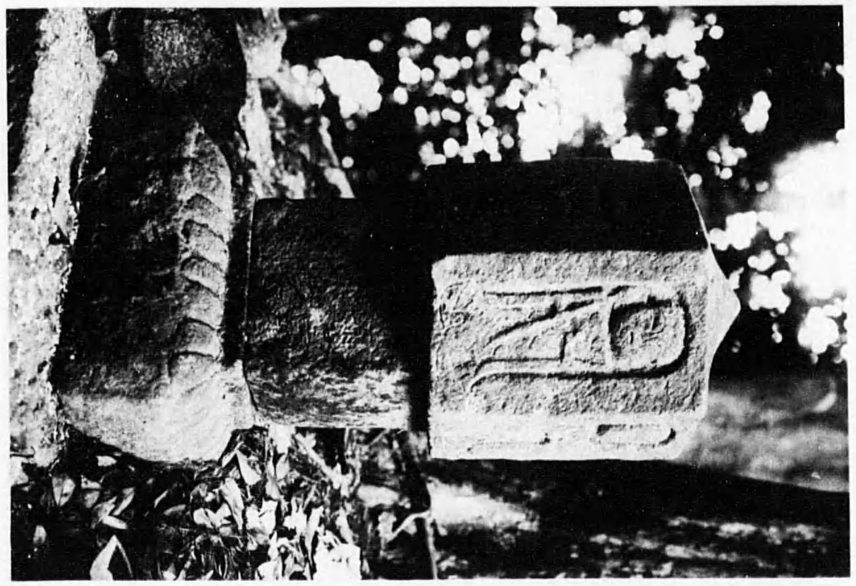


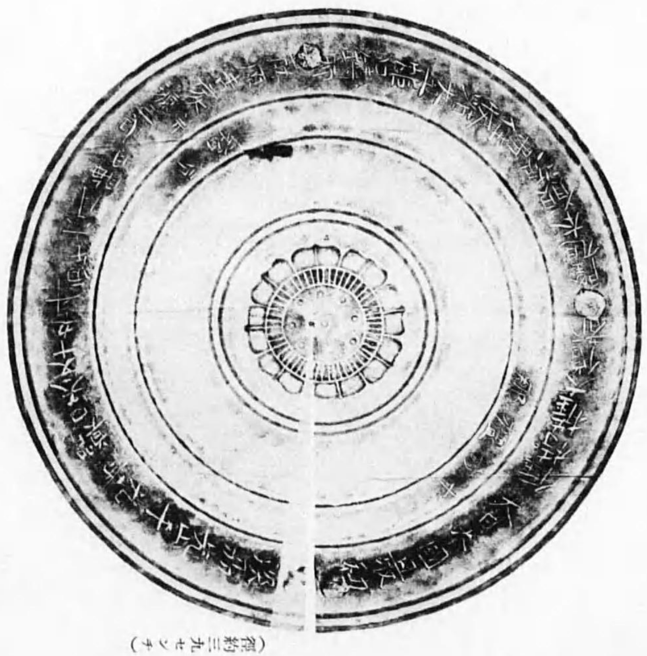
（一）千光寺鐵製如法經塔套

（徑約六〇センチ）



（二）同上刻銘拓影





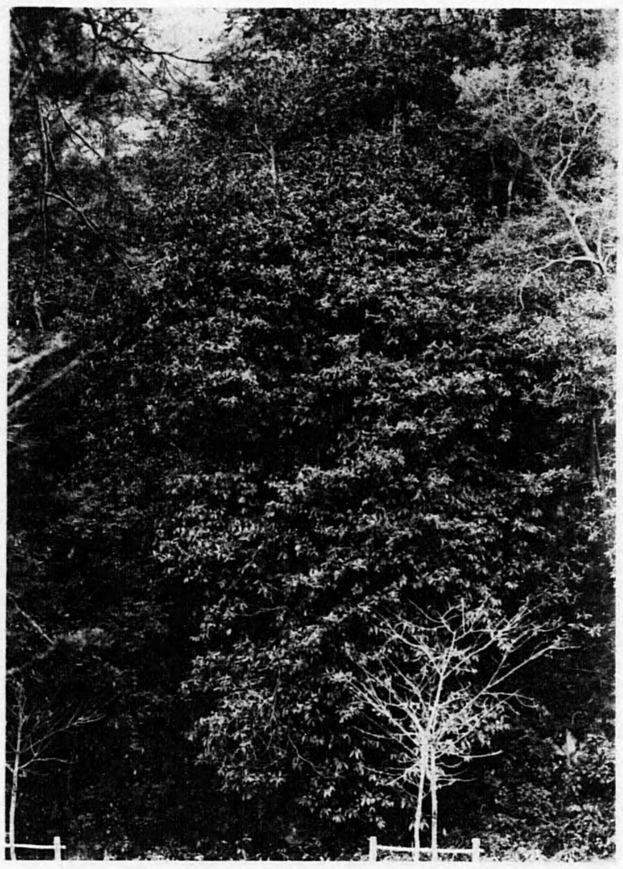
（徑約三九センチ）

影拓口鰐寺光千（右）
（銘在年三十永寛）塚申庚寺光千（左）

一ノッ灘　龍　闘

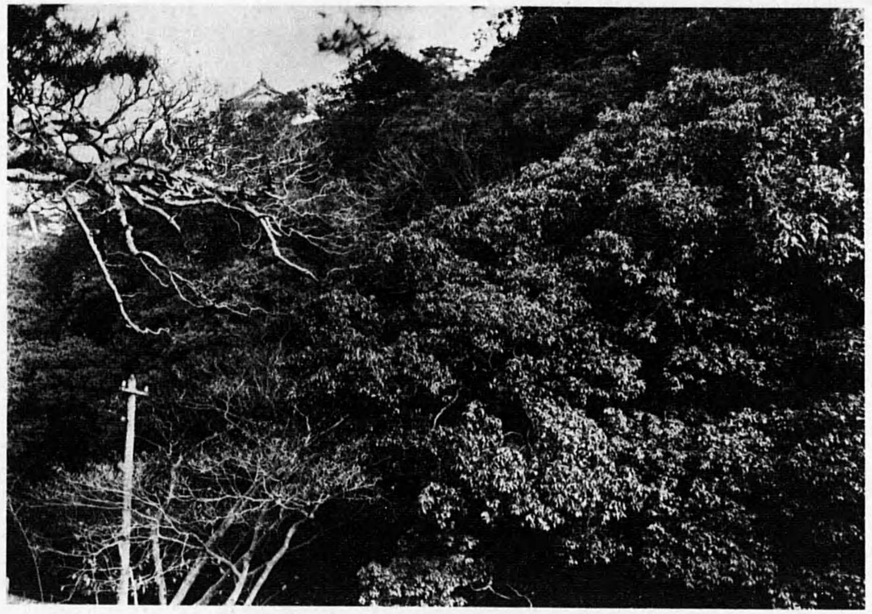
二ノッ灘　龍　闘

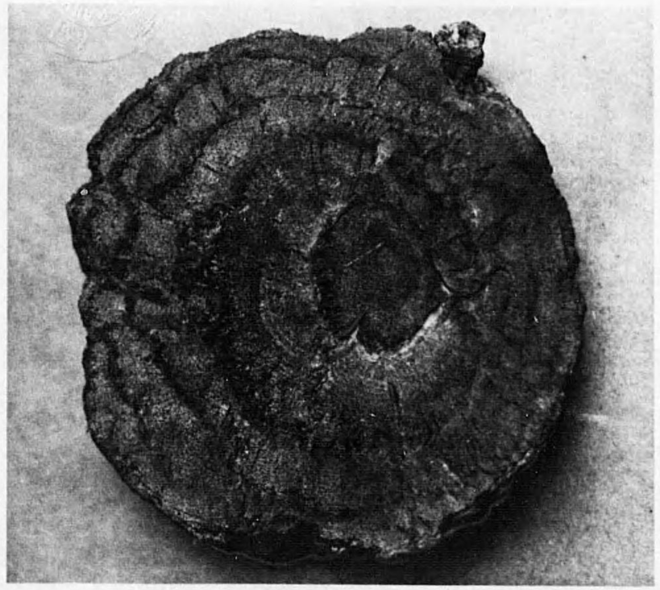
姫山公園ノ原始林　ッノ一



姫山公園ノ原始林　ッノ二

圖版第二

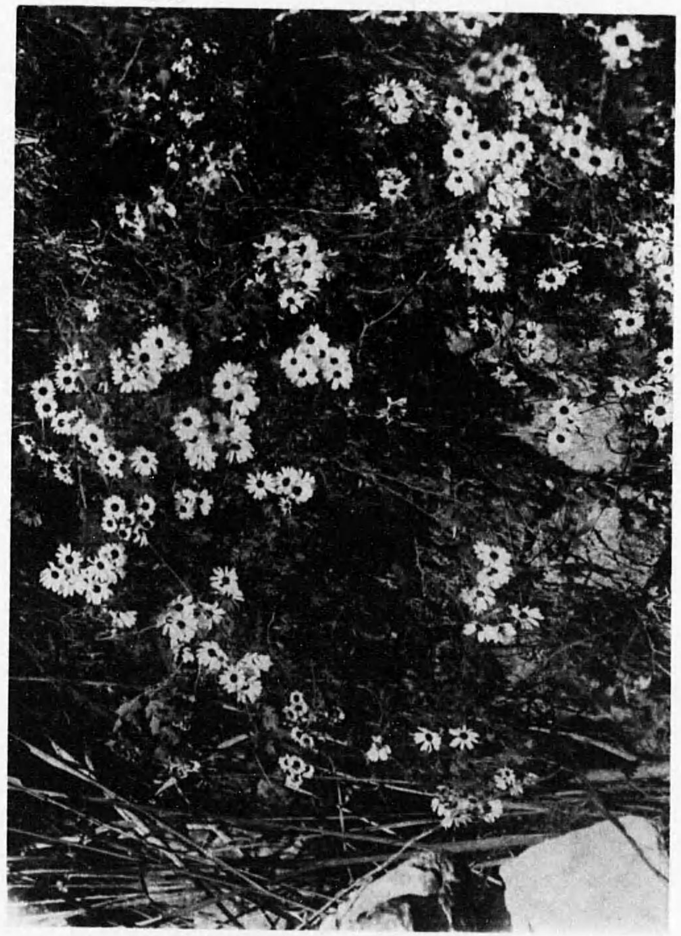




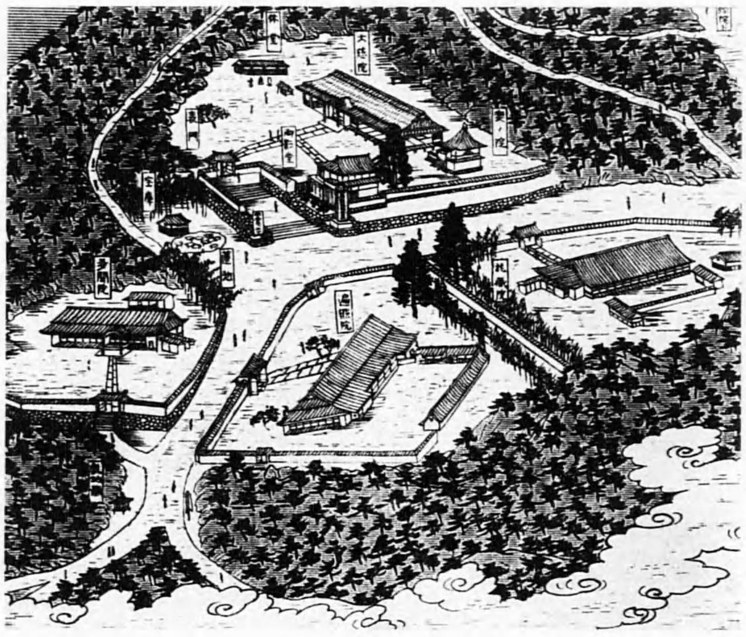
（上）姫山公園ノ原始林　ソノ三
（左方ノ上部ニ建築物ノ見ユルハ白鷺城ノ頂閣ナリ）

（下）姫山公園ニアリシ葛ノ大木ノ横斷面
（五分ノ四大）

圖版第二二



石ノ寶殿ニ於ケル「のぢぎく」ノ群落



（ス示ヲ在所ノ杉本三）　内境寺明光　（左）
杉大ノ院慈大内寺明光　（右）

圖版　第三三

圖版第二四

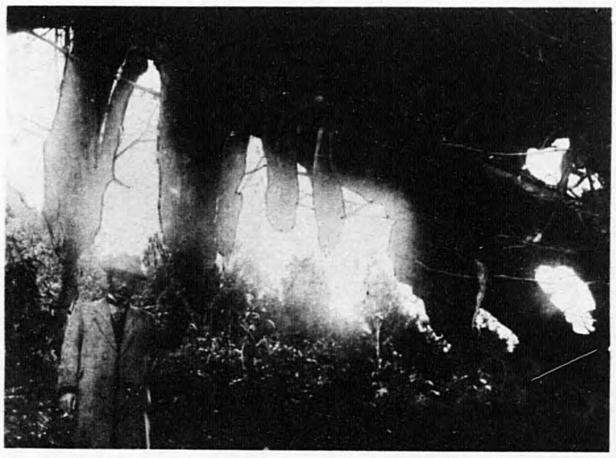
樽見ノ仙櫻

圖版第二五

玉林寺ノ垂櫻

圖版第二六

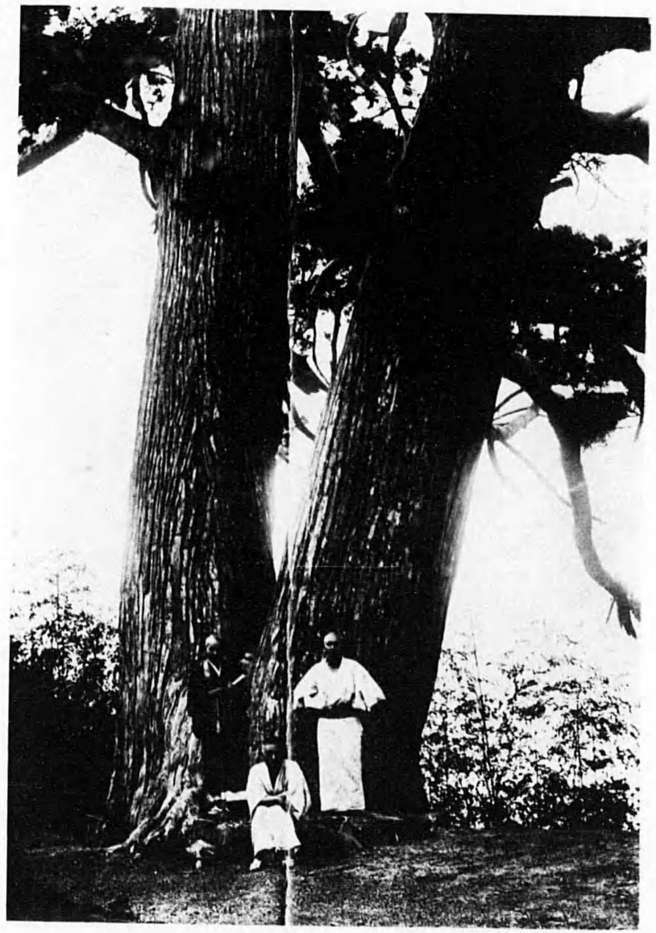
柏原八幡ノ木ノ根橋



樹孫公大ノ草名大 (左)

瘤乳ノ樹孫公大上同 (右)

圖版第二八



高山寺ノ二本杉

昭和二年三月廿五日印刷
昭和二年三月三十日發行

兵庫縣

京都市下京區柳馬場三條南入
株式會社似玉堂內
印刷者　桂千代造

京都市下京區柳馬場三條南入
印刷所　株式會社似玉堂

終